

「あのー、斯うして呉れませんか、彼奴を撒く爲に斯うして見度いんですが。」
と少年は眼を輝かせて言つた。

「ネエ、あんたと僕と一緒にこの待合室を出て近所の暗い路に入るのです。私は歩きながら暗い露路を探し出して一とまづあんたと離れて身を隠します。あんたはそのまゝぶら／＼ゆつくり歩いて再び明るい所へ出た時には彼奴、あなた一人きりになつたのに驚くでせうつて考へななです。なーに、私はうまく隠れますヨ。」

「そりやい、そりやい……が、それでは五時の汽車へ一緒に乗れないぜ。」

「うーん大丈夫ですよ。あなたの時計さへ貸して戴けば、汽車の出る一分位前に馳せ付けて汽車へ乗りますヨ。」

「その一分間に彼奴に見付からないかしら？」

「エ、僕はこれでも蟻も逼ひ出られない銅山から抜け出したんです、可成すばしつこい方ですよ。」

この際、こうした手段より他無かつた様に見えた。又少年の恚うした機智に富んだ計畫は九分通り成功する様に思へた。

「それぢやア、ひとつやつて見るか。ほんたうにうまく行らなくつちやネ。」

「エ、安心して居て下さい。私もこゝまで逃げて來たんです、九分九厘といふ處でへマを行つちややりきれませんヤ。」

「さう／＼。然しネ、最も重大な最後の一分だ、注意に注意してネ。」

「で、あんたは平氣でゆつくりどの車室でもいゝから乗り込んで下さい。私は後から——」

「さうだ。乗り込みさへすればどこかで逢へる。ではもう一寸待ち給へ、切符を賣り出したら君のも買つて渡して置くから。そしてネ、若しその最後の一分が危険と見たら無理をせずに機會を窺つて此處から一旦逃げて、あとで一人で千葉へ歸り給へ、こゝに金が三圓あるから。」

少年は何とも感謝に堪へぬといふ面貌で彼から三圓の金を受け取り且つ彼れのウォルサムの銀時計まで借りた。

暫く經つと切符を賣り始められたので、順さんは二枚の赤切符を求め、その一枚を少年に渡し、呉れ／＼も注意する様に言ひ聞かせ、且つは寒い曉方、露路に身を潜めるのは辛いだらうからと、自分のマントをも少年に二重に纏はせた。

かうしてあの黒い影を撒くべき計畫は申分なく出來た。彼が再び驛の待合室に現れた時、前庭

に佇んだ黒い影は始めてそれと気が付いたらしく、順さんが驛の入口に立つて黒い影の方をぢつと眺めると、何かしばらく躊躇して居るらしかったが、聴て何處ともなく闇に消えて行つたのである。

「よし、残る仕事は只一つだ。少年が最後の一分間を、最も有能に行つて呉れ、ばい、んだ。重大なる最後の一分間だ！」

五時十五分前、改札口は開かれた。彼はも一度未だ闇の中に黒い影が居るか居ないか確かめて見たが、諦めて追跡を中止したもののか、それらしいものも見えず悠々と車に乗り込むことが出来た朝早くの事で乗客は少い。

順さんは窓からプラットホームの時計を一心に見つめて居た。一分、二分長針は進む。

四時五十七分、五十八分、ゲイツと長針は更に一刻を進んで正に五十九分。

「サア、今だぞ。確乎しろ。俺のチャンチュー！」

彼は心の中で叫びながら、窓から半身を乗り出して、列車の後尾の方を見詰めて居た。然し、少年は中々見えなかつた。短い一分を、彼は一時間の様に感じながら、改札口の方を注視してゐたが、少年の姿は遂に見えないで、汽車は靜かに滑り出したのであつた。

堪まらなくなつて一度フォームに飛び降りた彼は、汽車が軌道の一二寸を動いた時、はつとばかりに氣付いた。「あの鋭い頭の持ち主、この驛を危険と見て人力車でも呼んで錦糸町驛へ行つたのだ。さうだ！ きつと。」

彼は驛夫が叫ぶのも構はず、一旦動き出した汽車に再び飛び乗つた。錦糸町驛での彼の少年の微笑を眼に浮べながら。

順さんは錦糸町までの時間を大變長く感じたと同時に、他方に於ては兩國驛から錦糸町まで人力車を飛ばせた少年が、汽車に遅れぬ様にと願つた。本所の夜は未だ明けない。深い闇が家々の夢を垂れ込めて、やがて来る活動の時期までの小一時間を靜かに、息づいて居る。諸所の工場から赤い煙が昇つて居た。

「錦糸町、錦糸町、かついら行き！」

驛夫が呼び始めると同時に順さんはプラットフォームに飛び降りた。そして薄暗いフォームを透して、求むる姿を探したのであつたが、彼は再び失望させられて了つたのである。

「見落したのかな、ぢやア俺はこれから千葉まで行く間に停車場毎にフォームに降りて一車づつ仔細に吟味するんだ。」

彼は市川まで来た時、既に完全に車中を探し終つた。そして不幸にも最後の失望にぶつかつて了つた。そして彼は、彼の愛すべき少年……順さんは後に言つた。その時に彼は明かに少年に對して深い愛着に似た感じを抱いて居たのだと……はこの列車に乗り込まなかつたと云ふ結論に到着せざるを得なかつたのである。

「不幸にも少年は追手に擱まつたかしら……。ネエ木野さん、恥かしながら僕は眼瞼が熱くなつたんだ。」順さんは後に語つたものである。

「或は又、あの追跡者が發車間に停車場の入口に現れたので少年は、已むなく出發を延期したのかも知れない。さうであつて欲しい、俺にはその方が幸福な、ロヂカルな推理だ。」

と順さんは思つても見た。痛ましくも順さんは千葉までを只一人で往復して了つた。生憎少年から千葉の實家の名すら聞かなかつた彼は、千葉から直ちに引返さなければならなかつたのである。

シウクリーム

順さんが寮へ歸つて来たのはその日の午前十時頃であつた。悄然として昨夜乗り越した正門を

入つて植込みの間を抜けて西寮の方へ行かうとした。

「オーイ、どうしたア、ずべつたんかア。」

突然、彼を呼びかけたのは中村であつた。應用化學志望の彼は朝一時間、菅原さんの講義を聞けば測量の實習は遣らなくてもよいので今日の土曜日を好きな處で過ごすべく出掛ける處であつた。

「ウン、一寸用事があつたものだから……。あつ！ 君、君の……」

順さんはそこで頭を一つぐわんと喰はされた様に呆然と中村の姿を見つめて、言葉を切らして唾をぐくりと飲み込んだ。

「さうか、だが何か變だぜ君は、外出せんか。」

「僕はその……一寸工合が悪いから……」

「うんさうか、ぢやお土産を持つて來るぜ、今日は伯母さん處へ招待されたんだからな。」

中村は順さんが未だ何か言ひ度げな様子に氣付かず到大聲に饒舌りながら正門の方へ行つて了つた。

順さんは後に呆氣にとられたまゝ、その後姿を見送つた。驚いた事には、昨夜彼が木野さんと

相談の上で無断借用した中村のマントが、何の變りもなく品のよい中村の肩にすらりと、掛けられて居るのであつた。

然し順さんの驚きはそれのみでなかつた。順さんが寮の自習室に入つて見ると、彼の机上にはウオルサム銀時計と彼のマントがちゃんと置かれてあつたではないか。

順さんは顚顚をしつかり兩手で押へて机に打つ伏せになつた。昨夜の自分の行つた事は果して事實かしら？ いや、自分は夢を見て居るのではあるまいか？ いや、いや夢ぢやない。確かに自分は千葉まで行つて来た。さうすれば、中村のマントは、自分のマントは、時計は？？？ふと、木野さんの机上に彼は菓子折りと紙片れを見つけた。

「ネオピユーが今朝御馳走を置いて出掛た。皆で處分して呉れ、俺の分は先取りした——木野」と書いてある。

「さうだ、木野に聞くんだ。木野の奴、何もかも解つてるに違ひない。」

さう叫ぶと木野さんの朝寝坊を思ひ出し乍ら階段を一度に二段づつ飛び上つて、寢室へ馳せつけたのである。木野さんは例の如く左右にズラ／＼と並んでゐる萬年床を從へて、室の中央に相變らず深い眠に耽つて居た。

「木野さん、オイ、どうしたんだ、説明して呉なきや、僕あ解らないんだ、オイ、木野さん。」

木野さんは、やつとポツカリと充血した眼を開いた。そして更に口許を歪めて居たが、臆てその口から素晴らしいでつかい笑ひを順さんの顔に向つて爆發させた。順さんが始めの内は眼をパチクリさせて、終りには恨めしさうな顔で木野さんを眺めるまで、木野さんは笑ひに笑ひ續けた。

「ネ、順さん、君はネ、イヤ君がネ、ワハハ、、、」

「オイ、聞かせろヨ、解らないんだ、僕ア、君の笑ひですつかり感情を害して居るんだ。」

「うん、さうか、うん尤もだ、いゝかい順さん、僕もあれから今朝の七時頃まで眠らなかつたんだ。」

木野さんは漸く床の上に腹這ひになつて、丸っこい顎に兩手で頬杖をしながら語り出した。

「僕は君が寮の前の庭を歩いて行く蹺音を聞いて居る内ふと思ひ付いたんだ。何一寸した好奇心サ、君が如何なる行動を採るかと思つてネ。で、直ぐ仕度をするよと君達を尾け出したんだ。」

「エツ！ ぢやア君かい、あれは。」

「まあ聞けヨ、僕は君達に氣付かれずに行く積りだつたが、つい神田明神前で見付けられたん

だ。あの時、名乗りかけて了へばそれまでだったが、又僕の例のいたづら気分が出てネ。正體の知れない追跡者としての芝居を演じ様と思つたんだ。だが、今から考へると偶然にもそれが好結果になつたんだよ。で、兩國驛までは君の承知の通りなんだが、今朝の五時頃からは君の全く知らない意外な幕が切つて落されたわけさ。」

こゝで木野さんは話を一寸句切つて、枕許の敷島に火を點けてゆつくり煙を吐いた。昨夜自分があんなに迄氣にした黒い影が木野さんと判つた順さんはひどく不平らしい又消けた色を顔に示して木野さんの話の續きを待つ。木野さんはもう一度敷島を甘味さうに一服やつた。

「順さん、君が兩國驛の待合室入口に立つて僕の方を睨める様に眺めた時、僕は君一人だとは、實は知らなかつたよ。少年は待合室の隅にでも居る事と思つて居たが、君が餘り僕の方を見るのもう此邊でお別れにしようと、あれから河岸の方へぶらぶら出たんだ、そして何氣なく橋の方を見ると、マントを着た少年らしい奴が橋の方へ小急ぎに走つて行くんだ。僕はオヤツと思つた。君の話では少年は千葉へ行くべき筈だつたからネ。順さん、ところで、少年の行動を君は何と解釋するかエ？」

木野さんは又意地悪く話を切つて得意さうに順さんの顔を見上げた。今度は順さんが黙言つて

敷島を一本抜き取る。紫色の煙がゆるやかに寢室の窓から小春日和の寮庭へ流れ出た。

「で、僕は不審に思ひ乍ら、直に少年を尾けた。何か君の計畫に齟齬を來たした様な氣がしたのでネ、兩國橋にかゝると彼はマッチをパツと擦つて巻煙草を吸ひ出した。僕も吸ひ度くなつたが、生憎くマッチの箱が空になつて居る。といつて少年を呼び止めて借りる譯にも行かず、我慢して尙少年を尾けて行くと、いゝ鹽梅に少年は吸ひ残りの巻煙草を橋の上に投げ捨て、呉れたんで、僕はそいつを拾つて自分の敷島に火を移さうとしたんだ。所が、見るとその吹殻が少年に不似合ひな金口である事に氣が付いたんだ。ネエ君、銅山から脱出して三日三晩、水許りで居た奴が袂から金口を出したつてのは、少し變ぢやないか。」

「うん、それや、全く……」

「君が買つて少年に與へたとも考へられない。何故つて、君は未だ曾て敷島すら買つた事のない男なんだからネ。」

順さんは手にして居た敷島を一寸眺めて苦い顔をした。木野さんは構はず話を進める。

「さうと氣が付くと僕は奴を全速力で追ひ始めた、奴、氣が付いた時は遅かつた。それに後で解つたが、奴二枚もマントを着て居たのでランニングの不得手な僕にも難なく押へられたんだ。僕

は奴が何とかかかんとか文句を云ふのに、耳を藉さずにぎう／＼絞め上げてやつたのさ。
 で、奴が苦しみの餘り白状した處に依ると、奴はマントを詐取してそいつを質屋へ持つて行くべく芝居がかりで君の同情心を釣つたんだ。銅山の話など全く出鱈目サ。可愛らしい位小さな詐僞なんだが、それを聞いた時僕は君の寢室での眞剣な態度を思ひ出して笑へなかつた。眞心が裏切られると口惜しいからネエ。」

順さんは一言も云はずに悄氣返つてゐた。木野さんも流石に氣の毒さうな顔をしつゞける。

「僕はマントだけと思つたので、奴の着て居るマントを二枚とも取り返して來たんだが、マントのポケットに銀時計と金が三圓あつたので、僕もつゞ／＼君といふ人の、好人物なのに驚いたぜ。」

「うん、でもそんな奴とは思はなかつたから……」

「僕は君の心持ちを想像して奴に言つてやつた。人の同情心などを利用する詐僞は一番男らしくない遣り方だつてネ。遣るならもつと大きな事を遣れ、石川五右衛門の様に。と言つたら奴ベソを掻いてネ、謝つた。然し君が奴の身の上話しにホロリと參るのも無理は無い。僕が奴を引き起した時、奴ベソを掻いて居るので一寸可哀想になつて着物の泥など拂つてやらうとするね、君、今の今迄さも悔悟したらしく泣きじやくつて居たのが、ツルリと僕の脇の下を抜けて逃げた

んだ。僕がボンヤリして居ると七八間向ふで、わざ／＼軒燈の下に立つてペロリとべつかんこうをして見せたんだからネエ。僕あもう追ひ掛ける勇氣も無く、奴の芝居の上手さに感心して了つたんだ。イヤ元來があの子は頭がいゝんだぜ、本郷から僕が尾けたのを刑事に尾けられてると思つたさうだが……」

「僕には、足別からの追手だと言つたし、僕も全くさう思つたんだ。」

「だから奴、頗る頭がいゝつて言ふのだ。少年はネ、刑事が怖かつたのだが君といふ學生が傍に居さへすれば萬一の時辯解して貰へるし、何かと都合が好かつたんだ。で、君には足別からの追手と思ひ込ませて置いて、刑事を撒くべき適當な時期まで君に護衛させたんだ。」

「では、兩國驛では刑事と僕とを同時に撒く爲に、あゝした計畫を樹てたのかナ。」

順さんは木野さんに兩國驛でいかに少年が名案を提出したか話して聞かせた。

「さう／＼、その通り頭がいゝんだ、然も君から貰ふべきものだけはちやんと貰つた上で、最後の計畫を實行したんだよ。が、金口を隅田川へ投げ込まなかつたのが、奴の失敗だネ。」

これで順さんの疑問の大部分は了解された。が、只一つ最後に聞かなければならぬ事があつた。

「ところで、自習室の菓子折りは？」

木野さんは、愉快さうにニヤリと笑つた。「その歸りに、實は岡野で僕が大枚二圓のシウクリームを買つて來たんだ。君のマント、中村のマント、ウルオサムの時計の代償として、當然君が皆に御馳走すべきぢやないか。」

順さんはそこで更に不安氣に言つた。「で、同室の奴等、皆わけを知つてるんかい？」

「いや、安心し給へ、僕と君以外には誰も知らない。」

順さんの顔には漸く笑が浮んだ。昨夜から今朝へかけての活動寫眞の様な光景を再び思ひ浮べながら、

「木野さん、シウクリームの僕の分け前は未だ取つてあるかい？」

秘密結社

八人組の秘密結社が出来上がった時、その首領金井平太郎君は、ほつと胸を撫で下ろした。さうひどく骨を折つたのではないが、この結社に就いては、彼が殆んど全部の計画を樹てたので、自然と首領の形にされて了つたのである。然し、金井君は奸智に長けた方でもなし、又悪度胸で、世間の攻撃的になる様な事を遂行する柄でもない。どちらかと言へば、極く無邪氣な人間で、強ひて缺點を探せば、エネルギーの消費を極端に切り詰めたがる位が、唯一の缺點とも思はれた。

勤儉と吝嗇とが隣り合つて居る様に、金井君のこの性質は怠惰に近かつたかも知れない。だから氣の短い、せつかちな金井君の父親は、しばしばかう言つて怒つたものだ。

「この情け者めが、激しい活社會ではお前なんぞ碌な者には成れないぞ」と。父親の叱言に慣れつこになつた金井君は、その後で直ぐと弟に言ひ聞かせる。

「能率の増進は近代文明の一大目的だ。いや文明開發の手段だ。最小のエネルギーを費して最大の効果を収めるのが、一番文明的なんだ、お前もこの兄をよく見習つて置け」

弟がこの兄に甚だ従順であつた事は勿論だが、秘密結社には無關係である。

いつたい、金井君のやうな性質のものは、到る處にごろくして居るもので、彼が或る高等學校へ入學した時、その寄宿舎の自修室の中に七人も揃つて仲間を發見したのは、さう大して不思議がる程の事ではない。そして、皆んな頭はいゝが成績は悪いといふこの連中が、秘密結社の同人だつたのである。

第二學期の試験が、眼の前に迫つた時だつた。Sが突然かう言つた。

「たうとう、試験日割が發表されちやつた。あゝ」
 何もたうとうと言ふ事はない。極めて當然な年中行事なのに、そのたうとうが不思議にも皆んなの同感する處だつた。

「なんとからまい工夫はないかなあ、俺は試験の度毎に若い命を削られるんだ。あゝ」
 その時、本立ての向ふから丸い顔を覗かせて金井君が答へたのである。

「あるとも、大いにあるさ。俺の計劃にさへ賛成すれば」

金井君には機会が欲しかった。暑中休暇の時から考へて居て、實行したくて堪まらなかつたさうである。結果では、教授の眼を晦まして良好な成績を得る事になるかも知れないし、又善良な學生には決して奨励出来ない事だが、金井君の動機は至極單純で、「あまり勉強せずに試験を通過する」それだけの目的だつた。

もう言はなくともこの事だが、八人組の秘密結社とは、八人組のカンニングの組合なのである。で頭のいゝ他の七人は、一も二もなく同意して了つた。八課目の試験の中で、只一課目だけ勉強すればいゝ事が、素敵に氣に入つて了つたのである。

試験の最中に、青息吐息の連中を悠然と見渡しながら小説を讀んだり、明日の試験を控へて芝居見に行つたりする時の痛快な氣持は、鳥渡忘れ難い味を持つて居る。試験が嫌ひであればある程、その時に感じるよさの度は強い。結社同人は揃つて、そのよさの値打を十分に評價し得る人達だつた。だから金井君達が、さうしたよさを享樂するのを、人はやけくそと誤解したかも知れないが、彼等のよさは心底からのよさであつた。頭の悪い學生は、ノートを開いたり閉ぢたりした揚句に散歩に出る。そしてその途中で堪へず不安に脅かされるが、それとはまるつきり趣が變つて居た。

さて、金井君の立案に依れば、八人の中一人だけは交代に自修室に残つて、極めて眞面目に試験準備をせねばならなかつたが、それだけは己を得なかつた。それに一日に一課目の試験で合計八課目だつたから、一日だけ猛烈にすれば、あと七日間、まるで自由に怠けられるのだつた。で、擔任課目を選定する事になると、學科に難易がある爲に少し面倒臭かつたが、どうにか人選が出来て了つた。KもTもEもYもSもIもOも、それぞれ八課目の中に一課目位は自信のある、又は自信のありさうなのがあつたからである。そして金井君は、

「俺はどうでもいゝや」

と言つた。それは、金井君がどの學科にも自信があるといふ意味ではなつて、彼には八課目のどれもが同様に苦手だつたのである。で、結局は試験日割の最後に据ゑられた獨逸語が、金井君の擔任と決まつた。骨の折れる仕事はなるべく後廻しにしたがる金井君は、それで十分に満足であつた。

受験場で答案を仲間に通ずるには、これ又金井君の案が採用された。受験當日に限つて、結社同人は常よりも二十分早く起床して、他の學生に先じて教室に入る事、それだけで完全だつた。教室の窓に沿つて四吋の暖房管が、床をすれすれに這つて居たが、それにびたりと喰付いて

並べられた一列の机を、八人で占領すれば、机と壁との隙間を利用して、自由に答案の運搬が出来る。然し學生は早い者勝ちに、暖かい暖房管の傍の机を占めるのが習慣であつた事が、一層この案には都合がよかつた。

かうして完全に作戦準備が出来上つた時、金井君はほつと胸を撫で下ろして、のびのびと安逆の氣分に浸つたのであつた。

二

第一日目はEの擔任で力學の試験だつた。

凡ては豫定通りに進行した。机の横でコツ、コツ、コツ。左手を後ろへ廻す。荒い藁半紙の手觸り。金井君はすらすらと一問題を解き終る。コツコツコツ。その次に廻つて来たのは方程式だけ寫して、わざと計算を間違へる。續いて第三、第四の問題。それで終りだつた。Eが最初に答案を出した。しばらく經つてYとI。教室から出たくて堪まらないのを、ちつと耐へて、金井君だけが最後まで残つた。

自習室へ歸ると、皆が待つて居た。

「ばんざーい！」

Eまでが一緒になつて金井君の胴上げだ。

「明日はYだ。化學だぜ」

「うん引受けた、皆遊びに出かけろ」

「いゝか、頼むぞ。」

「よし、十二時までは自習室へ歸るなよ」

「オーライ、お土産は甘栗だぞ」

Yだけを残して校門を出た七人は有頂天だつた。流石に第一日目だけには多少の不安があつて、金井君以外は、皆、幾分づつかの準備をした上で、試験場に臨んだのだつたが、平生そんなに力が得意でもないのに、擔任者Eの答案は誠に完全無缺であつた。重い責任を負へばこそ、あれだけに出来たのだつたが、それが益々力強く、このカンニング組合の絶對安全を證明して了つたのである。

さうして第二日目の試験はもつと手際がよかつた。

答案の運搬も上手になつた。Yの答案も略完全だつた。それに化學の答案などは、その内容が

同一でも、書き現し方が非常に自由だったので、後で話し合つて見れば、八人共に満點に近い答案を出して居るのだつたが、それが同一答案の焼き直しとは、到底氣付かれさうにも見えなかつた。

「おい、素敵だねえ、ウフ、」

「全くだ、金井は頭がいゝんだなあ……」

「來學期もやらうぜ……」

「うん勿論だあ……」

「卒業までずつと續けるんだ。なあおい皆んないゝだらう……」

かうなると、單に試験を樂に受けられるといふ無邪氣な喜びばかりではなかつた。金井君には、自分の發明にかゝるカンニング方法の成否そのものが大きな興味となり、二三の者には、うまうまと教授の眼を瞞着する事、それ自身に奇怪な興味と刺戟とが感じられた。そしてあくせくと散歩の時間までを節約して机に嚙り付いて居る連中を見ると、その前に立つて自分達の、このうまい祕密結社の事を誇り度い氣持すら、うづうづと湧き立つても來るのであつた。又、未だ擔任課目の終らないものも、自分の責任に就て、それ程の氣苦勞は不必要だつた。仲間の要求が、

良成績を得る事ではなくて、落第點を貰はない事だつたし、勉強さへすれば、注意點だけは免れるのが、これ等の、のらくらで頭のいゝ學生の特質だつたからである。

三日目の試験が終つた時も、その自習室には只一人Sが残つて、他の七人は徹底的に外出を享樂して了つた。

だが、第四日目、A教授の試験が終るとふいに、思ひもよらなかつた暗い心持が、誰彼の胸に芽を吹き始めた。試験の成績は申分なかつたが、自修室でYがふとこんな話をしたのである。

「何だか俺はAさんに氣の毒な氣がしたぜ」と彼はYに向つて云ふのだつた「何故つて、別に理由はないさ。けれどもAさんの好人物らしい顔を見詰めて居ると、そんな氣がして來るんだよ」

「……………」Yは黙つて居る。

「そりやMさんの様な残酷な試験の時は大いにやるべしだが、どうもAさんには、こつから脅え出すのかも知れないぜ。あんまり好人物だからなあ」

「うん、かも知れんなあ、俺達のやつてる事がいゝ事でないだけは確かなんだから……」

その時、金井君やEやSが一齊に野次り立てた。

「よせやい、何言つてやがるんだ……」

「Kはセンチメンタルで駄目だなあ……」

「Yだつてそんな柄ぢやねえぞ……」

「そんな心配よりや、明日の準備を頼むぜ、Kの受け持ちだらうが……」

「その通りつ！ 俺達は寄席へ行くんだ……」

それでYのセンチメンタルリズムが、びしやんと押し潰された筈だが、この會話が意地悪く皆んなの耳の底にこびりついて離れなかつた。然もそれがだんだんに胸の奥深く喰ひ込んで行く。日が経つに従つて仲間の内に、一種の白らけ切つた氣分が働き始めた。試験場から歸つて來ても、如何にして答案を次へ廻したか、どんな風に書き改めたか、どの問題にいかなる故意の誤謬を作つたかを、以前程には話し合はなくなつて來た。

得態の知らない壓迫が、結社の上に弊ひ覆さつた。誰でもよかつた。只言ひ出しさへすれば、即座に、結社は解散されたかも知れなかつた。「おい、お前言ひ出せよ」といふ眼が時々チラリチラリと向け合はされた。でも何事も言ひ出さずに、ふつと眼を外らす。探り合ひ、氣まづさ、さうしたものゝが知らず識らず皆の胸を往來した。

その状態であり乍ら、づるづるべつたりと、最初の計劃通りに五日目、六日目と試験が済んで

行つたのは、頭がよくつて勉強の嫌ひなこの連中の通有性、薄弱な意志の爲もあつたらう。實際、彼等にとつては、多少の良心の呵責はあつても、兎に角、樂に試験を通過する事は、抵抗し難い誘惑でもあつた。然し最後まで、この不安定な仲間を引張つて行つたのは、主として首領金井君の餘りに無邪氣な、物事に拘はらない態度であつた。金井君だけが、この陰鬱な氣分を超越して、極めて愉快に日を送つて居た。そして彼は時々かう言つては悦に入るのだつた。

「何んてえ素敵な考へだつたらう。こんなに能率のいゝ事はたとあるめえ。この偉大な發明に對して諸君は、來學期から俺の擔任課目を免除するだらうなあ、アハ、ハ、ハ、」

三

事實、金井君には、責任課目の獨逸語がいやに氣になつて來た。

六日目まで、彼は與へられた特權を極度に享樂した。芝居、寄席、散歩、小説、活動寫眞、そして晝寢といった工合に、それはまるで休暇中以上に遊び廻つて、寄宿へ歸ると、へとへとに疲れて居る位だつた。

さて、金井君が獨逸語を引き受けた理由は前述の通りだが、他の七人がそれを避けた理由は、

皆に獨逸語が苦手だつたからである。が、然し、金井君がその中では比較的獨逸語が出来たとも言へなかつた。寧ろ金井君が一番不得手だつたかも知れなかつた。だから金井君が、試験の終りに近づくに従つて、それを氣にし始めたのも無理もないが、聞いて見れば、俺も俺もと言ふ者ばかりで、他の七人が揃ひも揃つて、前學期にM教授から注意點を買つて居る事を發見した時には、流石の金井君も蒼くなつて了つたのである。是非とも満點請合の答案を作らなければ、皆に合す顔がないのだつた。

準備には一日早かつたが、六日目の試験が終ると、殊勝にも金井君は獨逸語の教課書を机上に開いた。

辭書を片手に第一頁を出す。その第一行に、金井君は知らない單語を二つ見出した。第二行に三つ、その次の行に一つ。そして遂に各行平均して約一つ半。ものゝ二十分、金井君はその第一頁と睨めつこをしたゞけで、何思つたか、ぶいと外出して了つた。全然手にをへない代物だつたのである。

本の表題は、「アインスタインの「Über die spezielle und die allgemeine Relativitätstheorie, gemeinverständlich.」で金井君には、その題の最後の單語すら知らなかつたが、アインスタ

インと、相対性原理だけは判つた。さうしてすぐと、「こいつは日本文でもさうさうは意味の取れない奴だ」と閉口して了つたのである。

いつたいが、M教授の撰擇する教科書は無茶苦茶だつた。教授は自分にも、未だ初めての書物を教科書にする。其代りに、學生には決して翻譯させずに、教授一人で一時間に四頁位を譯して行くのが常だつた。だから小説などが教科書にされると、途中で猛烈な戀愛場面などに出會して、M教授が翻譯に當惑し、學生が無性に喜ぶといふ様な餘興もあつたが、教授はこの調子で一學期に百頁餘りも進む間、學生が教科書に譯を書き込む事は勿論、ノートを取る事、イヤアンダーラインを引く事さへも嚴格に禁止した。従つて、若し金井君が眞面目にその講義を聞いて居たにしても、教科書に日本語のルビは振つてない筈だつた。その上に金井君は、M教授が學生に譯させないのをいゝ事にして、しばしば出席簿の返事を、教室の窓の外から、答へたのである。彼にはこの教科書が、まるつきり新しい本を讀むのと變らなかつた。

で、金井君は、それこそやけ糞で外出したが、散歩の途中ふと「その本の邦譯がありはしないか」と氣が付いたが、不幸にも發見出来なかつた。げんなりとした足付きで、彼は寄宿へ歸るよりほかなかつた。

第七日目の試験が終つた。

もう明日一日だとの考へが七人の心持を明るくした、「今日で俺達は全部の責任を金井に任せ
た」との心持が、言ひ合せた様に七人を浮き浮きさせた。そして、さうなると奇妙にも……それ
は喉元過ぎれば熱さを忘れる……といふ古い諺通りに、

「來學期もう一度やつて見てもいゝな」といふ考が、ぼつぼつと頭を持ち上げて來る。

「金井、しつかりやつて呉れ、頼むぞ」

と言ひ残した七人は、久しぶりで晴れ晴れとした氣持で散歩に出て了つた。

「うん……」

返事だけしたが金井君は、ぼんやりと教科書を眺めたまゝで、いつまで經つても第一頁が開か
れたまゝであつた。ぢつと見詰めると、小さい魔物の踊り子が、際限もなく並んだ姿に、彼はく
ら／＼と眩暈がしさうだつた。

いらいらと時計の針の進むのを眺めた。でも何とも仕様がなない。

然し、やがて、頭のいゝ金井君にはある決心が出來た。それは試験問題の「當て込み」をやる

事だつた。語學の試験に當て込みをやる程馬鹿氣た事のないのも、十分に承知して居たが、この
際、他の手段もなし、又金井君には金井君だけの考があつたのである。

彼は早速上級生の部屋を訪れた。

「あの濟みませんが、Mさんの去年の教科書をお持ちでせうか」

「さあ」と、上級生の一人が、親切に本箱を探して呉れた、「ありましたよ、これです、ヘッベル
の自叙傳です。なにになさるのですか」

「はあ、とても間に會はないので當て込みをやるのです」

「でも、今年の本が別でせう？」

「えゝ、ですけれど……その鳥渡、考がありますから」

金井君は去年の問題、前學期の問題を通覽して、その間にM教授の試験問題出題傾向を發見し
ようと企てたのである。極めて危ない、見込の無い、無鐵砲な思ひ付きだつたかも知れないが、
せつば詰つた金井君には、藁をも掴む瀕るゝ者の心理が働いて居たのであつた。

「で、去年の試験問題は覺えて居られませうか？」

「さうですね、たしか本に印しだけ付けて置いた積りですよ」

何といふ大きな幸運であつたらう。其几帳面な先輩は、一々「印を記入して置いたのだつた。大變な意氣込みで金井君は、集めた九つの問題、獨文和譯を調べ始めた。けれどもその間から普遍的な何かの傾向、M教授の選擇癖を見出す事は随分六つかしいものだつた。若し小説ならば、會話が叙景か心理描寫かとの分類法が出来たかも知れないが、金井君の教科書は、餘りに小説と縁が遠かつた。各章の初めの部分か中程か終りか、それも全く無意義だつた。折角の金井君の決心がいつか又鈍つて、幾度かこの計畫を捨てようとする。そして又辛くも踏み止まつて眼を皿にして問題を見直す。時は容赦なく費されて行つた。……

たうとう最後に、最も氣の進まない方法に手頼るより外なくなつた。辭書を引くのが厭だつたが、各問題を丁寧な日本語に譯した上で、も一度調べるより他ないのだつた。今迄では只漫然と、概括的に、各問題を調べて居たのである。

そしてその結果は、金井君が、努力の効果にびつくりした程、大した收穫であつた。それも只一問題だけを、今迄より少し巨細に吟味しただけで、忽ち努力が酬はれたのである。

どの問題も、いやに長かつたが、金井君の氣付いたのは、そのどれにも句點（・）が只一つしかない事だつた。コンマやコロンやでたらたらと接續されては居るが、皆、たつた一聯より成る

文章だつたのである。然も、あまり長いのに感心して、何氣なくその行數を數へた時、金井君は、見る見る氣狂ひの様に踊り出して了つた。

どの問題も、かつきり廿五行だつた。

どの問題も、句點一つのみを有する、廿五行の一文章だつた。

凡そ十分間、誰も居ない自修室内を金井君が、縦横無盡に踊り廻つた。

「偉大な新発見！

俺の頭のよさ！

廿五行だ、廿五行だ！

そして同時に金井君は、M教授のこの奇怪な選擇標準を、無暗に感心して了つた。

「Mさんが殘酷な問題を出すつて、ヘン。Mさんの教授法が成つて居ないつて、ヘン。それは頭の悪い奴の言ひ草だ。あれでいゝのだ、あれでこそ眞の天才を育てられるのだ。そしてMさんは、俺の様な頭のいゝ奴を待つて居るのだ。M教授を知るものは俺だ。俺を知るものはM教授だ。Mさんは話せる、話せるとも……」

金井君は笑つて見たり、力んで見たり、遂に堪らへられなくなつて、得意なオンチ節を、高ら

かに唱つた。

西郷薩州さんは——

話せるお方——

花の吹雪に——

濡れて立つなら、

よいしよ、アよいしよ、よいしよ——

四

M教授の悪戯氣たつぷりな顔を、金井君は嬉しさに見上げた。

落ち付いて問題を受け取つた。問題は見る必要もない筈だつた。昨夜調べたところでは、條件

に適合する廿五行の文章は、たつた二つだけで、彼はそれをうん呑みにして居た。

けれども、あゝ何たる不思議だらう。

問題は只一題で、然も金井君には全く覚えのない文章だつた。

「こが一つしかない事は豫想通りだつた。長さも略それに近いらしかつた。

でも、でも、金井君には手の付け様がなかつた。

コツコツコツ。催促！

金井君は焦つた。

コツコツコツ。又催促！

金井君は眞赤な顔をして、矢鱈に鉛筆を削つた。そしてしばらくの後に次の机へ廻された答案には、それでも、何とか意味のとれる文章が書かれて居たのである。

ベルが鳴ると、金井君は思ひ切つてM教授の部屋へ行つた。

「先生……」と流石に言ひ澀んだが、唾をこくりと飲み込んで續けた「先生、今日の問題はあの

……廿五行の處からですか？」

「お、君は……」とM教授は、嬉しさに金井君の肩をどんと叩いた「君はたうとう見付けたか

！ 偉いぞ偉いぞつ！」

「ですけれども、先生……」金井君には何が何やら判らなくなつて了つた。

「いや感心感心、君の言ふ通りだ。廿五行の處からだよ」

「先生、でも今日のは廿五行ではありません。私は昨晚十分に調べたのですつ！」

不服さうな金井君の顔を、M教授は不審げに見やつた。

「なんだつて、君？ そりや君の間違ひだよ。廿五行なのだ。今學期の處であれ一つきりしかない筈なのだ。」

「違ひますつ！ 私が調べた處では二つあります。そして今日のは別ですつ！」

「えつ！ はてねえ……。待ち給へ、君が頑張るならも一度調べてもいゝから……」

勝ち誇つた金井君は、これなら今日の答案の出来が悪くても、どうにかなるぞと考へた。そしてM教授を得意満面で見下ろした。教授はぐるりと机の方に向き直つて、書棚から本を引き出す。眼鏡を採り上げて、バラバラ、頁をめくる。

「しまつた！」

金井君は思はず叫んだ。その時、彼はやつと氣付いたのだつた。お話にならない錯誤だつた。

迂闊とも馬鹿とも何とも言ひ方のない不注意だつた。そして滑稽な、然し悲惨な粗忽だつた。昨夜の嬉しさの餘り、今の今まで金井君は、そこに氣が付かなかつたのだ。

「ほーから見給へ、ちやんと廿五行で、ポイントが一つきりぢやないか」

とのM教授の言葉も耳には入らなかつた。

M教授の本と金井君の本とは、大きさが少し異つて居た。版が別だつた。M教授がその本を學生に買はせた時、金井君だけが掘出物の積りで古本屋から買ったのだつた。「金だつてエネルギーの一種だぜ。出来るつたけ親父から澤山貰つて、出来るだけ安價いものを買ふんだ」と彼は弟にしばしば言ひ聞かせたのである。……

……
これから先は金井君の名譽に關する事だから、あまり書き度くないが、金井君の答案が全然出鱈目の癖に、どうやら意味が纏まつて居たために、他の七人が、同様の意味を別な順序に書き改めた事は、第三學期の始めに、珍らしい多人數の姓名が揭示場に並べられて、秘密結社首領金井正太郎君が、二度と再び、その高等學校の門を潜らなかつた、其の原因と考へられるのである。

なば山荒し

「なば山荒しの話をしてやらうか」或る時僕がかう言つたら、文科出の男は「そんな殺伐な話は止して呉れ、俺は浪花節が大嫌ひだ」と言つた。癢に觸つたからそれつきり、僕は誰にもこの話をして聞かせた事がない。だが、考へて見るとこの話を浪花節や講談と間違へる方が悪い。そんな聯想をする方が悪い様だ。だから僕は思切つてこの話を發表する氣になつたのだ。

—

なんでも、松茸が出初めた頃だつたから秋には違ひない。福岡の學校に居た時だが、下宿の部屋に寝ころんで「Three men in a boat」を讀んで居ると、紺野君がのつそり這入つて來て言つた。

「おい、僕ア自殺し度くなつた！」

そいつは大變だと思つたから、僕は讀みかけの本を投げ出して、紺野君を慰める事にした。

「いつたいどうしたんだ。話して見給へ」

「うん、京子さんに失戀しちまつたんだ」

失戀した人の顔といふものを未だ見た事がなかつたので、僕は熱心に紺野君の顔を眺めたが、驚くべきことには格別變つた處がない。強ひて言へば眼に變化があつた。稍悲痛な光を漂はして僕を詰問するが如くに見詰める。つまり、恨みがましき眼差しであつた。で、僕も氣になつて聞いて見た。

「うまくいかなかつたのかい？」

「駄目なんだよ」と紺野君はしほれた聲で言つた「京子さんはね盗人ほど卑劣な者はないつて、つーんと向うを向いちまつたんだ」

「そりや當り前ぢやないか。京べえでなくつたつて盗人が好きな奴はありやしないぜ。だが、どうして盗人の話なんかになつたのだ」

「うん、それがさ、かういふ譯なんだよ」

紺野君の云ふのを聞いてみると、だん／＼にその理由が呑み込めた。僕を恨みがましき眼で見ると、事だけは甚だ不當であつたが、それはかうなのだ。

僕のいふ京べえ、即ち京子といふのは僕の従妹である。東京の女學校を卒業して半年経つたと

ころ。少し上品ぶる傾向があるので僕は嫌ひだったが、魅力のある女性ださうだ。で、この京子が伯母さんに連れられて福岡へ来たのは一週間程も前の事だったが、紺野君が忽ちこの魅力にやられて了つた。伯母さんが僕等にお土産を持つて来て呉れたので、答禮の爲に紺野君と、も一人木村君といふ友人とを連れて伯母さんの宿へ行つたのがいけなかつた。紺野君はその席で黒い顔顔をを赫あかくした。後でからかつてやつたら、又赫またあか黒くなつた。そして言ふのである。「君、どうかして呉れないかなあ」

で、どうかしてやらうかと思つたが困つた事が出来た。木村君も僕に同じ事を頼む。この方は白い顔顔をを赫あかくした。仕方がないから大岡政談の眞似まねをして、京子の腕うでを両方から引張らせて見ようかと考へたが、これには伯母さんが抗議を申立てる。僕は嚴正中立を守らうと決心した。すると二人は何かと好意を示すべく伯母さんを射落いおしにかゝつた。木村君が伯母さん達を名島へ案内すれば、紺野君が博多灣で舟遊びを企てる。木村君が東公園のお供になれば、紺野君が西公園見物を勧める。素晴らしい激戦になつて了つた。

ところで紺野君が失戀した前の日であつた。學校で材料強弱學の講義最中に、紺野君からノートの切れつ端はしが廻つて來た。——僕は悲觀した。木村の方が伯母さんに氣に入られてゐるらしい。實に残念だ!!!!——と書いてある。「!」の數が多いから僕も同情して、その夜かう言つてやつた。

「京べえはね、英雄的な事が大好きなんだ。君は中々英雄的なところがある。今夜伯母さんの宿を訪ねて君の英雄的經驗談を聞かしてやり給へ。京べえ、きつと君を崇拜するよ」

紺野君は喜び勇んで伯母さんを訪ねた。いゝ按配に伯母さんは留守で京子一人しか居なかつたので、彼は熱心に英雄傳を物語つた。先づ野球試合の應援團長をした話から始めて、幼少の頃お隣りの番犬を空氣銃で撃つた話、かなりやを狙つて居る猫の尻尾を日本刀で切り落した話、そして遂に、畑の西瓜を盗まうとして百姓に見付けられ大喧嘩となつた話まで聞かせた。と、そこで京子が「盗人は大嫌ひよ」と言つたのださうだ。

この話を仔細に聴取すると、僕も紺野君が幾分可哀相になつた。と言つて、木村君にも悪いし、どちらに味方していゝのか、はつきり決心が付かない。で、簡單に同情の意を表するだけに止めようとした。

「さうか、そいつは困るなあ」

「困るなあつて言つたつて困るんだよ。君があんな事を言ふもんだから、失敗しちまつたんぢや

ないか」と紺野君は相變らず詰問的である。

「ぢやどうすればいゝんだ」

「どうすればいゝんだつて、そいつを君、そいつを相談に來たんぢやないか」

「さうだなあ……」

「おい、何とか考へて見て呉れよう」

「さうさなあ……」

元來は紺野君が悪いのだが、頼まれると僕も俠氣が出る。ついつい何とか考へて見る事にした。紺野君が歸つた後で少し後悔したけれど仕方がない。俠氣つてものはよくないものだと思つた。

二

木村君の様子を見ようとして、僕はその翌日木村君の下宿へ行つた。夜になると伯母の宿へ出掛けるかも知れないと思つたから、學校からすぐ下宿へ連れ立つて歸つた。

「さあどうぞ」

木村君は紳士的である。部屋にも來客用の椅子を一脚餘分に備へて置いて、それを窓の傍へ出してかう言つた。

「相變らずきちんとしてますねえ」と、僕も木村君に對すると自然に言葉が叮嚀になるから不思議だ。

「まだなか／＼暑いですね」

「さうですなあ」

紳士的な木村君だが、本來口は頗る達者だ。それがどうしてこんなに改まつた物の言ひ方をするかといふと、それには理由がある。學校でちよいと、僕が紺野君に同情する様な事を言つた。だから木村君少し機嫌が悪いのだ。然し、もと／＼いつまでも無口で居られる男ではない。ぢきに隔てが取れていつもの様にむだ口を利き始めた。

「オヤ、今夜は松茸飯らしいですよ」と突然木村君が言つた。

「どうして」と僕が聞いた。

「ほらね、こゝから臺所が見えるでせう。俎で切つてますよ」

「へえ、そいつは珍しい」

姐で切るつてのは確かに珍らしいと思つたから、僕も木村君の眞似をして窓から首を突き出して見た。硝子戸を透して臺所があつた。下宿の娘さんが松茸を庖丁で切つて居た。

「なあーんだ」と僕が云ふと、

「松茸は嫌ひですか」と聞かへ。

「いや、好きです」と僕は答へた。

「珍らしいから、こゝで一緒に夕飯を食べて行きませんか」

「えゝ、有り難う」僕は無論賛成した。

「僕はね、松茸が好物です。あのシヤキシヤキいふところがとてもいゝです」と木村君は言つて「おばーさん、客膳を一つお頼みます」と大聲に下へ注文した。

聞いて見ると、木村君は松茸料理の事が大變に詳しい。どこで聞いて來たのか知らないけれど非常に通である。東京の關東煮屋では、何處その松茸飯が一番美味いかなどいふ事も知つて居た。だから、オデンの事も詳しいだらうと思つたが聞かぬのは止した。そしてその代りに、蜂の子や蝗やかまきりや蜻蛉の幼蟲やざざ蟲や孫太郎蟲や蛇を食ふ話をしてやつた。

「そいつはどうも」

と言つて木村君は不味さうな顔をする。では一つ食べて見ませうかなんて言はなくてよかつた。僕だつてかまきり以下は食べた事がない。

間もなく部屋へは二つのお膳が運ばれた。松茸のお吸物に松茸飯、蒲鉾が三切れと何か知らんが非常に色の白い植物の鹽漬け、後で聞くと白菜だと言つて木村君が教へて呉れた。兎に角、僕の下宿の食事よりも、量は少いが上等であつた。

「松茸はこの初物がね、うちです。香が高いですからね」

さう言つて木村君はお膳を引き寄せた。お椀の蓋を取るとその濡を器用にお椀の中に滴らす。中々手際がいゝ。なるほど、こんなところが伯母さんの氣に入つたのかなと思つた。

さて、その松茸飯を食べて居る時であつた。僕はふと或る計略を考へ出した。さうだ、これならきつと木村君を凹ます事が出来る。京べえが愛想を盡かす程木村君をやつつけられる。さうなれば紺野君の勝ちだ。さうだ、これに限る！

だが、考へて見ると木村君も又氣の毒だつた。紺野君だけに味方するのはえ、こ最眞ぢやないかと思つた。だから僕は、右を木村君、左を紺野君と假定して、お膳の上へ箸を立てて見た。倒れた方へ味方する積りである、さうすると箸は僕の方へ倒れた。これはいけんと思つてやり直す

と、今度は左へ倒れた。神様は、紺野君へ味方すべき事を命令し給ふたのだ。

「なにをして居るのですか」と木村君が聞いた。

「なんでもないんです。神様の御意志を伺つて見たのですよ」

僕はさう言つて大急ぎで夕飯を終り、あたふたと暇を告げた。

木村君の下宿を出ると、僕は紺野君の下宿へ一目散に駆け付けた。箱崎の海岸にある汚い家だつたが、紺野君はこれから伯母さんの宿へ出掛けようとする處らしく、制服にブラツシをかけて居た。坐蒲團の下から洋袴が喰み出して居た。折り目を付ける積りらしい。

「おい、うまい事を考へ付いたぞ。そら、学校の門番の親戚の知人の叔父さんの妻君の里が、なば山をもつてゐるつていふぢやないか！」

僕がいきなりかう言つたものだから、紺野君は眼玉をぐる／＼廻して吃驚した。まるで蜻蛉の様な男である。それで僕は大いにゆづくりその計略を説明してやらねばならなかつた。

「な、だから明日の夕方までに、そのなば山の地圖を僕のところへ届けるよ」と僕が言ふと、

「うん、さうか。そいつはいゝなあ」

紺野君はすつかり喜んで了つた。

日曜日の朝、僕は地圖を懷中にして木村君の下宿へ行つた。

「木村君、なば取りに行きませんか」

僕はかう言つて誘つたのである。

「なば？ なばつて何んですか」

「なばつてのは松茸です。この地方の言葉ですよ」

「へえ、松茸をなばつて云ふんですか、面白い言葉ですねえ」と木村君はその春九州へ来たばかりだつたからいやに感心して、

「そのなばが、そんなに手近にあるのですか」

「ありますとも！ 取りに行きませんか」

「えゝ、行き度いんですけれど、えゝ、ですけれども……」

木村君の返事が濫つて居るのは充分理由があつた。朝の間に勉強して了つて、それから伯母さんの宿へ行く積りなのである。で僕は、伯母さんが今日は先約があつて外出する事を話してやつ

た。訪ねても無駄だと言つて忠告してやつた。さうすると木村君も諦が出来たと見えてついになば取りに賛成した。

「ぢやあ行きませう。僕はまだ松茸の生えて居る處を見た事がないんです」

山へ行くといふ言葉を、木村君は大袈裟に考へたと見えて、學校の制服だけで充分なのに、仁丹を持つたり水筒を用意したり、おまけに双眼鏡まで肩からぶら下げる始末だつたから、仕度にならず少し手間がとれた。けれどもまだ時間も少し早いし、従つて手間のとれる方が僕の計略には都合がよかつたから、云ふまゝにさせた。可笑しかつたけれど、巻きゲートルをするといふのにも反對しなかつた。

「この邊はそんなに松茸があるのですか、さうですか、愉快ですねえ。僕は東京の下町育ちですから、まだ松茸狩りに行つた経験がないんですよ。松林に生えてるんでせうね。土の中に埋つてるさうですがほんとうですか。あゝさうですか。砂の處にもあるんですか。苔はどうです。山には草が多いですか。蛙は居ませんか、蛇は居ませんか、蛞蝓はどうですか。オヤ、あれは何ですか、あの百姓家の軒に吊るしてあるのは？ あゝさうですか、河豚の子の乾物ですか。子には毒が無いですかねえ。美味しいですか、さうですか。乾物では東京のくさやもいゝですよ。今度取り寄せ

て御馳走しませうか。あ、食べた事があるんですか」

木村君が喋り出すとこの調子である。のべつ幕なしに喋り續けて居る内に、僕等の一行は、と言つても二人だけだが、遂に香椎の奥、目的のなば山近くへ來た。赤土の路が曲り迂つて、其の兩側はところどころ畑もあるが大抵は松林であつた。林の外側にはたつた一筋だけ藪繩が張り廻してあつて、それが細いけれどもよく眼立つた。色合の關係であらう。そしてそれが皆なば山であつた。

「あの繩は何ですか」と木村君が聞いた。

「あれはね、この山の中になばが生えて居るといふ印ですよ」僕はなるべくぼんやりした言い方をする事に決めた。

「さうですか、村の青年團がやるのでせうか。中々親切ですねえ」と木村君は感心する。

木村君は、林といふものが皆公有林だとも思つて居るのか、この邊の事情には甚だ迂闊である。頭がよくつて、數學と製圖が非常に得意ださうだが、こんなのが卒業すると、僕等より先きに就職口が決まるのだから怪しからん。だが然し、僕には却つてこゝが付け目である。

「さうですよ。田舎の青年團も氣が利きますね」と合槌を打つて置いた。

普通なばを取りに行くのにはなば山を買ふ。山に有るだけの松茸を大體見積つて、それに相應するだけの金を山の持主に支拂ふ。その上でなば山へ這入るので、無論他の山へ這入る事は許されない。で、僕はそれより前に或る先輩から聞いた事がある「なば山を買つて了へば別だが、山を買はない限り、どの山へ這入らねばならぬといふ約束が無い譯だ。即ちどの山へ這入つてもいい譯だ。つまり山の選擇が少しも制限されて居ない。この點、山を買はない方が自由である」とその先輩は言つた。立派な三段論法だと思つて今でも覚えて居る。

然し僕には、此時に例の計略があるから、その爲に自然この自由度が減少して、或る特定なる山へ行かねばならなかつた。そしてそれを、いかにも行き當りばつたりといふ風に見せかけた方が、後になつて都合がいゝと思つて、僕は木村君にかくれては地圖を見た。

「木村君、この山へ這入りませうか」

とある林の前へ來た時である。僕は紺野君が目印の爲に刺させて置いたであらう處の、一本の青竹を見付けてかう言つた。

「えゝ、よささうですわね」

知りもしない癖に木村君はかう返事をする。

「ぢやあ」と言つて僕は、例の繩をぼんと飛び越した。木村君は繩を潜つた。すぐに、なば山特有の匂がふんと鼻の先端へ來た。

四

「茸狩りの記」に就いては、古來文豪の明文が腐る程ある。こゝではあまり詳しく描寫しない方がよろしい。要するに松茸を探せばいゝのだ。逃げる心配はないから見付けたが最後大丈夫だ。もつとも根を掘る時に少しこつがある。が、それにしても教科書に記載する程の技術ではない。林の中は大體に於て平坦だが幾分の凸凹があつた。僕は小高い場所を探して、なるべく乾いた草の上へごろりと寝た。顔の眞上が恰度圓形の空になつて居た。松の枝が自然に形造つた圓である。穴から高い秋空が覗けて、太陽がその縁へかゝつて斜にさし込む。時々穴を横切つて白い雲が流れた。

「松茸を採らないんですか」と木村君が言つた。

「ゆつくりでいゝですよ」

僕はさう答へて置いて口笛を吹いた。重なり合つた松の葉を透かして漏れ入る日光が、チラチ

ラとそこだけを明るく緑色にする。美しかった。

「や、あつた〜！ ほら、どうです」

木村君は最初の獲物を、わざ〜僕に見せに來た。なるほど立派なるなばだつた。軸の太さが一時半は確かだつた。

「や、またあつた、またあつた」

今度は見せに來なかつたが、向うの凹地で木村君が叫ぶ。そちらを見たが姿は見えない。僕は又穴から青い空を眺める事にした。

「おーい、來て見給へ、随分澤山ありますよ、おーい！」

うるさく呼び立てるので、僕も起き上つて聲のする方へ行つて見た。籠の用意を忘れたので、木村君は採つた松茸をその地面へ小山の様に積み重ねて居た。ぜんまいに似た莖の長い草を二三本折つて、それへなばを珠數なりに刺してやつたら、無暗に感心した。そんな事に感心しなくてもいゝですよと言ふと、さうですかと言つてまだ感心して居た。うるさくなつたから僕は再び以前の場所へ歸つて、今度は小鳥の鳴き聲に耳を傾けた。何といふ鳥だか知らないが可愛らしい聲である。チチガコイシとも聞えるし、クチガコイシとも聞える。小鳥が乳を吸つたり、キツス

をしたら面白いなあなどと考へてゐた。

と、突然に林の奥で聲がした。

「やい！ てめえなば山荒しだな！」

實際には、この言葉はあの地方の言葉でなければならぬ。だが、僕にはどうもあの言葉の眞似が出來ない。三年間あそこに居たので聞けば解るが眞似は出來ない。だから啖呵の標準語を用ひさして貰ふ。

この聲を聞くと、僕はがばと頭を持ち上げた。しめたつ！ 學校の門番の親戚の知人の叔父さんの妻君の里の御主人、いよ〜來たなつ！ と思つたのである。出來るつたけ音のしない様に四つん這ひになつて、その方へ近づいた。

「失敬な事を言ひ給ふな。なにが山荒しなんです！」と木村君も案外強い。

「なんだと、へん、利いた風な事を言ふない。他人様のなば山へ這入つてなばを取りやあ、なば山荒しに違えねえぢやねえか。このおたんちん石つころ野郎！」

「君、君、この山は君の山なんですか。」

「あたりめえよ。君の山ですか〜聞いて呆れらあ〜」

「君、君、鳥渡待つて呉れ給へ。ぼ、僕は連れがあるんだから相談する……」

「なに？ 連れがあるつていふのか、ふてえがつてえ」

この男は、そこで確かにふてえがつてえといふ言葉を使った。それこそその方言で、意外だといふ意味である。あらまあ、おやまあ、オヤオヤ、ひやーつ、種々に翻譯が出来るので、僕もそれだけは知つて居る。男は、それは意外だ！ といふ意味を素敵な表現法で現したので。うまいうまい！ 僕は拍手したかつたがそれだけは抑制した。そして内心で、大いにその男の芝居のうまさを賞讃したのである。

けれども、こゝで木村君に僕が発見されては少し思はしくないので、僕は急いでその小高い場所を逼り降りて、ごそくと藪の中へ潜り込んだ。可成茂つて居るから外からは見えない。眼を突つつきさうな小枝があつたので折り取らうとするやうにやりと指に絡み付いた。尺取蟲の大きい奴である。氣味が悪かつたが我慢した。そつと向ふを見ると男が立つて居る。背中にはなばの入つた籠を背負つて見るからに強さうな男だ。木村君を嚇し上げるには實にこの上なしの適役であつた。

「どうしたんだらうなあ、連れが何處かへ行つて了つたんだ」

可哀想に木村君は、ぐる／＼四邊を見廻した後、今度は泣き出しさうな顔になつた。

「へん、連れがあると云つたら驚くだらうと思つても駄目だぞ。さあ、山を荒したからには只では置けねえんだ。警察へ来いっ！」

「えつ！ 警察へ行くんですか？」

「ちたばたするな。なば山荒しは盗人と同じなんだ！ さあ来い」

實にその光景は眞に迫つて居た。男はいきなり木村君の手頭をむずと攪む。眞赫な顔で木村君が跪く。そこへ折悪くも上から小鳥がたたりと何かを落したらしい。木村君はそれに氣が附かない風だが、肩のところ白い斑點が出来た。

五

もういゝ、もう充分だ。もう紺野君出ていゝ、僕はさう思つて林の中を見透した。

豫ての計略に従へば、こゝへ紺野君と伯母さんと京子とが出る幕なのだ。紺野君はあの翌日、この山の持主に逢つて委細の計略を話し、即ち事情を明かして味方に頼み、今日は伯母さんと京子とをなば山へ誘つて、何喰はぬ顔でこゝへ出會す事になつて居た。無論これは紺野君と僕と、

そして山の持主三人だけの秘密だったが、山の持主だけは時刻を見計つて、紺野君より一足先きに山へ来る。そしてなば盗人の木村君を嚇し上げて居るところを京子に見せる、とかういふ筋書なのである。

だから僕は、もう伯母さんの一行が現れてもいゝ頃だと思つたが、中々その氣配もない。山の持主だつて、いつまでもあんな事をして居たのでは、おしまひに引込みが付かなくなつて困るだらうと思つて、僕はやきもきと氣を揉み始めた。

すると果たして嚇す方が困つたらしく、今度は筋書き以外な事を言ひ始めた。案外智慧のある男だつた。

「やい、てめえ警察へ行くのが厭ならそれでもいゝ。このなば山を買ふだけの金を出せ」

「金つて困るなあ、いくらあればいゝです」

「さうさ。まだなばを澤山取つた風でもねえから廿兩でいゝ。それで勘辨してやる」

「廿圓なんて持つて居ません」

「持つてなけりやあ……」と少し考へて、

「てめえの泊つてゐる處までついて行つてやる」

「でもすぐには……」

「なにがなんだつて云ふのだ！ やい、あまい顔をして居るかと思つてつけ上るなよつ！」

あつ！ 僕もそれにはひやりとした。男はキラリと短刀を抜き放つたのだ。木村君はさつと身を引くと松を小楯に身構へた。窮鼠何とかの譬で戦ふつもりらしい。僕はその勇氣に感服したが、それと同時にチラと妙な事を考へた。僕は飛んだ間違ひをやつたのぢやないか知らん。約束の山の積で這入つたのだが、感違ひをしたのではあるまいか。だがその考へは忽ち消えた。約束以外の山へ這入つたにしても、その持主が短刀を使つてまで山荒しを嚇す筈がないからである。さうだ、矢張りこれも筋書きなんだ。僕の作つたのを紺野君が一層効果的に脚色したのだ。然し木村君はそんな事は知らないから眞剣である。それまで手にぶら下げて居た例のぜんまいに刺したなばを、ばんくと男に向つて投げる。當つても痛くないから對手は平氣である。

「やい、金も出さねえといふならこれだぞ」と言ひながら、短刀を逆手に振り翳して、にや／＼とした顔で前へ進む。切り付ける意志のない事が、僕には、はつきり解つてゐた。

と、どうしたはずみか男は何かに躓いてどたんと倒れた。木村君、飛鳥の如く躍り掛つて短刀を持つた手を逆に捻ぢつた。ぼろり男は短刀を放した。後は打つ蹴る毆る、大變な事になつた。

かうなると男もほんとに怒つたらしい。狼の様に吼えながら下から掴みかゝるのだ。紺野君がまだ見えないので、僕は已むを得ず藪から這ひ出した。もうかうなつてはいけないと思つたから萬事木村君に打ち明ける積りであつた。

「おい、木村君、もうよせ〜。理由があるんだ」

「え？」

木村君が僕の方へ氣を取られた時である。男はむつくりと木村君を跳ね飛ばしながら起き上つて嘸鳴つた。

「さあ、ひでえ目に逢はせやがつた。もう堪辨ならねえぞ！」

「君、君、悪く思はないで呉れ、少し手違ひだつたんだ」

「な、なにを吐かす。」

僕の言ひ譯は間に合はない。男は猛烈な勢ひで木村君の方へ進まうとしたが、その時、びたと足を停めた。向うから又一人の百姓が林の中へ飛んで來たのだ。

對手が怯んだと見て木村君が攻勢に出る。あはや再び格闘とならうとして時、その百姓が二人の間へ分けて入り、いきなり山の持主をびしやんと殴り飛ばした。あつ！僕は又吃驚した。い

らん奴がおせつかいに飛び出して又山の持主を怒らせる。困つたなあと思つた。で、僕は横合からその百姓に躍りかゝつて、得意の脚取りでどたりと倒して馬乗りになつた。一方では木村君對山の持主、これと又取組合を再發さして了つた。

「いけない、いけない！ わしを押しさへちやいけないつ！」

百姓の奴が騒ぐので、僕はぎゆう〜頸を締めた。きゆう、百姓は變な聲を出す。

と、やうやくその時になつて紺野君が現れたのである。例の繩を兎の様に躍り越え、水雷の様に走つて來た。瞬間だけこの場の様子を眺めたかと思ふと、フットボールの様に身體を丸くして、ピューツと山の持主に衝突し、うーんと氣絶させて了つた。そしてその餘勢で僕を跳ね飛ばした。打ち所が悪かつたので僕も氣が遠くなりさうだつたが、しばらくの間喋れないだけで、助かつた。苔の上へ轉がされたまゝ、呆れて紺野君を見居ると、彼は百姓を引き起し、ペコ〜と頭を下げた。氣が附いて見ると、もうその時には伯母さんも京子も、五六間離れたところに立つて、怖さうな顔をしてこちらを見て居る。何が何だか、少し事情がこんぐらかつて了つたけれど兎に角大體は豫定通りに行つたと思つたから、僕は紺野君に這ひ寄つて小聲で言つた。

「おい。大體はうまくいつたんだろ」

すると紺野君は周章で言つた。「叱！ 駄目だよ。後で話す！」

「まあ、木村さんも来てらしつたのですか、あらまあ、あらまあ」

「お母様、宇う様も居てよ、あらまあ」

その時になると、もう大丈夫だと見て取つて伯母さん達もこんな事を言つた。伯母さんはいゝ年をしてあらまあなんて言葉を平氣で使ふのだからいやになる。だが、僕はあらまあどころではない。木村君と百姓とが、例の男をぐる／＼巻きに縛り上げるので、呆氣に取られて了つた。木村君もぼかんとして居た。

x

x

x

x

後で二人きりになつた時、紺野君は頭を掻き／＼かう言つた。

「なにね、目的は達したんだが、計略は外れたんだよ」

「何故だい」と僕が聞いた。

「最初木村君を嚇した奴ね、あいつはほんとのなげ山荒しだつた。方々の山からなげを少しづゝ取つて福岡へ賣りに行くのだ。そいつが木村君を見付けて強請つたのだ、あの邊では有名な奴ださうだ」

「するとあの百姓はなにかい、あの學校の門番の……」

「さうだよ、門番の親戚の知人の叔父さんの妻君の里の主人てのはあの百姓さ」

「さうかい。そいつは知らなかつた。木村君には氣の毒だつたなあ」

「うん、氣の毒だつた。それも二重に氣の毒だつた」

「どうして？」

「フ、フ、フ、フ、」

紺野君は答へなかつた。變な男である。

で、伯母さんに聞いて見ると、紺野君達は博多から汽車で香椎に行つたさうだ。その汽車の中で、紺野君と京べえが手を握り合つたのらしい。僕の折角の計略はまるつきり無駄つて事になつた譯だ。甚だ怪しからん。

だから僕は、木村君には僕の妹をやつた。妹の方がよつぽど優秀だと思ふ。

碧漾莊の主人

「たあつ、たあつ！」

へんな二聲を聞いたので、浮浪兒泉浩六はひよいと背後を振り向いた。

青味が、つた服に黒いソフトを冠り、彼はやゝ仰向き加減に、初夏の街を歩いてゐたのだ。蓄音器屋の店から流れ出す木琴の音に耳を傾けたり、佛蘭西人形のある飾窓を覗いたり、高いビルディングの角を外れて——無論夜であるが、ちよつと顔を出してゐる赤い星を眺めたり、一人つきりだとは言ふものゝ、可成愉快な氣持であつた。ツボンのポケットに片手を入れて三枚の銀貨を、無心にチャランチャランと鳴らしてゐたが、その時、たあつ！ ふとさういふ聲を聞いたのだつた。

見ると二人の紳士、白い短い鬚を下顎一面に生やしてフロックコートを着た老人、鼻下に黒々とした美髯を貯へた、そしてモーニングを着た壯年紳士。叮嚀に腰を屈めてゐた。

「たあつ！」

若い方の紳士はもう一度言つた。

「僕？」

「はい、左様でございます。失禮ですが——と老紳士。

浩六はちよつとまごついて帽子を脱いだ。二人共に全く見知らぬ紳士であつた。

詳しいことは追々分るとして、茲で泉浩六がどんな青年なのか、それをちよつと話して置かう。彼は兩親も知らなければ、故郷も知らない、言はゞ孤兒なのであつた。そも／＼彼は、彼の記憶がいつたい幾つの年から始まつたとも覺えがない。たゞ、なんでもたいへんに明るい庭先きのやうなところで、彼は青い着物の女に頬摩りをされたやうなことを覺えてゐる。それは彼の母だつたのかも知れないが、兎に角最初の記憶はそんなものである。が、場所には全然見當がつかなかつたし、然もその記憶すらはつきり記憶だとも言へない位で、といふのは、時々夢の中の出來事のやうにも思へるのだ。不思議に、その女が青い着物だつたといふこと、それからもう一つ、臉が練絹のやうにおんもりと腫れてゐたといふこと、妙にそれだけは思ひ出せるが、結局は夢か現か、言つて見れば幻影のやうなものである。そして假りにそれを最初の記憶として、そ

の後には簡單には言ひ切れぬ程、いろく／＼の經歷を過してゐた。曲馬團——スコットランド人の學僕——ホテルのボーイ——不良少年の群れ——バナ、の叩賣り——外人の案内者——といった工合である。短い年月の間によくもこれだけの経験を積んだものだが、それでゐて妙に暢氣な若者であつた。

「どなたでしたかしら……。僕一向思ひ出せないんですが、人違ひではありませんか。」
二人の紳士に向つて浩六はさういつた。

すると先方は一層叮嚀に頭を下げた。言葉も又莫迦叮嚀な位になつた。

「ご尤もで△います。御記憶のないのが當然なのでして——」

「といふと、では、人違ひ——でもないのですか。確か、たあつとかお呼びかけになつたでせうが。」

「ホ、ホ、なる程、いや、ご尤もで△います。たあつは悪うござんしたナ。」老人は左手の甲を右の掌で摩りながら「たあつは言ひ損ひでありましたが、然し、もう少し経てばお分りにもなりません。遅くも明朝までには全部御納得が参ります。」

「え？ なにが明朝なのです？」

「いや、はい、只今のところではお分りにならぬのが寧ろ御道理だと申上げるので、勿論後程あらましのことは申しませうが、時に如何でせうか、ちよつとそこまで願はれませんか。」

「一緒に何處かへ行かうと言はれるんですね。」

「左様、その通りで△います。」

「それアね、何處へでも行けつていふところへ行きますが——」浩六はそこでちよつと思案した。實は少しづつ面白くなつて來たのを、面白がつてよいのかどうか、無理に考へやうとしたのだつた。

「御思案ですかナ、ホ、ホ、ホ、ご尤もですよ。勿論御思案が必要でございませう。」老人は眼尻に細い皺を刻んだ。「が、是非ともお越しを願ひ度いので、はい、すぐそこでございますから。」

老紳士はさう言つて若い方の紳士に何か目配せをし、何もかも心得たといふ顔で先きに立つ。自然、浩六の足も動き出した。

掛絨緞を賣つてゐる暗つぼい店と、ピカ／＼した西洋皿などを並べた店と、その間にちよつとした露地があり、老人はついとそこへ身を入れた。じめ／＼として、始めにはやゝ窮屈な位の幅だつたが、四五間踏み込むといくらか幅が廣くなり、その時浩六は何心なく背後を振り向いて、

思はず、オヤ！ といった。自分を中央に挟んだ最後にはモーニングの若い方の紳士だつたのが、今見ると、それが無髯の背廣服に變つてゐた。浩六は、ハテナ？ と小頸を傾けた。「や、御心配は要りませんよ。」するとその若い紳士が、上衣の裏へ手を入れて折込みらしいモーニングの裾を引き出した。

「先刻は變装をしてみました。なに、子供騙しのやうなことですけどね、そら、あちらの老人が言ふものですから。」

「××××××××」老人は何か分らぬ早口で叱るやうなことを言ひ、それから浩六に向つて顔を突き出した。「ご尤もでございます。が、まあ、御覽下さい。いや、吃驚なさることは要りませぬ。私はかうして黒い房々した鬚に變つてゐませう。この下には白い短い奴があるのですか、この耳の邊りから垂れてゐる長々しいのは如何でせう。ホ、ホ、ホ、いえ、きつと十五六歳は若く見えます。え？ はい、私のは今度の顔が變装でして、先刻の私が正真正銘の私ですよ」氣味の悪いやうな、然し又途方もなく面白いことをやりさうな、兎に角へんな紳士達である。浩六は愉快には愉快であるが、鳩尾のへんがヒヤリと冷たくなるのを感じた。と言つて逃げる程の氣持でもない。老人の魔術に魅せられたとでも言ふものか、相變らず足を進めてゐた。

露地の中を幾度か折れ曲ると、軒燈のぼんやりと點いてゐる古ぼけた戸口へ出た。這入ると眼の前に梯子段があり、ゴトゴトとそれを登つて行つた。そしてとつつきから二つ目の扉をいとも無雜作に開いたが、老人ははツとしたやうな顔になつた。

「これアいかん。もつと靜かにしなくては奴等に嗅ぎつかれるかも知れないのだ。油斷といふものは、どんな場合にだつて賞められない。」

次の部屋では何かコト／＼と音がして、間もなくそこへは珈琲の皿が運ばれて來た。すでにその時三人は、不恰好なテーブルを前にして腰を下ろしてゐたのだつたが、老人は珈琲を手前へ引き寄せて次のやうに口を切つた。

「たあつ！ いや、これは又言ひ損ひです。泉さんと言はれますね。」

「さうです。」浩六は答へた。「泉浩六といふのです。」

「ところで泉さん、あなたは御両親のことを御存じでございますか。」

孤兒だといふことは前に斷つてあるが、唐突な言葉に浩六はやゝ度膽を抜かれた形であつた。

「……覚えがありません。」とだけ言つた。

「御承知がない。これはご尤もでございます。それで實を仰有ると、御自分の名前すら何時誰に

付けてお貰ひなすつたか、それも御存じがありますまい。なにしろあなたはさういふことを一向お調べになつてゐない。樂天家とでも申上げませうか。」

「え？ え、さうです、その通りです。」浩六は周章で氣味だつた。「僕は、僕は誰からともなくさう呼ばれてゐるのです。なんでも曲馬團に——え、僕は子供の頃曲馬團にゐたのですが、その頃から今の名前なので、それから後は——」

と言ひかけると老人は、右の手で浩六の言葉を押へるやうに「ま、ま、よろしうございます。これまでの御經歷は私共がよく知つてをります。念の爲に申上げて見ませうか。」と、そこでちよつと考へて、やがてひどく静かにお辭儀をした。「始め曲馬團にをられました。尤も馬に乗るばかりではなく、時には女装をなすつてワンダーキャビネットに這入られたり、マジックミラーの因果娘になられたり、それから綱渡りなどもなさいました。が、或る暴風雨の夜そこに逃げ出して、間もなく親切なスコットランド人に拾はれました。どこか間違つたところがございますか。」

「いや……」と顎を引いて浩六は肯定した。

「スコットランド人の家では、一二年間いろ／＼の勉強をなさいました。物理だとか化學だとか、それは仲々の學者でしたので、そんなことを教へることが出来ました。然しあのスコットランド人は日本を去らねばならなくなり、あなたは、あるホテルへお勤めになりました。白い詰襟服にメモと鉛筆とを持つて泊り客の御用を足して居られたが、或る時、古參のボーイと争ひをなすつて、こゝもいゝ加減に飛び出してお了ひになる。それからまあバナナの叩賣りまでなすつたが、結局今では下宿に——らん／＼としてゐなされる。大體こんな工合でございますかな。」

老人はそこでポケットから葉巻を出し、器用に先きをパチンと切つてマツチをシュツと擦つた。煙がゆるく立ち昇つた。

「そこで、それはつい二三週間も前のこと、あなたは下宿のお隣りにある不思議な洋館に忍び込まれた。いや／＼、勿論盗人といふ譯ではございますまい。曲馬團にゐた頃の身軽さが役に立つて、あの邸内を覗き込まうとなすつたのが、つい塀から庭木へ、庭木から露臺へとかういふことになつたので、あの洋館と申すのが、いつも戸を鎖したまゝで、誰にしても好奇心を唆られま

断つて置く暇がなかつたが、茲に老人の言つたのは事實である。少々説明を加へやう。

浩六は高臺にある×館といふ二階に下宿してゐた。一人ぼつちだから時々ひどく退屈になる。外へ出る氣にもならないし、さうかと言つて本を讀むのも面倒だ、とそんな日が時としてある。で、或る日のこと、四疊半にごろりと寝て、ぼんやり天井を眺めてゐると、そこへ一匹の猫が來た。三毛猫であるがどういふ積りか、障子の穴から顔を出して、靜かにニヤンと鳴いたものだ。「三毛、來い。」

言ふと人懐つこい猫と見えてパサツと疊の上へ下りて來た。廣がつてゐた新聞の上で香箱をつくり、眼を絲のやうに細くした。

「ニヤン公、お前はどこから來たんだい？」

浩六は押入れの隅に、前の客が置き忘れてでも行つたらしい、何かの罐が轉がつてゐたのを思ひ出した。出して見るとビールの口取りになりさうな、鯛だのハゼだの、いろんな小さい魚の干物である。手に持つて、

「ほら、おいしいぞ、食べて見な。」

と言ふと、それでいつべんに仲好しになつた。凡そ二三時間も猫と遊んで、そのうちに猫をそこにあつた綱で縛つて見ると、これには畜生も怒つたらしく、素早く室の外へ飛び出して、了つ

た。そして見てみると身輕に軒を傳つて、やがてすぐ眞向ふに見えるコンクリートの塀に上つた。ピーンと尻尾を振り上げて見せたが、そのまゝ塀の向ふへ消えて了つた。「三毛の奴、憤慨しやがつた。」

さう言つたが、氣付いて見ると、こちらの窓から向ふの塀へ綱の橋が出來て了つた。引つ張つたが、不思議にとれない。猫がどうかしたのであらうか、どうしてもこちらへ引き寄せられない。面倒臭くなつてその時はそのまゝ、うつらくと眠つて了つた。

夜になると月が出てゐた。素晴らしく美しい月である。ぼんやりと月を眺めてゐると、晝間の綱の橋が眼に付いた。又引いて見るが塀の頭でかつきり止る。二三度やつてゐるうちに、ふと、久しぶりで綱を渡りたくなつた。これも思出の一つだが曲馬團にゐた頃は、小屋の端から端へ渡した綱を、片手に蛇の目の傘を持つて、ツ、ツ、と渡つたものである。下には見物の顔がお祭りの提灯のやうに並んでゐて、舞臺ではチビの三公といふ男が「小野道風は通ひの形イ」そんな風に呟鳴つたことが思ひ出される。浩六はふらくつとして綱を渡りかけた。と、運が悪かつたので、綱がプツツと切れて了ひ、彼はドターンと下へ落ちた。

いゝ按配に怪我はなかつた。が、かうなると妙に意地が出て、なんでもかんでも、そのコンク

リートの堀に登り度くなつた。實を云ふと彼はそれまでに、堀の向側は勿論のこと、その堀にすら少しも好奇心を惹かれずにゐたが、ただ、いやに高い堀だナ、とそんな風に思つてゐたが、今のやうな次第で、彼は堀の上から垂れ下がつてゐる綱の一方を手頼りにして、するすると堀の上へ昇つて見た。すると邸内は静かであつた。何んとかなくひどく荒涼たる感じさへする。人の棲む氣配もない。妙な家だナ、と思つた次の瞬間には、もう堀の向側へ下りてゐて、庭木から露臺へまで行つて見たが、その時、邸内からふいに眩しい光を差し向けられた。

「や！」そんな風に叫んで猿のやうに下宿へ逃げ歸つたのである。その翌日の朝、下宿の女中にその話をすると、女中は眼を圓くして、

「まあ、氣味の悪い人。綱渡りなんか出来るの？ でも、あの洋館もさう言へば氣味の悪い家だわね。」と言つたのであるが、彼は簡単に「いけないヤ、人が居るんだもの。」と言つたきり、そのままに忘れてゐたのだつた。

そこで話を元へ戻すが、今老人にかう言はれると、浩六は何かうつすらと解りかけて來た。と、老人の眼光は頗る鋭かつた。

「ホ、ホ、もう、お分りになりましたナ。私共はあの洋館に住んでゐるものでございますよ。」

「すると何んですね、あの時、僕に懐中電燈だかなんだか、突然光を差し向けたのは貴方ですか？」

「左様、まづ左様でございます。ところで然し、あの時には私共の方が、あなたよりもずつと吃驚させられました。」

「何故です。何か悪いことでも企んでゐるんですか。」

「どうも單刀直入でございますね。老人は癖であるらしい両手を前で摩り合せてニヤ／＼した。」「が、残念ながら少うし御見込みが違ひました。私共はかうして變装などをして、妙なことを致しますが、悪いことは致しません。誓つて申します。」と不思議やその時老人はひどく眞面目な顔になつた。人を壓する熱誠とでもいふやうなもの、或は烈々たる意氣の如きものが眉宇の間を掠めて去つた。「よろしうございますか、その點は御信用下さいませ。實は私共、あなた様を探す爲に、かうして苦心を致しましたので——」

「え？」

「ちよつと御納得は出來ますまいが、あなた様こそ、碧漾莊の御主人でございます。あの洋館を碧漾莊と申しますが、その御主人を探す爲に、私共はこれだけの苦心を致しましたが、いづれお分りになつて戴かせうが、その御主人が、つい目と鼻との間にある、あの下宿にをられようと

は、實に意外千萬なことございました。あの時、露臺の上にお顔を拜見して、私共、夢ではな
いかと存じました。そしてそれから今日まで、あなた様の御經歷を調査しまして、愈よ御主人
に違ひないことを、正に確めて参つたのでございます。」

「待つて下さい、待つて下さい。」

浩六にとつて實に意外なことであつた。まだ分らぬことは澤山にある。が、老人の言はゞ赤誠
とでも名付くべきもの、それをひし／＼と胸に感じ、同時に彼は胸の奥底からどつとある激情の
迸しるのを覺えた。

「ぢやあ、なんですね、僕の、僕のお父さんやお母さんのこと、それも皆んなあなた方が知つて
るのですね。」

「左様でござります。凡て詳し、申上げます。あの碧漾莊こそは、あなた様の御兩親がこの世に
残した唯一のお城でござります。お城と申してもよろしいでせう。」

「城だつて？」

「はい、かういふ申し方では驚かれるのが尤もでございます。が、いづれは、娘がもつと詳し
い説明を申上げませう。まづ、それまではこの位のところで中止しまして、如何でござります

か、早速碧漾莊の方へお移りを願へませうか。はい、お宿の方の御荷物は、既にお邸へ移してあ
ります。今日、御經歷調査が出来上り、すぐとお宿へ参つたのですが、生憎とお留守で、仕方な
しに宿の方だけ仕末を済ませ、すぐと又こちらへ参りまして、運よくお目にかゝれたのです。」

「行きます。行きますとも、然しもつと話して下さい。こゝで話して下さい。」
老人は然し静かに首を振つた。

「いや／＼、これは娘がお話を申上げます。」

「娘つて？ あなたのですか？」

「はい、左様でございます。」

あゝ、なんといふ幸福であるか。浩六は今や素晴らしい幸福の山のでつぺん目がけて、一氣に
馳せ登るやうな氣持であつた。が、その時である、老人と若い方の紳士とは、突然ガバと立ち上
つた。そして

「しまつた！」

「早、早、早！」

と叫ぶのであつた。

浩六は呆氣にとられてゐるが、彼等はサツと顔色を變じてゐる。

「なにか、なにか起つたのですか。」

立上らうとすると耳を掠めて、ひゅーと投げられたものがあつた。見ると、背後の壁には一本の短劍が突き刺り、その柄が生物のやうに、ぶる／＼と顫へてゐた。

浩六は無我無中で老人に手を引かれてゐた。廊下へ出ると、來た時とは反對の方向へ走り出し、それから押入れのやうなところや、振ぢれ曲がつた階段を下り、妙にガランとしたところへ出ると、そこから戶外へ飛び出した。豫て準備をしたのであらう、大型幌自動車待つてゐたが、老人はその運転手に向つて二言三言何か叫び、そして浩六の手を握つたまゝ、慌し、それへ乗り込んだ。と、自動車はすぐ爆音を立て／＼と一搖ぎをしたのだつたが、その時、自動車の外では、アツといふ鋭い悲鳴が聞えた。

見ると、今遅れ走せに駆け付けて來た例の若い方の紳士である。が彼は月光の中に腕を二本空へ泳がせて、キリキリキリと輪を畫き、それから弓のやうに身を反らせて、グツタリとペイヴメントへ倒れて了つた。脊中には例の短劍が、氣味悪く月光を反射して、キラリと光つたのを泉浩六は明かに見た。

「やられました」

老人は押し付けるやうに叫んだが、その時自動車は幌の周圍に風を生じ、いつの間にか電車通りへ出て、一臺の青バスを追ひ抜かうとしてゐた。

「運が悪かつたのです。遂に見つかつて了ひました。最初から豫感があつたのですが、矢張り注意が足りなかつたのでせう。が、たあつ、御無事だつたのは、何よりものことでございます。老人はかう言つて浩六の顔をキツと見た。」

三

車上の人となつてから、浩六は殆ど口を利かずにゐた。老人が非痛な顔をして考へ込んでゐたからである。先刻の一言を口にしたまゝ、老人は容易に喋らうとはしなかつた。

始め、自動車は電車軌道に沿つて、青バスや小型自動車など、實に痛快に追ひ抜いた。黄色い石造の建物や赤い煉瓦塀とすれ／＼に、或る時は瞬間にガードを潜り、又は木造の假橋を渡つた。それが追跡者を避ける爲であらうことは言ふまでもないが、随分長い時間を走つた後、浩六にとつては漸く見覚えのある街へ出た。カフェー、洋品店、キャンデー・ストアなどが今店を仕舞ひ

かけてゐるのだつたが、そこから浩六の下宿へは間近いのである。

「××××××？」

「×××、×××××！」

分らない言葉であつたが、老人と運転手とは早口に何か言ひ合はして、ぐいつと激しいカーブをした。そしてトンネルのやうな暗い道を二三十秒、やがて自動車がびたりと停まつた。見上げると石を疊んだ門である。標札は見えなかつたが片假名で書いてあるらしい。

「こゝが碧漾莊の入口でございます。この外國人——はい、外國人の家の門を這入ると、中庭に別の門がございます。そこから參りますので、つまり、碧漾莊の入口といふものは、一見何處にあるか分らないのです。」

言つてゐるうちに二人はその門を通り過ぎた。中庭が抜けられるやうになつてゐて、庭を區切る堀のところまで来て見ると、なるほどそこにはちよつと氣付かない程の通路があつて、堀はコンクリートで出来てゐた。

「つまりこの堀でございます。先夜あなた様がお乗り越えになつたのは、この堀の續きですが、左様、曲り曲つてをりますので、こゝからは一町以上もございませうか」

「そんなに廣いのですか。僕が這入つた時にはそれ程とも思はなかつたんですが——」

「はい、明朝にでも娘が御案内を致しませうが、随分手廣くは出来てをります。設計を致しましたのは英國の技師でございますが、まづ、サルスベリー侯の座席にも似てゐまして、御覽になりませれば御満足の行くことゝ存じます。」

「サルスベリー侯の座席といふのは！」

「はい、小さいものではセント・クエンチンの教會にございますもの、或はチャートルズ寺院にございますもの、更に大きなものではハンプトン宮殿、ケンシングトン、或はドルセットなどあります。これはハットフィールド會館のサルスベリー侯座席に模したとのことでございます。」

浩六には老人の説明が分らなかつた。サルスベリーだのドルセットだの、全く聞いたことのない名である。が、それを詳しく聞いてゐる暇はなかつた。やがて、第二の門へ出たのだつた。暗くてよく分らぬが、月光を透かして見ると、こゝだけは漆喰やうのもので出来た堀なので、それを通り抜けると、妙に雅致のある家が見えた。洋館とばかり思つて來たのが、小さいけれどもたいへん風變りな建物であつた。僅かに四隅の跳ね上つた屋根の下に、どこか重々しい、然も確かに彩色を施したらしい壁や戸が、しんと静まり反つて見えるのだ。黙つて隨いて行くと、家

の周圍には石で出来た勾欄があり、正面には地を赤くして青い字で、明かに「碧漾莊」と書かれた招牌が掛けてある。老人はその招牌の横手へ近づいて、コッコツ、と合圖をし、それから兩手を前で組み合せながら、非常にゆつくりと頭を下げた。

「こゝまで御案内しますれば、私の役は済みました。凡そ役々によつて人を選ぶといふことが、此際何よりも重大でございませう。それに私と致しましては、私だけの用事もございませうので、はい、先刻殺されたのは私の件でありまして、これから引返さねばなりません。場合によつては、もうこれ限りお目にかゝらぬかも知れませぬが、御幸運を祈つて置きます。」

老人はする／＼と五六歩後退りをして、それから闇の中に消えて了つた。

一人きり取り残された浩六は暫時の間はそこで待つてゐた。賑かな街の中で老人達に呼び止められてから引き續き起つた思ひ懸けない出来事が、今、僅かに連絡を断たれた恰好である。老人が合圖をして去つたのだから、いづれ家の中からは誰かが出て来るに相違ないが、その間が案外手間取れた。始めのうち浩六はちつとそれを待つてゐたが、やがて、勾欄の前をぶらりと歩き始めた。

不思議なことに浩六は、この奇妙な自分の立場を一向深く見極めようとはしなかつた。あるが

まゝに物事を受け入れて行くといふ性格なのか、或は月の光が餘りに夢幻的であつた爲か、彼はぼんやりとして次の出来事を待ち受けてゐた。上衣のポケットに手を入れると、パットの箱が引き出された。煙を胸いつばいに吸ひ込むと、ふーつと長く吐き出した。

「あゝ。」

煙と一緒にこんな吐きをふと漏らして、今度は石の勾欄に腰を下ろした。何處からともなく花の香りに似たものが漂つて来て、初夏の夜の空気が不思議な神祕に鎖されてゐる。ちつとしてゐると奇妙にも涙ぐましくさへなつて来た。頭の中には青い着物の女が現はれ、霞んだ幻影の彼方から靜かに呼びかけるのだつた。

とんとんとろりこ、とんとろり

海山越えてとんとろり

とんとんとろりこ、とんとろり

鬼が島にはとんとろり

とんとんとろりこ、とんとろり

坊やお寢間にとんとろり

何處で何時覺えたものか。彼はどうかするとこの唄を思ひ出す。夢とも現ともなく、在りし日のルラビーであつた。

と、さうした浩六の耳にはかすかな物音が響いて來た。家の中を誰か歩いてゐるのである。ハツとして現實の彼に立戻ると、前面の扉が重たく軋つて一人の僂僕男が現れた。無言のまま頭を下げて、奥へ！といふ手付きをした。浩六は無雜作に立上つて、導かれるまゝに廊下へ進んだ。

天井が案外低くて、それにところ／＼厚ぼつたい縞子の窓掛が垂れてゐたので、廊下は狭苦しいやうにも思へたが、二つばかり角を曲がると、黄色い光線の充ちてゐる贅澤な一室に通された。

赤地に青く睡蓮を抜いた、そして中央を金色の紐で括つた高價な垂帳、龍の彫刻をした欄間の下には紫檀の長椅子があり、椅子の上には緞子の蒲團が積んであつた。一双の衝立を背後にして、象牙の飾りを施した卓子があり、卓子を圍んで四脚の太鼓形の椅子が並んでゐた。そしてその時に赤い垂帳がゆらりと揺れて、眼にしみるやうに、青い着物の——然し少女が現れた。水色の上衣に緑色の袴、袖に緋縞子らしい赤い色をチラリと覗かせ、櫻んぼのやうな耳朶には翡翠の

耳環をぶら下げてゐた。濡れたやうな前髪を額へ垂らし、その下には桃色の臉がぼ一つと膨らんでゐる。魔法のやうに現れたのだが紛れもない支那の少女である。浩六は、

「あー！」

到頭さう叫んで了つた。

「あ、あなたが、あの、あの……」浩六は流石にちよつとおどろいた。ほんたうは彼女が先刻の老人の娘なのかと訊く積りで、然し「ぼ、僕は泉浩六ですよ。」と言つた。

少女は始め黙つてゐた。ちつと浩六の顔を見てゐた。眼には明かに或る愁ひの色があつたが、次第にその眼を伏せて行つた。そして小さい聲で答へた。

「お父様から聞いてゐますのでよく知つてゐます。私は林芳蘭と云ふのです。」

「林芳蘭？ あゝ、さうですか！」

それつきり言葉がポツンと切れて、浩六は手持不沙汰に紅木の卓子を眺めた。それから床へ視線を落とし、鼠繻子に金色の刺繻をした小さな二つの靴を見た。と、並んで不恰好な僂僕がある。僂僕は何んの意味か、芳蘭を軽く指で突いた。

「あの——」と芳蘭は言つた。「まだなんにも？」

「え、詳しいことはあなたが——さうです、あなたが説明して呉れるつていふのですけれど、あれはあなたのお父さんですね。」と始めてそこで言つて「僕がこの碧漾莊つて家の主人だといふこと、それからサルスベリ侯の座席があるつてこと、それから、さうです、あとはまだ何んにも知りません。」

「父の名前も何もかも？」

「知りません。」

「……………」芳蘭はちよつと躊躇つて、それから一層低い聲で言つた。「御身分のこと、御國のこと、みんな御知りではないのですわねえ。」

「御身分？ それから御國のこと？」と考へて浩六は、その時ハツとした。これは全く途方もない出鱈目ではあるまいか！

「僕は、僕はいつたい何んですか。ほんとのことを言つて下さい。」思はずさう言つて唾を呑んだ。

「たあつ——いえ、太子様でございました。御父君御母君もこの世にはゐられませぬが、太子様でございます。」

芳蘭はさう言つて眞赧な顔をし、視線を床に落して了つた。

四

芳蘭がそれから何を語つたか、それは浩六には容易に信ぜられぬことばかりであつた。日本に育つた浩六としては全く無理のないところであるが、芳蘭の言葉によれば、彼は太子なのである。いづみかうくではない、チウハオリウ——泉浩六だといふのであつた。

チウハオリウの母は芳蘭には伯母に當る。即ち彼女の父林霖泰の姉であつたが、××帝の寵を蒙つてゐた。ところが芳蘭の故國に東洋史上有名な革命騒ぎの起つたのは十八九年以前のことである。ハオリウの母は日本に亡命して霖泰と共に時の來るのを待つてゐた。幸にして莫大な富を携へて來たので、或る英國の技師に命じてこの碧漾莊を作らせ、固く門を鎖してゐたが、一日大きな不幸が見舞つて來た。當時三才であつたハオリウが突然行方不明になつたので、身分柄、迂濶な搜索願ひも差出されず、日本の私立探偵や某々留學生などに依頼して見たが一向に行方は知れない。母夫人は悲嘆の日を過すこと長く、やがて淋しく歿して了つた。

「ハオリウを探し出して下さい。そしてもう政治的なことには關係させずに、一生を楽しく過ご

させて下さい。」

ハオリウの母はさう遺言をして瞑目をしたさうである。

霖泰父子はこの可哀相な亡夫人の爲にハオリウの行方を隈なく探した。が、依然として消息はない。そのうちに母國では一次二次三次と幾多の革命が四五年毎に起つたが霖泰は全くハオリウ搜索に全力を盡した。芳蘭の方は、名儀上碧漾莊の主人になつてゐる日本の某名士の令嬢として無事に女學校まで卒業したが、それにつけても霖泰の胸には、ハオリウを探し出せないでゐることが、亡夫人の靈に對して顔向けの出来ないことであつた。が、どう焦つて見ても目的は達せられない。ハオリウの母が歿したのは今から八年前であるが、ハオリウが行方不明になつてからは正に十八年間、只空しく時を過して了つた。

そこで二週間程前のことである。例の洋館、それはこの碧漾莊からはずつと外廓に當つてゐて書物庫のやうなものになつてゐるが、その洋館へ芳蘭は博物の本を探しに行つた。と、そこへ露臺に音がしたので、懐中電燈を差し向けると、彼女はハツと息の根が止まるやうに思つた。八年前に歿した亡夫人、それに芳蘭は母のやうに懐いてゐたが、亡夫人が現れたやうに見えたのである。強力な電燈の光の中に浮んだ顔は、ハオリウの母そつくりであつた。向ふでは狼狽して

塀の向ふへ逃げて了つたが、芳蘭は氣を失つて其の場へ倒れた。そして一方芳蘭の歸りが遅いのを案じた霖泰が、やがて其の場へ駆け付けると、今のやうな事情である。塀の根方には杭に巻かれた綱があり、上つて見ると向ふの下宿に、窓から同じ綱らしいのが、中途から切れたまゝぶらりと垂れ下つてゐた。

「ですから、父がこつそりと御宿へ行つて見ますと、父にも私と同じやうに見えたさうです。父が太子様の御部屋へ忍び込んだ時には、太子様はもうすやくとお寢みになつてゐたさうです
が——」

芳蘭はさう説明したものであつた。

「ほう、ほう。」浩六——いや芳蘭の言葉によれば太子ハオリウである。ハオリウは感嘆とも嗟嘆ともつかぬ溜息を吐き續けた。

芳蘭の長物語りが終つた時は大分夜が更けてゐたので、浩六のハオリウはそのまゝ一先づ寢に就いたが、無論すぐには眠り付かれず、暫くの間まじくと眼を開いてゐて、それからぐつすりとして眠つて了つた。そして翌日、天蓋のある寢臺で眼が覺めた時、「霖泰はどうしたらう。昨夜ペイヴメントで倒れたのは霖泰の件だと言つたが、あれからどうなつたらう？」

さう思ひ出して呼鈴を鳴らした。

と絳紗の帷を排して悠々と現れたのは霖泰であつた。水煙管を唾へてゐたが、それを古風な短檠の傍にそつと置き、全く支那風の禮拜をした。

「お早うございます。も早凡て御承知になりましたさうで……」霖泰は嬉しさうにさう言つた。

「え、芳蘭さんから聞きました。でも、まだいくら分らないところもあります。なんだかお伽噺のやうで……」

「ホ、ホ、ホ、お伽噺は結構でございます。人間、いつまででもお伽噺を忘れてはなりません。」

「お伽噺と思つてゐてもいゝのですか。」

「飛び切り結構でございます。凡そ世の中には餘りに悲しいことが多過ぎます。お伽噺のやうに一生を送るほど、そんなよいことはありませんまい。」とそこで霖泰は水煙管を手にとつた。そしてのどかな煙を吐き出しながら、「時に、お呼びになつたのは？」

「さうです。僕は昨夜のことが訊き度かつたので、あの殺されたのはあなたの——つまり、芳蘭さんの兄さんでせう？ あれからどうなつたのですか？」

「はい、はい、御心配を有り難うございます。幸にしてあれは無事で済みました。」

「え？ 助かつたのですか？」

「いえ、助かりは致しませぬ。殺されて了つたのですが、我々を狙つてゐる者共が屍骸を上手に隠しましたので、幸、日本の警察沙汰になりませぬ、私は安心して歸つて参りました。」

「然し、それアあんまり……」

「冷淡だと仰有る。左様、冷淡かも知れませぬが、太子をお探し申した喜びに比ぶれば、伴の一人や二人、私には何物でもございませぬ。どうぞそのことはお忘れ下さい。」

あゝ何んと奇怪なる霖泰であらう。ハオリウの浩六は眼が熱くなるのを感じたが、霖泰は相變らずにこやかな微笑を浮べて、次のやうに話し續けた。

「が、お分りにならないと何かと氣懸りでもございませう。彼奴等は近來になつて私共がこの都に住んでゐることを嗅ぎ付けまして、はい、彼奴等と申すのは或る陋劣な政治家の部下でございますが、私が何事かを企みはせぬかと心配し、私を暗殺しようとしてゐます。それで外出の時にはあのやうに變装などを致しますが、遂に昨夜、あの場所を嗅ぎ付けられましたので、あそこで長い話の出来なかつたのも其の爲でございます。然し、何に致しましても太子の御身に變りのなかつたのは、何よりで、それに茲はまだ全然彼等には氣付かれませぬ、この點は御安心下さいま

せ。私もかうして目的を達した上は政治的野心もありませぬし、御一緒に、静かな生活を樂しませう。」

「僕に、このつまらない僕に、そんな値打ちがあつたのでせうか……」浩六は呟くやうに言つた。

「左様でございます。前生の善禍は凡て今生に報はれますので、太子には御父君の御徳が明かに備つてゐるのでございます。御父君のことを御承知になつてはをりませぬか？」

「は、そこまではまだ——」

「では一通り申上げませう。御父君××帝は不幸な方でありました。四歳にして御位に即かれましたが、御一生を通じて南太后様の鋭い看視の眼を逃れませんでした。南太后様は御父君には伯母様に當られますが、御父君の英邁さが災ひして、はい、南太后様の御意見に反對したのでございますが、遂に宮城内碧海と申す池の中の、漾臺と申す島に押し籠められ、そのまゝ歿せられたのが今から十九年前でございました。そしてそれから後の母國と申すものは麻の如くに亂れました。佛蘭西革命以上の血腥い陰謀が行はれ、御父君の後に立たれた△△帝は僅か數年にして位を去られ、翌日南太后様もお亡くなりになり、虐殺、暗殺が白日の下に行はれました。詳しいこ

とは歴史を御覽になれば分りますが、私共こゝへ亡命したのは恰度その頃でございます。曹舎黨の暗殺事件、朝廷麾下の四十六將軍の共和政要求書提出事件、お話し申せば切りのないことではありますが、私共はさうした母國を後にして、この土地に碧漾莊を造つたのでございました。名前が出所が、お父君が押し籠められて數年を過ごした碧海の漾臺から出てゐることは、勿論お分りでありませう。」

鮮血に塗れた革命の眞相、南太后や曹舎黨のこと、それはこの物語りに直接大した關係はないが、さうしたことが浩六の耳にも幾分の覚えがあつた。それまでは遠い國の物語りとは思はずに、或は遠い昔の歴史としか思はずに、たゞぼんやりと耳に留めてゐたのだつたが、今、霖泰の言葉を聞いてゐるうちに、それが意外にもたつた十八九年の過去であることを知り、そしてそれと同時に、胸の中に僅かに残つてゐた疑ひの雲が、だん／＼吹き拂はれて行くのを感じた。

「あゝ」と彼は嘆息を漏らして言つた。「僕は何も知らず、昨夜以來、夢の中の王子だとばかり思つてゐました。夢が覺めないやうに、そればかり願つてゐました。」

「ホ、ホ、ホ。」霖泰は例の笑ひ方をした。

「では夢の中の王子様、張陸榮を呼びますから、先づ床をお離れ遊ばせ。」

気がついて見ると成程、彼は軽い羽布團の中に寝長まつて、ぼんやりと霖泰の言葉聞いてるのだ。鳩鳴時計がポウ、ポウ、と鳴き出して十一時である。間もなく僂僕男が這入つて来た。相變らず背中を丸くして床に眼をやつたきり、コト、コト、と歩いて来た。

「この男ですか、チャン——なんとか言ふのは？」そこにあつた眞新しいシャツに手を通しながら、浩六は言つた。

「はい、左様でございます。張陸榮と申します。僂僕で嘔で、お伽噺の王子様には、寔に相應しい小者でございます。」

僂僕は天蓋の帷に手を掛けて、それを不恰好に擴げようとする。眺めてみると、浩六は無性に嬉しくなつて来た。つかつかと近づいて手を握り、

「君、君は僕のお友達だ。實に愉快で堪まらないぢやないか！」と言つて、僂僕の手をぐいぐい揺すぶつた。

五

浩六——ではない、ハオリウの浩六である。浩六は遅い朝飯を済ませると、愈よ芳蘭に導か

れて邸内を一巡りすることになつたが、何よりも驚かされたのは、その怪絶なる設計であつた。

「これは若し刺客などに嗅ぎ付けられても、容易に碧漾莊までは來られぬやうに、特にかうした設計を用ゐたとのことでございます。」

歩きながら芳蘭はさう言つたが、それは一種の迷路造りになつてゐた。幾重もの塀が碧漾莊を取り圍み、然も各々の塀と塀との間に、相當大きな建物がある。どれもこれも倉庫のやうなもの、或はガランとした空屋であるが、さうした棟々がある爲に、若し何處かの高い場所から俯瞰

しても、恰度眞上へでも來てゆつくりと眺めない限りは、皆獨立した家屋に見えてゐた。夫々貌の變つた塀の中に、各種の建物が並んでゐるのだ。碧漾莊はその中心に鬱蒼とした木立に包まれ

てゐて、それが所謂サルスベリー侯の座席である。霖泰の説明では分らなかつたが、聞いて見れば、サルスベリー侯の座席といふのが、大體これに似た迷路造りだといふのであつた。

「昨夜、たあつが父に連れられて這入つた路、あそこだつてお一人ではとても來られません。試しに碧漾莊の玄關から外へお一人で出て御覽なさいませ。きつと前と違つた路をお通りでせう

し、それに、とても碧漾莊へはお戻れになりませんわ。」

芳蘭はそんなことを言つてあちらこちらの説明した。な—に、そんなことを言つても綱を使

へば譯がない。浩六は腹の中で思つたりした。

浩六が最初忍び入つたのは一番外側の洋館だつたが、行つて見るとその窓から、あの小つぽけな下宿の部屋が見えた。

「此處だつたのですね。」

さう言つて浩六は露臺の方へ出ようとしたが、芳蘭に引き止められた。

「危険です！」

「どうしてですか？」

「お一人でいらつしある間はようございましたけれど、昨夜は父とお話しになつてゐる所を刺客達に見られてゐます。太子、だといふことは分らなかつたにしても、外から顔を見られれば、どんなことになるとも知れません。」

お伽噺の王子様は、そこでひよつと現實に引戻され、自分の立場をはつきり知つた。幸福ではある。が、外出は出来ないのだ。さう思ふと少しく淋しかつたが、然し芳蘭の顔を見ると、淋しさなどはたんぽぽの毛のやうに飛んで行つた。

「こゝはね、父がちよつと變つた趣味で作つたのです。お這入りなさいませ。」

かう言つて芳蘭が導き入れたのは、碧漾莊と洋館との中程にある、言つて見ればカフェーのやうな家であつた。白人の女や黒人の男や、七八人の男女が待つてゐて、彼等を奥の一室に案内する。そこには此世にありとあらゆる自然物の色、南洋の珍奇な蟲の翅だとか、タスカロラ海床の貝殻だとか、そんなものが壁にずつと並べてあつてそのすぐ隣室へ行くと、闇の中にいろ／＼の光が明滅し始めた。草色の光、月のやうな光、赤い天鵞絨のやうに滑かな光、そんな光が一定の音律を有つて、明滅してゐるのである。それに就いて芳蘭はかう言つた。

「これは色彩の音楽ださうです。耳で聞かずに眼で見る音楽。今始まつたのは「眞夏の夢」といふのださうですが、父はいつも、どうも思ふやうに出来ないと言つてをります。でも、どうかすると音楽的なものが現れて來ますわ。」

なるほどさう言はれれば、始めのうちだけ妙にびつたりとは來なかつたが、そのうちに繪とも音楽ともつかぬものゝうちに取り圍まれ、だん／＼うつとりとなつて行つた。暖かな海の中へしんしんと沈んで行くやうな、或は又、うら／＼かな春の中空へ、悠々と浮び上つて行くやうな、心持のよい時を過すことが出來た。

廻り歩くにつれて凡てが浩六には驚異であり、それは又同時に霖霖に對する尊敬であつたが、

その日は殆んど見廻るだけで暮れて了つた。そしてそれから後の暫くを、彼は如何に楽しく過したであらう。そこにどのやうな楽しみがあつたか？ それを先づ言はねばなるまいが、その第一は芳蘭であつた。二人の間には日に日に隔てが取れて行き、浩六は益々王子様になるのであつた。「たあつ、支那語を習ひませんか？」

それ程暑くもないのに芳蘭は、どこからか朱房のついた扇を持ち出して、それを半開きにしなから言ふのである。

「覚えられるか知ら？」浩六は榻の上に腰をかけ、足をぶらんぐさせて答へる。

「え、たあつはきつと覚えが早いと思ひますわ。語學の天才と言はれる人は、みんなたあつのやうな顔をしてゐますもの。」

「どんな顔？」

「どんな顔つて言へませんけど、きつと語學の天才ですわ。」

これは芳蘭のいゝ加減な言葉であつたかも知れない。そんな氣がするといふだけのことであつたらうが。そこで支那語の稽古が始まつた。

「ニイトンイトン。」

「ニタンイトン。」

「タンではないの、トンよ。トン、トン。」

「トン、トン。」

「ニイトンイトン。」

「ニイトンイトン。」

「一寸お待ち下さい、といふ意味ですわ。」

「さうですか、ニイトンイトン。」

といふ風である。支那語といふものは面白いものだと、浩六はつくづくさう思つた。

曲馬團にゐた頃の記憶を探り出して、浩六は無邪氣にも大魔奇術をやつたこともある。張陸榮を助手にしてワンダーキヤビネットを作り上げ、霖泰、芳蘭を始めとして、其の他の雇人達を呼び集めた。尤もその時は雇人のうちに銀のお盆から鳩を出す手品を行れる者がゐて、浩六はやや失望して了つたが、その代り、綱渡りをして見せると、あら、あら、芳蘭はさう言つて激しく賞讃した。たあつの浩六は正しくお伽噺のうちに生きてゐたのだつた。

ところがである。かうした浩六に意外な苦惱時代が來て、それに續いて或る劇的最後まで行つ

たといふのは、彼が芳蘭に戀し始めてからのことであつた。お伽噺にも戀はあつてよいものである。浩六は芳蘭に戀をした。

始め、それは足音を忍ばせて近づいて來た。最初の瞬間から芳蘭に不思議な魅力を感じたが、その當分の間、浩六はあまりに變化し過ぎた環境に對して、無暗に眼を見張るばかりで、只、芳蘭と話をしてゐる時は、いぶかしくも身うちがほのぼのと暖められ、例へば母の味を今始めて知るかのやうな、言ひ知れぬ感じだけであつた。そしてそれは、だんく彼の頭が平靜になると共に、熱し切つたものに變つて行つたのである。

「霖泰老人と話をしても愉快だ、學識のある尊敬すべき老人は、昔自分を可愛がつて呉れたスコットランド人よりも豪い人だ。あの人と話をしてゐれば僕はいつでも愉快なのだ。そして又一人きりでこの城廓内を歩いてゐても、僕は決して淋しくない。孤獨には馴れて來た僕なのだ。だが、あの芳蘭のゐない時には、僕はそれ程の幸福を感じなくなつた。これはいつたいどうしたのだらう。」

碧漾莊へ來てから一月程の後、彼は何かの折にふとそんなことを考へたが、やがて戀は激しい勢で燃え盛らねばならなかつた。彼には碧漾莊の毎日が退屈になり、霖泰の言葉すらが陳腐に

聞え出し、まして各種の催し物は一つとして面白くなつて了つた。芳蘭が居なかつたら、すくにも碧漾莊を飛び出し度い程、彼は苛々し始めたのだつた。淡泊な彼にも戀は容易に打明け難い。可成長いこと苦しんだ末に、或る晩樓臺の上に出て、朱塗りの欄干に腰を掛けて、突然に言ひ出したのだつた。

「芳蘭さん。僕は——」と口籠りながら言葉を續けた。「いつか言はう、いつか言はうと思つてゐたのです。」

「え？」芳蘭は奇妙にもギョツとした風であつた。

「——僕は——いや、あなたはです。あなたは僕が、好きでせうか？」

思ひ切つて言ふと、芳蘭はふつと下を向て、それから小さく答へるのだつた。

「嫌ひではありません。」

「え？ 嫌ひではないつて。芳蘭さん、それだけなんですか？」

「え、それだけなんです。」芳蘭は一層低い聲で答へて、すぐにすつと立ち上つた。「たあつ、そんな話はよしませう。」

そして彼女はそのまま私室へ行つて了つた。浩六の最初の試みは、見事に打ち碎かれたのであ

つた。

六

繰返すやうではあるが、戀に、命に、そしてそれを続けて行く奇怪なる霖泰の計畫に、幸福なるハオリウ浩六の運命がいかに絡まつて行くことであらうか、それは後に分ることである。順序として、戀のいきさつから説くのが便利であらう。

浩六は最初の申出を打ち碎かれて、忽ち苦悶のどん底に沈んで了つた。碧漾莊へ来て甘やかした放題に甘やかされてゐただけに、その痛手は笑止な位に重かつた。爵々として彼は數日を過ぎた。芳蘭は相變らず優しかつたが、然し口數はずつと減つて了つた。どうかした拍子に眼と眼が合ふと、彼女はハツとした様に蒼い顔をする。

「幸福だと見えた碧漾莊は其の實牢獄だつたのだ！」

彼はさう思ふやうになつて來た。殊に次のやうな事件があつてから、彼は益々憂鬱になつて行つた。

或る日のこと、浩六は一人つきりで碧漾莊を出て、何處をどう通つたとも知らずに、ふと一軒

の家の前へ出た。氣が付いて見ると、それは曾て廢物置場だと説明されてゐたところだつたが、中で、稍荒々しい聲がした。罵り合つてゐる風なのだつた。そして然もその一方は確かに霖泰の聲である。霖泰が聲を荒らげるのは珍らしい事で、彼はそつと戸口へ忍び寄つた。中を覗けないのは残念だつたが、今度は霖泰の聲以外に芳蘭らしい聲もした。どき／＼する胸を抑へると、覺束ない支那語の知識にも次のやうな意味が聴き取れた。

「絶對にいかん。」と霖泰老人の聲は怒りを帯びてゐた。「そんなことが出来るものではない。それは私の最初からの計畫なのだ。」

「だつて、お父様の計畫は餘りに進み過ぎたのです。私は苦しいのです。」

「苦しいのはお前が悪い。お前の心に隙があつたのだ。お前さへ確乎りしてゐれば——」

「さうかも知れませんが。然し、私は太子が大嫌ひなのです。太子のお命をお助け申すだけで十分ではありませんか。そんなにまでして盡すことはないのです。」

「いや／＼、お前は飛んでもないことを云ふ。」と霖泰の聲は少しく低くなつた。「太子はどこまでも我々の力をお借し申さねばならぬ方だ。それにお前にして見ても、身分を考へて見なさい。」

「いゝえ、私は何んと仰有つても太子が嫌ひです。それに身分のことなど、お父様にも似合はな

いことを仰有るではありませんか。それはほんの口實に過ぎませんわ。」

「口實？ さうだ、口實だつてことは私も認めよう。然しお前は太子と結婚すべき女だ。生れた時からさう定まつてゐる。太子はお前を戀してゐる。それが分らぬお前ではあるまい。」

「分つてゐます。つい先日だつて、ずる分思ひ詰めた様子でいらつしやいました。でも、私は太子が嫌ひです。嫌ひです嫌ひです。太子なんぞ死んで了へ！」

「馬鹿！」 霖泰の聲は押へ付けるやうに太かつた。そしてその間に混じつて芳蘭のヒステリックに獻欵するのが聞えた。「そんなことで大事業が出来るか！」

「大事業なんぞどうでもいゝのです。私は自分の一生を暗い宮城でなど過ごしたくありません。えい、私は太子とは一生結婚を致しません。」

「さて、仕方のない奴だ。」とそこで又聲を落した。「が、無理のない處もある。私はお前に言はれるまでもなく、どんなにか心苦しいのだ。私は若い命を踏み躪らうとしてゐるのだ。が、太子は最後の幸福を獲なければならぬ。十善の御幸福を奉らねばならないのだ。もう時は迫つてゐる。それまでの辛棒だ、どうかお前は太子のお心を慰めて呉れ。太子は、あの様子では、何時、何處で飛んでもないことをなさるとも分らぬ。のう、芳蘭、私は淵龍准にさへ下げなかつた頭

を、お前に向つて下げるのだ。これまでの長い苦心を無にせぬやうに、のう、頼む。」

「あゝ、あゝ、どうしても——」

それからあとは何かぼそくと霖泰が芳蘭を宥める様子で、全く言葉は聞えなかつたが、浩六の心は淋しくなつた。霖泰がさう思つて呉れるのは有難かつたが、心のない亡骸を迎へて何んとしようぞ。とぼくと自分の居室に歸つたが、紫檀の長椅子にどたり身を投げ、ホツと深い息を吐いた。

「霖泰老人の心根を思へば私は茲にゐねばならぬ、彼は私を守るために、あらゆる犠牲を拂つてゐるのだ。が、芳蘭は私を愛して呉れぬ。遊び友達だけの彼女だつたのだ！」

碧漾莊をこのまゝ飛び出さうかと思つたり、又はもう一度だけ芳蘭に訴へやうかと思つたり、今や彼には全く昔日の面影がない。終日寢室に閉ち籠る日が多くなつた。この調子で行けば霖泰の言つたやうに、ハオリウ浩六は何時どんなことを仕出來すか、自分でも自分が分らなくなつた。僂僂男の張陸榮を幾度足蹴にしたことか。その度に霖泰か芳蘭が飛び出せば反抗しようとする陸榮を押し宥め、そして我儘いづばいの王子様を、甘やかすやうにして慰めた。

「分つてる。分つてる。霖泰、君の言ふことは分つてる。」浩六は罵るのだつた。「いや、悪いとも

思ふ。だが、勘忍をして呉れ！」

「はい、ご尤もでございます。御無理はありません——」

流石雄辯家の霖泰ではあつたが、この激しいやんちゃな王子様の御怒りには、如何とも口の入れやうがない。時によると情けないといふ顔で、眼を赧くさへしてゐるのだつたが、それでいて、結婚問題は二人共に一言も口へ出さず、ただ芳蘭を中にしていぢめ抜いてゐるだけだつた。若しその時に芳蘭がゐれば、彼女は何も言ひ得ずに肩を慄して咽び入るので、そのぶるくと慄へてゐる金の簪を眺める時、王子様は益々御怒り遊ばされて、

「いゝです。芳蘭さん。何も泣かなくなつたつていゝんです。僕は只いらくするだけなんです。このいらくする氣持が、あなたなんかに分るものですか！」

吐き出すやうに、或は又わざとゆつくり、さう言ふのであつた。

さて、このやうな状態が益々ひどくなつた時であつた。それは霖泰の心盡しでもあつたらうか。一日霖泰は浩六の前へ出て、その夜大廣間に於て盛大な饗宴を張る旨を申上げた。

「今夜こそは全くの無禮講でございます。たあつの御心を慰める爲に、あらゆる歡樂を用意しました。」

「何時からですか？」

「午後八時からでございます。數々の催しものもございませし、恐らくお氣に入るのでございませう。尤もお断り申上げて置きますが、催し物の第一回が終つたところで、會場へは三人の見知らぬ紳士が現れます。その時會場にをる一同は退席して、廣い部屋の中に、たあつと私等父子及びその三人の紳士だけになりませうが、どうかたあつは威嚴を持して、紳士を靜かにお招き下さいませ。」

「それはお客さんなのでですか。」

「はい、最も大切な客人であります。紳士達はたあつに母國からの書面を持つて参りますので、それを即座にお讀みになり、卓子の上へ廣げたまふ、はい、廣げたまふにして下さいませ、私が傍からそつと讀まねばなりません。そこで廣げたまふ「御苦勞だつた」かう仰有ればよろしうございます。」

「なんだか面白いことやうですね。」

「はい、清朝時代の思出の一つでございます。」

霖泰老の言葉には大抵の場合に、ちよつと妙な味があるのだつたが、その時程、意味あり氣に

聞えたことはない。催し物といふのはどんなものであらう。そしてその三人の紳士はいつたい誰だらうか。憂鬱であつた浩六も、流石に気分がソワソワし出して、夜の八時になるのを待ち兼ねた。僂僂の陸榮までが嬉しさに落ち付かず、いつも程姿を見せなかつた。

やがて、古風な銅羅が鳴ると、芳蘭がいつもより盛装してハオリウ浩六を迎へに來た。いつもはガランとしてゐる大廣間がキラキラと短檠の灯影に照らされて、いとも晴れやかなる饗宴場である。尤も、ほんとうの客分といふものは少いらしく、後方にしつらへた一段高くなつてゐる席には、たつた六つの椅子があるだけであつた。その前に傭人達の席が二三十、彼は悠然とその間を通り抜け、席に着かうとした時に、思はずキツと緊張した。背後に、青い地に日輪を追ふ金の龍を縫ひつけた旗があつたのである。愛國心といふやうなものが、勃然と胸中に湧いて來た。それは、未だ且て覺えぬ不可解なる感情であつた。

席に着くと不思議に劉曉たる樂の音が起り、二三分経つと、給仕達が料理の皿を運んで來た。銀や、金の鳳凰を鮮かに描いた大きな皿に、燕の巢、色で縞をつけた茄玉子、ピーンと跳ねてゐる燻し鯉、大きな蝦の煮つけなど後から／＼運ばれて、續いて様々な恰好をした酒の容器が並べられ、その時、頭上には數十の岐阜提灯がパツと點火された。

「たあつの御健康を祝します。」

左隣りに坐つた霖泰がかう言ふと、左隣の芳蘭、そして一同が立ち上り、グラスをカチ／＼と鳴らし合せた。

ハオリウ浩六の顔はボウと上氣して來る。

「有難ふ。」

言つて、香りの高い酒をぐつと呑んだ。

七

浩六の眼元がほんのりと紅くなつた時、前面の緞帳がする／＼と上がり、浩六はふ一つと息を内へ引いた。第一回の催し物が始まつたのだが、流石は霖泰が考へ出したものだけはあり、それは彼の心を全く有頂天に、然も蕩然とさせるやうなものであつた。日のいつばいに當つてゐる春の野で、數人の童女が舞踊するだけのものではあつたけれど、舞臺効果の巧みさは、浩六の心をすつかり幸福に充して呉れた。

と、やがてこの舞踊が終ると同時に、豫て言ひ渡してあつたのだらう、一同は音のしないやう

に席を立つた。そして彼方此方の帷の中へ消えて行つたのであるが、その時、舞臺の眞下には忽然として三人の紳士が現れた。禮装をして、中央の一人は金欄の包を兩手に捧げ、靜かに靜かに進んで來た。

カタリ、

音をさせて浩六は立上つたが、ふと氣が付くと左隣の芳蘭は、何故か眞蒼な顔をこしてゐる。氣のせるか、膝の上にあるナプキンの端が、ふるく、ふるく、と戦いてゐた。霖泰の顔を横目に覗くと、口邊にはいつもの柔和な笑を漂はしてゐるが、眼中はふいに光を増して來たやうである。それで浩六はギクツと硬直したが、既に三人の紳士は眼の前へ押し迫つて支那風の禮拜をした。

何か言つた方がよいかと思つたが、なんとなく唇が硬ばつて、黙つたまゝ立つてゐると、紳士の一人は三步前へ進み、金欄の包みを叮嚀に解き、中から薄紙に包んだ象牙の文箱を出した。そしてそれを金欄の布に載せたまゝ差出す。浩六はすつと手を出して案外無雜作に受け取つた。上の薄紙を破ると、箱には封印が施してある。たいへん嚴重に、蓋の合せ目は全部透明な厚紙で貼り合せてある。見れば箱の傍には紙切り小刀も並んでゐるので、それで封印を切らうとする

と、芳蘭がふいに、

「あッ！」

と叫んだ。

その時始めて氣附いたのだが、浩六に最も接近してゐたのは芳蘭である。霖泰も三人の紳士も確かに三四尺以上を離れてゐた。そして芳蘭は聲を立てると同時に、浩六の腕をぎゅつと掴み、そのまゝ左へ懸命に引いた。

霖泰と三人の紳士とはちよつ呆氣に取られたものらしい。瞬間ぼんやりしてゐたが、浩六は本能的にある種の危険を覺つたのだつた。腕を引いて呉れた芳蘭よりも一足先きに、左方へ向けてパツと飛んだ。そして、ヤツと掛聲をした時には、曲馬團の昔、小屋の天井でブランコに飛び付く姿勢をそのまゝに、一間以上離れた窓框の上に手を掛けて、廊下へスポンと飛んで了つた。「待て！」といふ聲とそれに混じつて芳蘭の悲鳴と、それを背後に聞いたのだが、彼はいつの間にか三つ四つの堀を躍り越えてゐた。自分でも殆んど無意識であつた。何が彼をさうさせたか、彼は少しも考へなかつた。只無暗に、足の筋肉の躍動するがまゝに、眞暗な堀の間を走つてゐた。

が、やがて氣付くと、彼は例の洋館の前に立つてゐる。すぐに最後の塀を乗り越さうとして、然し、洋館の中へすつと這入つた。追ふ方も早かつた。背後にハタ／＼といふ登音が聞えて來たのである。彼は洋館の中に身を潜めてちつと戸外の様子を窺つた。

登音は色々の音がした。確かに二三人は來たらしい。何かボソ／＼囁き合つて、それから彼方へ消えて行つた。何分経つたか覺えがな。浩六はちつと耳を澄ました後、そろ／＼と洋館を抜け出して、一旦は外側の塀に近づいたが、思ひ返して逆に碧漾莊の方へ進む事にした。まだ理由が呑み込めないで、分るものなら見届けて來ようと思つたのだつた。

途中で影のやうな男に摩れ違つたが、向ふは聲を掛けなかつた。寧ろこちらを恐れてゐる風であつた。

「なんだか陸榮に似た男だぞ。が、陸榮なら僣僂の筈だし——」

さう思つただけで通り過ぎた。

碧漾莊はどんな騒ぎかと思つたのが、案外しーんと靜まり反つてゐる。それが餘分に氣味悪く思はせたが、大膽にも横手の勾欄を攀ぢらうとすると、そこで芳蘭が倒れてゐるのを見た。

「あ、やられてる！」

聲は呑んだが、芳蘭を肩に擔ぎ、暫く迷つた末に、廢物小屋の前まで運んで來て、そこへ下さうとして、芳蘭が眼を見開いたのに氣が付いた。

「僕だ。僕です！」

芳蘭はまじ／＼浩六の顔を見たが、突然、ひしと抱き付いて來た。

「嬉しい。歸つて來たのだ！」

「え、なんです？」

ハオリウ浩六にとつてそれは全然豫期しない言葉であつた。分らないながらに躍るやうな喜悅を感じて、兎も角、芳蘭を小屋の中へ運び込むと、そこで次のやうな言葉が取り交されたのである。事の真相は今漸く彼の眼の前に展開し始めた。

「私はどんなに苦しんだでせう。でも、到頭時が來たのです。私があなたをどんなに愛してゐたか、あなたは少しも知らなかつたのに、やつと聞いて貰へる時が來たのです。」彼女は先づさう言つた。

「嘘です。浩六は言つた。あなたが僕を嫌つてゐることを、僕はあなたの口から聞きました。さうです、恰度この小屋です。あなたがお父さんに向つて、僕を嫌ふ旨を告げてゐるのを、僕はす

「つかり聞いてみました。」

「あゝ、あの時に！」芳蘭はちよつと考へたが、やがて晴々しい聲で言つた。「無理はありませんでした。私はほんとうにたあつが嫌ひだったので父に向つてそれを訴へたのです。」

「ぢア矢張り——」

「いゝえ、たあつといふのはあなたではありません。あなたは只の日本人です。チウハオリウも嘘なのです。」

「え？　ほんとですか？」

「私はほんとうのたあつを愛することが出来ませんでした。そしてあなたを愛してゐたのです。あなたに樓臺の上で愛を打明けられさうになつた時、さうしてあれから後あなたが悶えていらつしやる時、私はどんなに苦しんでせう。父は、私は身分があるのにあなたは何んの身分もない。それだけでも結婚は許せないと申すのですが、私はあなたが身分のないのを羨しくさへ思ひました。」

「ではあの時お父さんが身分のことを言つてをられたのは太子の身分ではなくて、僕の身分のことだつたのですか。」

「さうですわ。尤も父自身、それは口實だとも申した位ですけれど、あゝ、何から話したらいいでせう。あなたは、どうしてこんなことになつたのか、少しも御存じが無いのでせう？」

「分らんです。あなた方はいつたい日本人ですか支那人ですか。」

「支那人です。父や私が且てお話し申した事柄は、あなたとほんとの太子とをいれ代へるだけで、全部本當のことなのです。ただ、ほんとの太子は、こちらへ亡命してから、ずっと碧漾莊にゐられました。そしてさうです、父は私の兄が殺されたと申したでせう。あれは全くの偽りです。あなたが太子だといふことを心の底から思ふやうに、あゝした狂言をしたのでした。」

「いつたい何故こんなことをしたのですか？」

此邊りから芳蘭の言葉は大分順序が亂れて来た。だから便宜の爲に芳蘭の言葉を要約しよう。

太子が現存してゐることが、反太子派の大頭目淵龍准に臭ぎ付けられたこと、それが事の起りであつた。林霖泰は他日太子を補助して母國を統一しようと考えてゐる國士であつた。が、それが未だ時期の至らぬうちに暴露しさうになつた。一方蓄財の方も手薄くなり、霖泰は苦境に陥つたが、浩六が太子に似てゐることを偶然なことから發見し、こゝに彼獨特の、然し極めて支那式な計畫を立てた。即ち、浩六を太子にして反太子派に渡さうと思つたのである。然もそれに對

して莫大な金額を送られる筈だったので、眞の太子はそのままに残り、同時に缺乏しかけた軍事費も手に入るといふ、一舉兩得の計画であつた。

ところで然し霖泰は浩六をむざ／＼殺すに忍びなかつた。彼の性格の然らしむるところだが彼は浩六を憐れに思つた。死ぬ前にあらゆる幸福を興へてやり度かつた。最後の瞬間まで幸福感のうちに置いてやり度かつた。そして計画は益々大袈裟になつたわけである。どこまでも本人が太子だと思ふやうに仕向け、最後をも清くさせる爲に、饗宴場でうつとりと、然も太子のまゝに死なせてやり度かつた。只彼が苦しんだのは、太子と浩六との間に芳蘭のある事であつたが、彼はそれに就いて、芳蘭以上に苦しんでゐた。戀を興へずに若者を殺すことがどんなに酷いことであるか、彼は充分に知り抜いてゐた。芳蘭も勿論それを知つてゐるので、彼女も又浩六に對して益益哀憐と執着とを感じたが、どちらかと言へば霖泰の方が苦しかつたのかも知れない。

「ですから。」と芳蘭は言葉が続けた。「父も苦しむことは苦しんでゐます。今夜の宴會にしても、普通なら何もあゝまでする必要はなかつたのですが、あなたが悶えてゐらつしやるので、そのままでは父の思切りが付きませんでした。あの象牙の文箱の中には大變いゝ香りのする瓦斯が這入つてゐたのです。前の催し物を観ただけでもあなたは大分うつとりとなすつたやうですが、あ

れを嗅げば、そのまま眠るやうに命が絶たれるのでした。私、ぢつとしてゐましたけれど、堪らなくなつて、あなたの袖を引いたのでした。」

「それであれから後はどうになりました。」長い沈黙の後に浩六は、ぶつきら棒にかう口を挿んだ。「どうなつたか知りませんが……」芳蘭はふいに涙ぐんだ。「父はあの三人の紳士に殺されて了つたのかも知れませんが。父も可哀相な父でございました。私をよく愛しても呉れましたし、えゝ、母が亡くなつてから父はずつと獨身で通し、只いろいろな趣味に没頭してゐたのです。そして一方には苦心慘澹して清朝の回復を圖つたのですの——」

「それで、ほんとうの太子といふのは誰です？」

「僞僂に化けてゐた張陸榮です。」

「さうですか。分りました。碧漾莊のほんとうの主人はあの張陸榮だつたのですね。」浩六は格別驚かずにさう言つた。

と、浩六がすつくり立上つたので、芳蘭は驚いたらしく浩六の首に腕を廻し、

「怒らないで下さい。ね、ね。父はほんとうにあなたには濟まない濟まないと言ひ續けてゐたのです。可哀相なお父様！」

浩六はぢつと芳蘭の顔を眺めてゐたが、やがてひしと抱き締め、熱い唇を押し當てた。そして言つたのである。

「さあ、行かう、芳蘭さん、一緒に来て下さい！反太子派の使者は、まだ僕が太子でないことには氣付かぬ筈です！」

八

青年泉浩六は林芳蘭を伴つて、やがて碧漾莊に駆けつけたが、いきなり以前の饗宴場に踏み込むと、そこに林霖泰が、今しも三人の紳士に短刀を突き付けられてゐるのを見た。

「待て！」

彼は叫ぶと、芳蘭を軽々と抱いて前面の舞臺に上り、そこでかう言つた。

「待ち給へ、母國の紳士諸君。僕は天命を知つてゐる。諸君は國へ歸つて××帝の遺子がどんなに立派に死んだかを、間違へないやうに傳へるがよい。さあ、君達の持つその短刀を、この壇上のたあつ、即ち碧漾莊の主人に向つて、勢よくサツと投げ給へ。」

霖泰がはつとした風を見せたが、その時、浩六は芳蘭に向つて小聲に聞いた。

「一つ忘れてゐました。僕のお母さんのことを調べて置いて下さらなかつたでせうか。青い着物を着た人ではなかつたですか知ら？」

芳蘭は何か小聲に答へたが、どのやうな答へだつたかは分らない。浩六はニツコリと合點をした。

「用意は出來た。一度に三挺、君等の腕を振ふがい。一本は僕の心臓に、一本は妃芳蘭の心臓に、残る一本は、さうだ見事に僕等の間を抜いて見給へ！」

さう言つて、三人の紳士が短刀を振り上げるのをチラリと見て、それから靜かに、泉浩六のハオリウは眼を瞑ぢたのである。

ぎん子の靴下

佐々山格之進とぎん子とは、郊外のあるアパートメントハウスに住んでゐた。階下に六家族、二階にも六家族、中央の廊下を境にして對稱的に三戸づゝ、きまりよく並んだアパートメントで、格之進夫妻は二階の日當りよい南側、三つ並んだうちの真中にゐた。東の壁隣りには佐竹といふ四十恰好の紳士がゐた。どこかの専門學校の教授ださうだが、主人を始め家族全部がひどく無口な人達である。朝晩顔を合せても簡単な挨拶を交すだけであつた。西隣りには灰野といふ獨身者の文士がゐた。一人つきりで、格之進の見たところでは、時に食事をする爲に外出するのと、極く稀に鎌倉邊へ原稿を書きに出かけるのと、後は日がな一日家の中に閉ち籠り、近所を訪問するやうなことはない。従つて兩隣りとも格之進達とは殆んど没交渉に暮してゐて、世間並みな小煩い交際がなかつた。尤も前の方は廊下を隔てゝ、音楽好きで家族が住んでゐて、少々八ヶ間敷くないでもなかつたが、兎に角洋風には出來てゐたし、書齋、居間、

寢室などの間取りもよく、格之進達は満足してゐた。

「これに浴室が附いてゐたら、あたし申分ないんだけど——」

洋風の暮らし方を望んだだけであつて、ぎん子はそんなことを言つてもゐたが、ハイカラな彼女にも、その他では大分氣に入つた風であつた。そして格之進に見れば、彼はぎん子さへ満足すれば、それが何よりの喜びである。彼はたいへん幸福であつた。

格之進が幸福だつたといふことについて、茲に少しばかり説明した方が便利であるが、それはこれから話さうとする事件に關聯して、その前夜の出來事を述べた方がよいやうである。前夜、彼は九時頃に家へ歸つて來た。

彼は或る保險會社に勤めてゐた。非常な好人物で頼まれゝばどんな仕事でも厭とは言はない。それで時々居残り仕事などをさせられるが、その時もさうした居残りで、最初の豫定では夜の十一時頃までかゝりさうであつた。それで家を出る時には、ぎん子にもさう言つて置いたのだが、それが二時間も早く片附いて了つた。

歸つて來ると、裏から自分の家の窓が見上げられる。淋しがつてゐるのだらうナ、さう思つて來たのだつたが、その時の窓を眺めると、電燈が消えて暗かつた。隣りの佐竹氏も文士灰野もま

だ窓にカーテンさへも下ろしてゐない。妙だナ、何處かへ出かけたのか知ら？ 軽い不安を感じたが、然しそれも束の間である。表から階段を上つて扉を開けると、ぎん子がぶーんとばかりに飛び付いて来た。

「あゝ嬉し、早かつたのね！」ぎん子は首玉にぶつしりと絡みついて、息をせい／＼言はせながら囁いた。「一人つきりなんだもの、怖くつて淋しかつたのよ。寢床に這入つてたら、あなた向ふの方へ見えたわね。嬉しかつたわ！」

ぎん子は格之進の頬だの唇など、闇の中でスパ／＼と吸つた。が、氣が付いて見ると、ぎん子は寢床からスポットと飛び出したばかりと見えて、弾力のある滑らかな皮膚が、どこへやつても手に觸つた。

「これ、これ——」

格之進は闇の中で眞赤になり、叱るやうにそんなことを言つて、ぎん子を寢臺の方へ抱へて行つた。

「風邪を引いて了ふぢアないか。」

「いゝのよ。大丈夫よオ。あたしね、もつと吃驚させてやる積りだつたけれど——」

「うんうん。」

格之進はしみ／＼幸福を感じたのだつた。

二

翌朝、格之進は六時半少し過ぎに目を覺ました。いつも彼の方が早く起きて食事の仕度などをするのだつた。

ぎん子はまだぐつぐつと眠つてゐた。ふさ／＼と縮らしたバブの下に、こちらから見ると剃り立ての青い項が透いて見える。身動きをするとムニヤ／＼言ひながら仰向きになつたが、額から丸つちい鼻の兩側へかけて霞のやうな脂が浮んでゐる。小さい頤を一寸反らして、薄い唇を金魚のやうにぼつかりと開き、覗くと可愛らしい齒並みから紅い咽喉の奥までが見えさうである。彼はぎん子の目覺めぬやうに、そうつと寢臺を脱け出した。

洗面所へ行つて齒をゴシ／＼やり始めると、アパトメントの下を、花屋の車が朝露を踏んでごろ／＼と向ふへ曳かれて行く。彼は齒ブラシを唾へたまゝで階段を飛び下り、ぎん子の好きさうな花を三つ四つ買つた。盗人のやうにして寢室へ這入り枕元の一輪挿しに花を活けて、眼覺めた

時には、何處へ置いたらすぐ眼に付くかと、少し思案してそれを窓框へ置いた。

瓦斯の出が悪かつたので、バーナーの口を調べたり、活栓を抜き出して掃除したり、到頭諦めて點火すると、今度は押入れや洋服箆を静かに開けた。ぎん子がかういふことは投げ遣りで、汚れ物や襪褌層など、あちらこちらに押し込んである。時々格之進が始末をせぬと、家中が襪褌と紙屑ばかりになつて了ふ。ぎん子の子供っぽく、さうしたうちやりつ放しのところが、彼としては又なく可愛ゆい。それに就いて女中を置かうかとして見たが、さうなると又彼女は、口だけはいかにも主婦らしく、二人つきりの生活に女中などは贅澤であるといふ説を立てる。

「女中なんかあなくて、あたし充分出来るよ。だけどあたしがやらうと思つた時は、いつだつてあなたがやつて了つてあるんですもの。」

彼女はいつもかう言つて、それで彼女に任せると、汚いものは奥へ奥へと押し込んで行く。それがよい加減貯まつた時格之進がそうつと始末するといふ譯であつた。

格之進が捨てるものを一纏めにして、階下の塵埃箱まで行つて来た時、ぎん子は漸く眼を覺ました。寢室の方でござくと音をさせ、着物を着替へ始めた氣配である。彼は寢室の扉をコツコツと叩いて、それから中へ這入つて行つたが、ちよつと悪いところへ来たと思つた。ぎん子は家

にゐても外出しても、伸べつたらに洋装をしてゐるのだが、見ると中腰になつて寢臺の下を覗いてゐた。短いスカートから兩の脚が露になつてゐる。靴下を穿いてゐなかつた。妙にぎこちない恰好であつた。

「どうした、え？」

格之進は何氣なくさう訊いた。

「あ、あの——あなた靴下を知らない？」

「靴下つて、どうしたの？」

「どこかへ行つちやつたのよオ、無いわ。」

「つい二三日前に買った乳色の奴かえ？」

「さうよ、あれが見えなくなつただけで、ずるぶんへんだわねえ。」

「どらく、僕が探してやらう。自分で脱いだ時に、何處へ置いたと思ふのだ。」

「いつも脱ぐ時にはその椅子の上へ置いとくんだけど、着物だけ有つて靴下が無いの。」

「寢臺の下は？」

「無いの。、んねえ。」

へんねえ、と言つた時、ぎん子はどうしたのか格之進の顔を見て、軽く呀ツと叫びさうにした。と、彼にはまたそれと同時に、今自分が襪履や紙屑の始末をしたことが思ひ出された。

「あ、あそこかナ？」

と言ふと、ぎん子の視線と格之進の視線とが衝突した。

「あそこつて何處なの？」ぎん子はふいに、鋭い聲を出した。

「うん、今ね、襪履やなんか始末したのだ。下の塵埃箱へ捨てゝ来たが、待てよ、あの中へ紛れ込んで了つたかな。」

「塵埃箱へ？」

「さうだ。が、どうもあの中にはなかつた筈だ。さうだ、矢張りこゝにあるよ。」

格之進はさう言つて再び室内を探し始めようとしたのだつたが、ぎん子は急に不機嫌になつた。

「そんなとこ、あたし散々探したわ。あなたがきつと塵埃箱の中へ捨てゝ来たのよ。見て来てちやうだい！」

「見て来るのはわけはないが、だつてそれア無駄なんだ。確にあの中へは入れなかつた。もう一

度茲を探して見よう。」

「ないつてば！ 誰が探したつてないものはないのよ。ね、見て来てちやうだい！」

「必要が無いと思ふんだがなア。」

「見て来て下さらないの？」

「いや、いやさうぢやないさ。見て来るよ。ただ無駄だと思ふんだよ。」

ぎん子は靴下を塵埃箱の中へ入れて了つたと考へたらしく、格之進は仕方なしに階下へ行つた。が、運の悪い事には、ほんの僅かの間に、掃除夫が来て箱の中を空にしてある。追ひ掛けようと、思案したが、彼としてはまさか一日前に買ったばかりの靴下を、襪履と間違へた覚えはなかつた。それで二階の家へ歸つて来ると、ぎん子は容易に納得しない。彼の過失だといふ説を固持し始めた。

三

「だつて、あたし昨夜歸る前に、ちやあんとこゝへ脱いだんですもの——あなたよ、あなたが悪いんだわ。」

「それアね、さう思ふのは無理もないが、私にはその覚えが決して無い。」
 「ぢや、矢張りこの部屋にある筈ね。探してあつたらあたしが悪んだけれど、でなかつたらあなたなんだわ——」

「それアまあさうだが——然し、歸る前に脱いだんだね。そこで私が歸つて来た時、あの時は寢床から脱け出して来たので、して見ると——その時は無論靴下は穿いてゐない。つまり、先きに脱いだ着物と一緒に……」

「そんな、そんな探偵みたやうな調べ方しなくつても——」ぎん子はふり／＼して言葉を挟んだ。

「まあ／＼、順序を立て、調べるのだ。そこであれから後に枕下の臺ランプを點けたね。さうだ。さう言へば私はその時に、お前の着物が椅子の上に投げ掛けてあるのを見たんだが、然し靴下は見なかつたね。いつもの癖に従つたとすると、靴下は最後に脱いだやうに思ふのだが、それとすれば着物の上に乗つてゐる筈だ。そこで——」

「駄目よ。そんなことを言つても駄目なのよ。オ」ぎん子はぢれ／＼した風であつた。

「あと少しだ。ね、そこでだ。お前の着物は青いのだし、靴下は乳色の長いことから、着物の上にあつたとすれば、どうしたつてはつきりと眼に付く筈だ。それでそれが私の記憶にないといふ

のは、いや考へて見ると、これはお前がきつと何處かへ脱ぎ忘れたのだ。いつもと變つた場所だね。よおく考へてごらん。昨夜は私が歸つた時はあんな風だし、お前が脱いで何處へ仕舞つたのか、私には見當が付かないのだ。」

格之進は名探偵のやうに推理をして、無論その間も部屋の中を、あちらこちらと睨め廻し、終りには腹ん這ひになつてもみたのだが、結局、ぎん子が度忘れをしたといふ結論を得た。

「だからね——」

と言つて寢臺の横から身を起し、何か次の言葉を言はうとしたが、その時彼はハツと困惑した表情になつた。ぎん子が寢臺の上へ突俯して、悲しさに泣いてゐるのだ。

「こ——これ、どうしたのだ、え、え？」

ぎん子は激しく頭を振つた。

「よ、何故泣くのだ？」

「いゝわ、あたしもう知らない！」

「え、何故さ？」

「だつて、あたし——あんまりあなたが、自分でしたこと言はないで、いゝわ、あたしのことは

かし、——」
 くるりと向き直つたぎん子は、一度ツシンと音を立て、寢臺の端に腰を掛け、すんなりした二本の脚をむき出しに、それを前後に交る交る揺すぶつて、前の椅子をバタン／＼と蹴飛ばした。

格之進は吃驚した。鳥渡の間途方に暮れた。が、そのうちに彼は、この駄々をこねてゐるぎん子の姿が、堪まらなく可愛ゆいものに思へて来た。しつかりと抱いてやると、子供の掌に握られたバツタやおけら虫と同じやうに、案外強靱な四肢を突張つて、格之進の腕を撥ね退けようとする。バブの頭を無理矢理に擡げようとした。

「いゝよ、泣くことは無いぢやアないか、ね、お前が悪いといふのぢア無いんだ。只、この部屋に有るかと思つて——」

「無いつてば！ ある筈がありつこないの！」

「それが然し——」

「あら、まだ言ふの！」

「いや、さう／＼。」格之進は狼狽て、言ひ直した。「この部屋には無いんだ。それはもう私だつて

探してみたし、充分無いことは分つてゐる。」

「だから、あなたが——」

「さうだ、さう言はれて見ればさうなのだ。私が間違つて襪の中へ入れて了つた。私が悪かつたのだ！」

「さうよ、きまつてるわ。」

「その通りだ。お前の考へたのが當つてゐた。だからね、もう機嫌を直してお呉れ。」

ぎん子はそこで漸く駄々を言はなくなり、やがてニンマリと笑ひ出した。幾つも溢れ落ちた涙の玉が、膝の上で丸い環になつて残つてゐる。きまり悪さうに彼女は、それを人差指で塗り潰すやうにぐり／＼して、それから受け唇をして顔を上にひよいと向けた。

靴下がいつたい何處へ行つたか？ 格之進はそれが自分の過失でないことは確信してゐたし、それかと言つて探すべき場所には總て探した。それで少々不審も残つたのだが、彼としては、もうどちらにしてもよくなつた。自分の過失だとしても構はない。彼はぎん子の涙を吸つてやつた。

ところで然し、ぎん子に合憎と他の靴下が無かつたので、それには少し當惑した。が、結局は留守中を素足のまゝにはして置けない。彼は朝飯を済ますとすぐに、靴下を買ひに行かねばなら

なかつた。不便なことには、それが又近所では手に入らぬ。ぎん子の好むやうな品物がそこらにないので、彼は到頭會社へ缺勤の旨を通知して、靴下一足を買ふ爲に、郊外から市内まで、三時間近くを費して往復せねばならなかつた。買つて歸つて見ると、もう十時半を廻つてゐる。

「仕方のない奴だ。然し、もんだなア！」

もんだなア、といふのは、格之進がどうかした場合に用ふる感動詞である。感心した時、嬉しい時、場合によつては困り切つたといふ時などにも使ふのだが、彼は腹の中でしきりにその感動詞を繰り返しながら、アパートメントの階段をゴト／＼と上つて行つた。

四

鍵で扉を開けて這入ると、ぎん子は仕方なしに寢臺へ上つて、毛布で脚の方を巻いてゐた。

「ほら、買つて來たよ。」

と言つて格之進は、ぎん子の眼の前へ靴下の包みを突き出したが、その時ぎん子は珍らしくも少し伏目になつて、

「ありがと。だけどあたし、謝るわ。」

と言つた。

「何故？ 靴下が出て來たのかな？」 格之進は可笑しくなつて、笑ひ出しさうなのをやつと堪らへた。

「いゝえ、さうぢやないの。靴下は矢張りこの部屋には無いんですけれど、あれはあなたが悪いんではなかつたのよ。」

「へええ？」

「分つて？」

「分らないね、どうしたんだい？」

「今ね、こゝへ刑事が來たのよ。」

「え、刑事！」

「えい、刑事が來てね、あたしこんなうまい恰好でしょ。だから扉の向ふとこつちで話をしたんですけれど、どろぼうが這入つたのよ。昨夜——いゝえ、今朝方、このアパートメントへどろぼうが這入つたんですつて。」

ぎん子の話を聞いて見ると、これは甚だ意外であつた。今朝の午前二時頃、このアパートメン

トへ泥棒が這入つた。數家族のうち、被害のあるのが大分あつた。不思議なことにはどの家でも、今朝見たところでは、窓や扉に破壊された所がない。昨夜寝に就く前にした戸締りがそのままだが、家の中の品物は盗まれてゐた。殊に又奇體なのは、女の肌に着けるものばかり、タヲル地の肌着だとか縮緬の蹴出したとか、さう言つたものが無くなつてゐた。最初氣が付いたのは階下の北西の隅にゐる中學校の教師の家であるが、その妻君が騒ぎ出して、それから刑事が調べに來たのだと、いふことであつた。

「あたしかう思ふわ。」とぎん子は言つた。「あの靴下は泥棒にやられたのぢやないか知ら。」

「もんだなア。さうすれアさうかも知れないね。變態性慾の泥棒だね。」

「あなたが悪いのでもなかつたし、あたしが置き忘れたのでもないんだわね。」

「フ、フ、大きにさういふ譯だつた。それで靴下を盗まれたことを訴へて置いたか？」

「いゝえ、氣まりが悪かつたし、言はなかつたわ。なんだかねえ、いやぢやないの。」

「だが、泥棒が捕まれば、靴下を取り返すことが出來たのに——あれはお前、絹編みなんだから惜しいねえ。」

「だつて、この泥棒なんか捕まらないわ。戸締りをそのまゝにして、ねえ、あたし達の家だつて

さうでせう？　そして這入つて來た泥棒なんですもの、幽霊みたいな泥棒で、きつと捕へることは出來ないと思ふわ。」

靴下紛失事件はこれで一段落のついた形であるが、かうなつて見れば、格之進の興味は極めて自然に泥棒の方へ移つて行つた。自分では意識せずにあるのだが、彼には多大の探偵的要素が備はつてゐる。極く有りふれた變態性慾の盜賊であるが、戸締りをそのまゝにして、何處から這入つたのか、その點が甚だ面白かつた。

「で然し、刑事には何か手懸りがあつたのかしら？　戸締りをそのまゝにして這入つた泥棒なんて、外國の探偵小説のやうな奴だねえ。」

「ほんとな、佐竹さんとこの奥さんも、そんなことを言つてよ。」

「佐竹さんて、お隣りでもやられたんだね。」

「えゝ、ほんとに珍らしいことだけれど、あたし今日は始めて奥さんと長い話をして見たわ。向ふとこつちで窓から顔を出し合つてね、奥さん氣味の悪さうな顔をしてゐてよ。」

「で、なにを盗まれたんだろ？」

「奥さんはつきり言はなかつたわ。きつと何か餘程恥かしいものでせう。」

専門學校教授の妻君といふので、いつもつんとしてゐる佐竹夫人が、何をいつたい盗まれたのか、格之進は少々滑稽に思った。

「それで西隣りはどうだらう。こいつは何んともなかつたらうが？」

「西隣りつて灰野さん？ あら、さうだつたわねえ。たいへんたいへん、灰野さんはお留守だしそれから——」

と言ひかけてぎん子は、その時ひどく心配さうに眉根を寄せた。

「何がたいへんなんだい？」

「だつて——」

「大丈夫だよ、灰野君のところは何んにも盗まれるものが無い筈だ。あれア獨身者なんだからな。」

ぎん子は格之進の言葉に耳を傾けてもゐない風だが、呟くやうに言ふのだつた。

「昨夜あたし、灰野さんに貰まれたのよ。今夜十一時頃から鎌倉へ行くから後を宜敷く頼みますつて——」

「今、留守なのか？」

「さうよ、昨夜出かけたまままでしたよ。だから、あゝ、たいへんなことになつちやつた。」

「いゝぢアないか。留守を頼まれたにしたつて、こんな泥棒に遭つては敵はない。家だつて現に靴下をやられてるし、それに第一心配はないよ。泥棒先生、灰野君の家へ這入つて見てがっかりしたね。貧乏な獨身文士の家なんだもの——」

「さうね——さう言へばさうなんだけれど、あたし困つちやつたナ。」

「困ることはないつていふのに。」

「でも——」

ぎん子はそれつきりふつと黙り込んだが、そのうちに格之進は妙なことを考へ出した。

「あ、おい！」

「……………」ぎん子は黙つて考へてゐる。

「おい、ひよつとするとね、おい！」

「なによ、何んなのよオ。」ぎん子は五月蠅さうであつた。

「これはね、實にもんだねえ。」と格之進は急に聲を低めた。

「大きな聲では言へないが、灰野といふ文士ね、あれが犯人だかも知れないよ。」

「あら——」

「文士なんてものにはよく妙な趣味の男があるんだ。私が名を知つてゐるだけでも随分ゐるが、灰野君もそいつではないか知ら？」

「悪いわ、そんなこと言つて——」

「いや、さうでもないと思ふぜ。あの男はお隣りに住んでゐる癖に、私と顔を合せても決して口を利かないやうなへんな奴だ。お前だつていつかそんなことを云つたのだし、うん、これは慥よ、もんだなア。」

五

考へて見れば文士灰野はだん／＼怪しく見え始めた。格之進が言つたやうに、そのへんに秘密の多さうな日常と云ひ、殊には彼であつたなら、このアパートメントの各室の合鍵を作つて、それで盗みに這入ることも出来さうである。どの家の錠も違つてゐるが、その積りですれば、誰にも氣付かれない間に鍵の型ぐらゐは取れるかも知れない。格之進は遂にはつきりとさう定めた。ぎん子はといふと、最初は格之進の説に反対した。が、言はれて見れば格之進の説には理窟が

ある。それでだん／＼に納得したが、何にしても隣り同志ではあることだし、これはそのままに胸の中へ仕舞ひ込んで置かうと言ひ出した。

「だけど、氣味の悪い人だわねえ。」

ぎん子はそんな風に言つて肩を竦めた。

それで靴下紛失事件は、遂にその犯人まで大抵の見當が付いたのだが、それから後一時間ばかりして、格之進は會社へ行かなければならなくなつた。欠勤の通知をしたのだつたが、帳簿のことで分らないことが出来たのだから、成る可くならば入社して欲しい、と頼まれれば厭と言へない格之進の性格を見込んで、會社からの速達である。

格之進は仕方なしに家を出た。昨夜からかけて何んだか面白いことばかりである。いつもより大分澁つたが、結局すぐに鞆を腕に抱いた。

社内では極めて勤勉な格之進であつた。午後一時三十分に出社してから、彼は午後の三時五十分まで、殆んど雑談も交さずに執務した。そしてやつと一息を吐いた時、給仕が一葉の名刺を手にしてやつて來た。

「面會人ですよ。」

「僕にか？」

名刺を手に見ると、××署刑事鈴木六太郎とある。××とあれば、自分の住んでゐるアパートメント附近を管轄にしてゐる警察なのだ。仕事の爲に忘れてゐた今朝の事件！ 彼は何か知らず勇み立つて應接室へ行つた。

「僕、佐々山です。」

彼は言つて鈴木刑事に向き合つた。刑事は年齢四十に近く非常に物馴れたらしい温厚な人物である。

「何か御用ださうですね、ハウスの盗難事件、つまり變態性慾の泥棒の事件ではありませんか？」

格之進の方から少し得意氣に切り出すと、刑事は眼を細くして合點いた。

「左様々々、その事です。實は犯人が擧げられましたね。」

「え？ もう擧げたんですか、へええ？」と言つて格之進は、も少しで、それが灰野であるかと訊かうとした。がさうは口へ出さずにもう一度「へえ？」と言つて感心した。

「はつはは、なにに、呆氣ない位樂なものでした。」と刑事は笑ひながら言つた。「あなたも考へて

をられるやうに、變態性慾者といふことゝ、それに他の場所から這入つた形跡がない、つまり、扉か窓かを合鍵で明けたものといふ二つの點から、すぐに眼星が付いたのです。」

「なる程、僕もそこへは氣付きましたが、で、誰ですか？ 若しかしたら——」

「心當りがおありでしたか？」

「は、いや、別にこれといふ譯ではないんですが……」と格之進は言葉を濁した。

「なに、大工でしたよ犯人は。」

「へ？ 大工？」

「あのアパートメントを建てる時に來てゐた大工です。大工のうち、もう二度ばかり擧げられたことのある奴が居ましてね、これがその變態性慾といふ譯です。あそこを建てる時から計劃をしてゐたものと見え、鍵をちやんと持つてゐました。」

オヤ／＼と格之進は思つた。灰野に對して悪いことを考へた譯である。刑事はそれと氣が付かない。敷島を一本抜き出しながら、今度は少し調子を變へて言ひ出した。

「ところでね、あなたをお伺ひしたのは、實はお隣りにゐられる灰野さんといふ文士ですナ、あの方の居所を教へて戴き度いんですが如何でせう。」

「灰野、はあ、灰野君ですね。」格之進はそこで又ドキンとした。「灰野君がどうかしましたか。」
 「いや、灰野さんがどうしたといふのではありませんが、その留守宅へも犯人が這入つたのです。それで犯人の口と灰野さんの盗難品とを照し合せる必要があるのですが、先刻灰野さんをお訪ねすると昨夜からお留守ださうです。あなたの奥さんにお訪ねしようと致しましたが、合憎奥さんもお留守でして——」

「ほう、家内も留守だつたのですか。」

「はア、何處かへ出掛けられたさうで、それで一軒置いて隣りの佐竹さん、あそこでこのお勤め先きを伺つて来たのですが、如何でせう？ 灰野さんは目下御旅行中でもございませうか？」

「いえ、鎌倉へ行つたさうですが、家内が灰野君にさう言ひ残されてゐるのでして、——鎌倉の何處にゐますか、僕はよく存じません。」

刑事は然し、鎌倉と聞いて安心をした風であつた。ぢきに歸つて來ることが分つたからだが、そこで格之進は一寸訊いて見る積りになつた。

「然し、灰野君の家でも何か盗まれてゐますか。僕はそのことで家内と議論しましてね、灰野君は獨身だから、そんな變態性慾の泥棒なんかには盗むものが無かつた筈だと言つたのですが。」

「獨身ですか灰野さんは？」

「獨身です。女の肌につけるものなんか無い筈です。」

「いや、それが有つたんですよ。靴下ですが、乳色の絹の長い奴です。私なんか匂いで見ても、ちよつとかうほのくするやうな匂ひがありましたね——」

「待つて下さい！」格之進は焦り氣味に口を入れた。「それア然し、少しへんだと思ひますが。」
 「何がですか？」

「靴下のことなんです、それは灰野君のところから盗み出したものではありませんよ。僕のところなんです。え、今朝、あなたですか、僕の留守の時に刑事さんか見えて、その時家内は盗難がなかつたと言つたでせうが、實はその乳色の絹の靴下です。それを盗まれてゐましたので。」
 格之進は最初のうちはなるべく簡單に言ふ積りで、然しだんく詳しく話し出してしまつた。ぎん子の靴下紛失事件を、始めから終りまで話して了つた。

六

格之進が語つてゐる間、鈴木刑事はフン／＼とそれを聞いてゐたが、一通り語り終ると、さも

不審さうに言ふのだつた。

「なるほど、あなたのお話を伺ふと、靴下はあなたのお宅のものですが、然し、どうも妙ですね。」

「何故ですか？」

「犯人が言つてるんです。奴は二階では南側の三軒のうち、その両端へしか這入らないので、真中のあなたのお宅へは這入らないのです。然もです、その靴下の有つたといふ家は、中に原稿用紙などが山のやうに散らばつてゐたのでして、如何です。お宅にも原稿用紙が散らばつてをりますか？」

「いゝえ。」

「して見れば矢張り灰野さんのお宅ではないでせうか。なんでもその靴下は、ひどく亂雑になつてゐた寢臺の縁に投げたやうになつて引掛つてゐたんださうです。お宅の寢臺は亂雑ですか。」

「いゝえ。」

「それにすねえ、犯人が這入つた時にその家はがら明きで、時間は今朝の午前二時でしたが、無論その寢臺にも人はゐなかつた譯です。お宅では？」

「は、いや——」

と言つたきり、その時になつて格之進はふつと答へを消して了つた。急に種々の疑惑が湧いて來た。刑事の言葉によつて見ると、どうも靴下は灰野の家から盗み出されたといふのが本當である。アパートメントであるから屋内の構造は似てゐるが、犯人が端と真中とを間違へる筈もなし、殊に原稿用紙の山積と空の寢臺とは、どうしても説明の附けやうがなかつた。ではいつたい、それはどういふことになるといふのだ！

「然し、その靴下といふのが別物かも知れませんか。」

此の場合刑事がさう言つて呉れたのは最後に許された可能性である。彼はその言葉に甘へて、それから暫らくの後、××署まで行つて、そこにある靴下を見せて貰ふことになつたのだが、さてそこへ行つて見ると、不思議なことに、署にあつた靴下は紛れもなくぎん子の穿いてゐたものであつた。爪先には薄つすらと指の跡が並んでゐる。少し黄ばんで、美しい指と指との間にある、あの妙に汗ばんだ塵埃のやうに、ねつとりとした匂ひを放つてゐた。

「はて、もんだなア。」

彼は口先だけ冗談のやうにさう言つたが、その語尾が消えないうちに、ふつと蒼い顔をして

了つた。

×

×

×

×

×

×

格之進が××署の門を、蒼い顔で退去した時、鎌倉ではぎん子が八幡宮前の若葉の通りを、停車場へ向つて歩いてゐた。が、それはぎん子一人ではない。長髪を風に梳らして文士の灰野がぶらり／＼と歩いてゐる。肩を並べてゐるのだつた。

「すると僕は、到頭變態性慾の泥棒だつてことになつたんだね。」

灰野はニヤ／＼してかう言つた。

「だつて仕方がなかつたんですもの。それアあたし、ずるぶん心配をしたんだわ。最初は靴下を忘れて来たことを思ひ出さなかつたので、だん／＼そんなことを言つてゐるうちに、ふつと氣が付いたのよ。あなただつて悪いわ、いくらあたし達が狼狽たつて、あの恰好で家を追ひ出すんですもの、それで靴下を忘れて来たのよ。あの人が塵埃箱を探しに行つた時あたしあなたの家へ行つて取つて来ようと思つたんですけど、鍵が手にないぢアないの。」

「フ、、、それア困つたらうナ。僕はまた、思はぬ時間に佐々山さんが歸つて来たので、窓か

らひよいと見下ろした時、もうすつかり泡を喰つたのさ。」

「でもね、いゝ按配に盗つ人が這入つたわね。あの盗つ人はとても捕まるものではあるまいし、さうすれば、當分はまだ安心ね。それで然し、今日あなた歸つたら、あの靴下をどこかへ早く處分してね。」

「あゝ、それはいゝが、然し、佐々山さんは、いつまでも僕を變態性慾の泥棒だと思ふんだね。」

「でも、その位は我慢するものよ。あの人には私達のことゝがまだちつとも分らないのであるのだからねえ、いゝでしよ。」

二人がそんなことを話してゐるうち、路は停車場へ行く丁字路へ出た。彼等は無論泥棒が擧げられたとは知らないのである。ぎん子だけ一足先きに、東京の方へ歸ることになつた。

七

ぎん子がアパートメントへ歸つた時、格之進はどうしたか。

不思議なことに格之進はゐなかつた。そして、扉の裏に乳色の靴下が釘付けにしてあり、横に、丹念な文字で簡単な文章が書いてあつた。

ぎん子、左様なら。

今となつて私は何も言はない。

私のやうな性格の男には、お前は全く向かない女だ。

私はお前を恨んでゐない。

お前は愉快に暮しなさい。

格之進は、その前夜のぎん子の態度などから考へて、遂に真相を知つたのである。

そしてぎん子はその時は、ハツと胸を衝かれたやうに、その短か過ぎる文句を眺めてゐたが、

やがて眼頭から、熱いお湯のやうに、止めどもなく涙が溢れて來た。

「あたし、あたし——」

ぎん子はさう言つてそこへ泣き崩れた。

銀座綺譚

断つて置くが、成毛貞介は探偵小説家であつて實際の探偵ではないのである。いつ頃のことであつたか、東京には落語泥棒といふものが出現して——これがどんな泥棒であつたか詳しい説明はよして置かう。誰だつて落語泥棒のこと位は知つてゐる筈だ——この泥棒についてある新聞記者が貞介を訪ねて来た。泥棒の正體を推測して見ろといふのである。貞介は新聞記事に現はれたところを綜合して、多分其奴は大學校の教授だらうと言つてやつた。所が後になると、その正體はブリキ屋であることが分つたので、結局探偵小説家の推理はちつとも當にならないといふことになつた。そしてその後、東京の近郊では一匹の犬が人間の生首を啗へ出して来たといふ怪事件があつたが、この時はもう誰も貞介を訪ねて来るものが無くなつて了つた。甚だ尤もな次第ではあるが、そこで成毛貞介に關しては、次のやうなお話もあるのである——。

さて、銀座にはおよそどんなものもある筈だ。緑色の氣持のよい草原などはないとして、

古いものでも新しいものでも、生きてゐるものでも死んでゐるものでも、これを試みにMと呼ばれる大百貨店へ入つて見ると、地階から始まるものの陳列は、遂に屋上に到つてアフリカ産のベリカンとライオンとに達するし、更にその屋上から俯瞰すれば、モボモガは言はずもがな、あらゆる美醜貴賤の類型を見ることが出来る。とすれば、その朝成毛貞介が非常に早く、その銀座通りを歩いてゐたといふことは、格別不思議なといふ程でもあるまい。兎に角お話は、成毛貞介の言葉借りると、「銀座が森林のやうに眠つてゐた」程にも朝早く、彼が新橋寄りから尾張町へ向つて、あの右側を歩いてゐたといふところから始まるのである。

流石の銀座も、貞介以外に殆んど人通りらしいものはなかつた。どの店も、窓へは昨夜のままの鎧戸がひっそり閑と下ろしてあつたし、見渡したところ街の方も、ひどくがらんだうなものであつた。そして貞介は、實をいふと、はじめからして何かの異常事件にでも出會しやうな、一種の豫感めいたものを有つてゐたのだ。恰度彼が、前に一寸引合にだけ出して置いたM百貨店、あそここの帯黄褐色の壁面に沿つて、ぶらり／＼とやつて来た時、彼はその正面入口に近いところで、一匹の犬が頻りと何かにぢやれつてゐるのを發見した。素晴らしい毛並の、颯爽たる耳と尻尾とを押し立てた、いかにも剽悍なシェパードだつた。貞介はひよいとそこへ立ち停つて、ヒ

ユツ、ヒュツ、と口笛を鳴らしたのだが、するとそのうちに、彼はギョクンとして眼を睜つた。犬がその逞しい前脚でぢやれてゐたのは、最初彼はそれを茸のやうなものだと思つた。が、だんだん腫を据ゑて見ると、紛れもなくそれが人間の耳であつたのである。犬に噛まれたのか、それとも元からさうであつたのか、その耳は端の方が泥と血とで無残にうぢやぢやけ、だが、全體として不氣味に蒼ざめたものだつた。強いて茸に假令へれば、初茸といつてもよいであらうか。只、耳朶と思はれるところだけが、血とは違つて、一種鮮かな紅の色に染められてゐる。貞介はそれをはつきりと認めたのだつた。

「ウワア！」

と貞介は叫んだ。

それから又氣がついて、叱ッ叱ッと犬を追つた。

犬は狡猾な眼付きで貞介を眺め、と、忽ちその耳をバクリと啜へて、一散に尾張町の方へ駈け出して行く。續いて貞介が、バタ／＼とそれを追ひかけたのである。

二

こゝでこんなことを言ふと、少しく感興を殺ぐ懼れもないではない。が、成毛貞介の足は扁平足といふ奴であつた。學校を卒業した時徴兵検査を受けに行つたら、検査官が、こんなへホイ足ではいくらも歩けまいと言つた。貞介は、なにこれでも一生懸命になると一日に二里や二里半は歩きますと答へて、それで轡重輪卒にして貰つたのである。その貞介がシエファドを追ひかけたところで、結局逃がして了ふといふことは、最初からして明かだつた。七分の後に、彼は尾張町の交番で、そのの巡査と次のやうな押問答を始めたのである。

「君が悪いよ。何故君ア僕に手傳つて呉れなかつたのだ？」

「しかし、犬を捕まへるのが我々の職務ぢやないんです。」

「無論さうさ。だが、その犬が人間の耳を啜へてゐたといふことは——」

「啜へてゐたか啜へてゐないか、それがはつきり分つてゐないでせう。見間違ひといふこともありませんし——」

「そんなことはない。慥かに僕がこの眼で見届けたんだ。」

「あなたが見届けても、私は見届けてをりません。」

「だからさ、だから君が手傳つて呉れ、ばよかつたんだ。」

「いや、あなたが犬を捕まへて、それから見せて呉れた方がよかつたのです。」
 「それア、さう行けば無論その方がよかつたのさ。だけど、犬が逃げて了つたのだから。」
 「でせう？ だからです、我々だつて譯も分らずに、犬を捕まへるお手傳ひなんか出来ないのです。」

「いやさうぢやない。兎に角捕まへて呉れさへすれば分つたんだ。」
 「いゝえ、捕まへる前に分つてゐなくちア困るんです。」

いくら繰返しても同じことで、巡査の言葉にも一理はあつた。彼等は犯罪の容疑者といふものを、さう／＼迂濶に捕まへてはならぬことを知つてゐる。相當な證據が揃はぬ限り、逮捕命令といふものが出ないので、これは前言つた落語泥棒の場合にもその好適例があつた。ちよいと密告された位で、すぐさま容疑者をひつくる譯には行かないのである。犬が銀座通りを走つたからといつて、一々巡査が飛び出すことも出来ぬであらう。——が、成毛貞介に言はせると、この時彼は腹を立てた。巡査は、「理由もなしに」それが貞介の間違ひであつたことを主張し始め、遂に彼は一人つきりでM百貨店の方へ引返して了つた。巡査は、彼と一緒にさへ來ては呉れなかつたのである。

貞介は無論、先刻の場所で自分の言葉を立證するに足る、何かの證據品を探し出す積りであつた。街は相變らず静かだつたし、人通りの爲に現場が荒されさうな愁はなかつた。それで彼はせかく／＼と、まだ鐵の大戸を下ろし切つたまゝになつてゐる、M百貨店の正面入口へ近づいて行つたが、するところの時、彼はその鐵の大戸に倚りかゝつて、まるで貼り付けられたやうな一つの人影を見た。黒い帽子に黒い外套。だが、ハツとして見直すうちに、彼は頗るそれを意外に感じた。その人物といふのが、嘗て彼の高等學校時代の友人であつた。そして今はカトリック派の牧師になつてゐる筈の、正田悟郎といふ男であつたのである。

「やア、どうしたんだ。妙なところにあるぢアないか。」
 頭の隅ではチラリと不審に思ひながら、貞介が何氣なくかう言つて近づくと、正田悟郎はハツと狼狽の表情だつた。

「お、成毛か——」
 と、答へて、彼はその色の悪い唇をヘンに歪めた。

「ひ、久しく君にア會はなかつたナ——」
 「全く——」

言葉が咽喉に引掛つて、お互に妙な氣持であつたといふ。二言三言話するうちに、疋田悟郎はひよいと帽子を脱いでお辭儀をした。

「僕、これで、これで失敬するよ——」

「え？」

「又、又いつかお訪ねする。」

疋田悟郎は脊の高い男である。その黒づくめのひよろ長い影が、灰色のペイヴメントをふらふらと踏んで、だが見る／＼遠ざかつて行つて了ふのを、成毛貞介はポカンとして見送つたのだつた。

三

成毛貞介がそれから後、果してどんな行動をとつたのか、又どんなことを考へたのか、それは追々に分るとして、こゝでは疋田悟郎について、簡単な説明をした方が便利であらう。これは貞介の友人中一番變つた男であつたのである。

どこが變つてゐるか、その第一には、彼が高等學校を途中で退學し、幾年か後にはカトリック

派の牧師になつたといふ事實を擧げることが出来る。が、それよりも一段と際立つた特色は、彼が一年間を通じて、春から秋の終りへかけて、殆んど絶對に戶外へ出ないといふことであつた。高等學校の寮にゐて、教室へ通ふ時には、どんなに遠廻りをして、必ず屋根のある廊下を通つた。是非とも戶外へ出ねばならぬ、體操の時間は全部休んだ。それから又冬になつて、この期間だけは外出したが、それも雨の降る日かひどく曇つた日に限つてゐた。そしてそんな時には必ず黒い度無し、それも飛行家用の塵埃除色眼鏡を掛けて出た。天氣のよい日に、或る男が無理矢理彼を誘つて見た、すると彼は眞蒼になつて怒つたといふ。——怒つたと云へば貞介も一度、彼に煙草を勧めて怒られた。煙草はゴールデンバットであつたが、箱から一本をつまみ出して、貞介は、どうだい？ と軽く言つただけのことである。疋田悟郎は矢張り眞蒼になつて怒り出し、それから二階の寢室へ行つて、糞蟲のやうに蒲團の中へ潜り込んだのだつた。何故彼がその時に怒つたのか、今に至るまで理由が分つてゐない。並べると、さうした例は幾つでもある、が、兎に角、さういつた風の男であつたのである。

で、成毛貞介がM百貨店の前で疋田悟郎に會つてから、恰度一週間経つた時である。それはじとくと雨の降つてゐる日であつたが、貞介は突然に疋田悟郎を、彼が住んでゐるといふ或るア

アパートメントへ訪ねて行つた。最初には教會へ行つたのだが、そこでは疋田悟郎がつい二三日前に牧師を廢めたことを聞かされたのだつた。——アパートメントは粗末ながらも洋式でしかし最も採光の工合の悪さうな室に、疋田悟郎の標札が掛つてゐた。中は二室か三室に分たれてゐる。その取付の狭い室に、すつかり扉を閉め切つた疋田悟郎が、一人きり暗然たる顔をして成毛貞介を迎へたのである。

「こないだはどうも——。さうく、あれアM百貨店の前だつたね。」

貞介は先づこんな風に口を切つた。そしてポケットからバツトの箱を取り出した。

「どうだい、矢張り煙草はやらんのかい？」

「あ、やらん。」

ぶつきら棒に答へた疋田悟郎は、一寸不機嫌に壁の方へ眼を外らしたが、それから取つて付けたやうに言つた。

「あの時ア僕失敬して了つたんだが、君、今は小説を書いてゐるんだつてね。面白いだろ？」

「一向に面白いこともないんだよ。殊に種の無い時などはね——」と言ひかけて貞介はふいに眼をキラ／＼と輝かせた。

「さうだ、さう言へば、僕、最近に素敵に面白い小説を書くよ。」

「へええ、どんな？」

「つまり、近代的な犯罪を取扱つたものなんだが、早く云ふと、あのM百貨店なんかいゝ材料だ。あそこにはね、今日偶然に思ひ出して探したんだが、三ヶ月ばかり前に面白い事件があつたぢやないか。」

とほけた顔で貞介がかう言ひながら、内ポケットから大切さうに取出したのは、その前の年の十二月四日といふ日付のある、次のやうな新聞切抜だつた。

——旭プロダクションのスター女優立花玲子の失踪事件に關してはその後の調査によつて玲子が當日M百貨店へ行つたことが知れて來た。同店エレベーター運轉手の證言によると、彼は立花玲子が當日午後二時頃グリーン地に縁だけを太く白くつたマーガレット・オーバーを着てエレベーターに乗り、六階でそのエレベーターを降りると同時にその右手横にあつた化粧室へ這入つたのを見掛けたといふ。そのマーガレット・オーバーは化粧室の一隅に新聞紙に包んで捨て、あつたのを掃除夫が発見して祕かに自宅へ持ち歸つたことも確かめられ——云々

疋田悟郎にこれに讀ませながら、貞介はそつと對手の顔を窺つてゐた。そして疋田悟郎は讀み

終ると同時に、ニヤリとへんな笑ひ方をしたのである。

「どうだい、面白いだらう？」と貞介が言った。「當時は相當評判になつた事件だぜ。——その立花玲子つてのは、君だつて無論知つてるだらう。」

「あ、知らないこともないやうだ。」

「つまりだね」と貞介は正田悟郎がもう一度その記事を讀み直すのを眺めながら「當時はその立花玲子の行衛がどうしても分らず、結局、自分自身で化粧室内で變装し、そのまゝ何處かへ姿を隠したのだらうといふことになつたのだ。後から種々の噂が出て、その中には彼女が妊娠してゐたなんていふ奴もゐた。妊娠しては人氣に障るし、それで身を隠したんだらうなんて、ね、そんな風な噂だつたぜ。」

「ま、まアさうだつた、と僕も思ふ。が、そこで君は、こんなものを小説の種にするのかね？」

「さうだよ、非常に面白い種ぢやないか。僕の考へだと、そいつを殺されたことにして了ふんだ。」

「え？」

「吃驚しなくつてもいゝよ。これア僕の空想なんだから——」

貞介はポツンと言葉を切つて、だが、幾分か氣の毒さうに對手の顔を覗き込んだ。

四

多分この時貞介は、正田悟郎がこの上もなく狼狽することを豫期したのでらう。だが、その豫期は美事に外れた。無論、正田悟郎は顔色を變へた。が、すぐにそれを元へ戻して、再びニヤニヤと頬を歪ませたのだつた。

「なるほど、そいつは面白い空想だね」と彼は言ふのである。

「しかし、ではどんな風にして殺したことにするのかね？」

貞介は頸を前へ突き出して、従つて兩肩をぐいと後ろへ引いた。これは彼が怒つた時の癖である。

「そんなことは譯がないよ！」

「譯がないつて、ほう、どうするかね？」

「言つてやらうか？」

「あゝ、聞かして呉れ給へ。」

貞介はそこで又バットの箱を取り出して、その一本を亂暴につまみ、スパクと激しく煙を吸

ひ込んだ。疋田悟郎は顔を反向ける。貞介は鳥渡の間黙りこくつて、それから漸く多少の落着きを取り戻した。

「いゝかね、これは近代的な犯罪と見せかけて、その實最も野蠻な犯罪に當るんだ。君はあのM百貨店に、どんなものでもあることを知つてるだらう。」

貞介は突然にぺら〜と喋り始めた。M百貨店の地階にはどんな商品が陳列されてゐるかを話し始め、だん〜に一階二階三階と昇つて行つた。

「〜で、愈上屋上だ。屋上には君、何が置いてあるか知つてるかい？」

「さあ、はつきり覚えてはゐないんだが〜」

「さうかい。」貞介が今度はニヤリとした。「ぢアこれも僕が言ふとして、あそこにね、猿がゐるし文鳥がゐる。小動物園といふ譯だが、従つてアフリカ産のペリカンと、そして三千何百圓とかで賣るといふ、同じくアフリカ産のライオンもゐるんだ。」

「ライオン？」

「分つたらう。僕はそのライオンに立花玲子を食はせるんだ。はつは、どうだい、仲々面白い筋ぢアないか。探偵小説なんか、時々不自然だの荒唐無稽だなんて言はれるが、事實は小説よりも

突飛なことがあるもんだ。ライオンに食はせるなんて、はつはムムム、こいつは確かに面白い筋書きだぜ。」

疋田悟郎は呀ツと驚いた風である。貞介は痛快らしくそれを見やつた。

「驚いたらう、確かに驚くべき犯罪なんだ。近代的な人間が、どうしたつて思ひ付きさうにない方法だけに、誰だつてその秘密を解くことは出来ない。一方から見ユモラスな、しかしそれだけに又戦慄すべき犯罪だよ。——いや、そこで僕は、そのライオンに立花玲子を食はせる時、ライオンが過まつて女の片一方の耳だけを檻の外へ飛ばしたとするんだ。そしてその耳を拾つた男が探偵になる。どうだ、面白いか？」

「面白いね。」疋田悟郎はすつかり落着いて答へるのだつた。「面白いことは面白いが、それで犯人は、その女をどんな風にしてライオンに食はせるのかね？ 化粧室の中から連れ出してライオンの檻へ投げ込む時に、人に見られては困るだらうが——」

「さうか、なるほど。」と貞介は又しても肩を後ろへぐいと引いた。「その點はね、犯人に自白させる時でいゝかと思ふ。だが、要するに犯人は、その女を相當長い間何處かへ隠して置いて、例へばあそこの屋上には給水用のタンクなどがあるだらう。その中へ漬けて置いて、後に人目の少い

時を選んで、つまり午前二時とか三時とかいふ時を選んで、ライオンの檻へ投げ込むのさ。化粧室から給水タンクへは、恰度工合のいゝ抜け道でもあるとして、然も水漬けにして置くと、恰度今は冬だから、案外屍體は長く保つよ。」

「よからう。それで大體のところいゝやうだ。が、次に今度は犯人だ。犯人をどうして探すか、又、殺人の動機は何にするか、それをついでに言つて貰ひ度いものだねえ。」

その時正田悟郎は、さもしく悦に入つたやうな、或は又成毛貞介を殊更に怒らせるやうな薄笑ひを、顔面一杯に漂はせた。貞介はそれを見ると奥歯をギリ／＼と噛み鳴らし、だが、表には同じやうな微笑を浮べたのである。そして、ひどくゆつくりと喋り始めた。

「聞きたいかね、犯人をどんな人間にしたらいゝか、はつはゝはゝ、聞き度いのは無理もないさ。——そいつがつまり、僕の書かうとしてゐる探偵小説では一番面白いところなんだが、だね、僕は立花玲子が化粧室へ残したといふ、マーガレット・オーバーを第一の手懸りとする積りだ。——いや／＼、さう言つて了つては面白くなからう。先づこゝに、非常に變つた男を考へるんだ。その男といふのは、天氣のよい日には決して外出しない。そして已むを得ず外出しても、彼は決して郊外などへは出掛けない。彼はなるべく都會の中心を出ないことにし、——例へば銀

座か丸の内とかさういふところ、然もそこを歩くのに、黒い色眼鏡を掛けて歩く。何故か？ 彼は醫者に言はせると強迫観念又は體質的神経衰弱に悩まされてゐるのだ。」

「……」貞介が鳥渡言葉を切つたのに對し、正田悟郎はサツと顔色を變へて黙つて了つた。「説明しようか——それともよすか？」と貞介は今度こそ勝ち誇つた態度であつた。「まさか、僕がまさかそこへは氣付かないと思つて、はつはゝゝゝ、犯人——その犯人が多寡を括つてゐたわけなんだ。が、いゝだろ？ 僕の説明をゆつくり聞いて呉れ給へよ。何も急ぐことはないのだから。——で、僕はこの犯人が、綠色恐怖症だといふことを言ひ度いのだ。綠色ばかりではない。彼は晴れ渡つた空の色をも極度に恐れる。そして綠色の草原も恐ろしい。近代文化の中心である、銀座を彼が好むのもそこなのだ、そして、さうだ、彼の立花玲子が失踪當日に着てゐたといふ、あのマーガレット・オーバーは何色だつた。グリーン地だといふではないか。ゴールドデンバツトの箱、あれも矢張り綠色なんだ。」

こゝまで喋つて來て貞介は、ふと正田悟郎のぐつたりと頸垂れた姿を見て、靜かにその肩へ手を掛けた。

「分つたか君。僕は、僕は只、小説の話をしてゐるのだ。だから、もう少しゆつくり聞いて呉れ

給へ。——で、僕はその小説の解決を次のやうにする積りだ。犯人は立花玲子を、その着てゐた緑色のマーガレット・オーバーを恐れる餘り、發作的に絞殺して了つた。が、そこには無論同情すべき點が澤山にある。犯人は變質者だ。裁判所まで行くとしても、當然そこは酌量される。そして或は、犯人を病院へ送ることになるかも知れないのだ——」

五

言ひ終つた成毛貞介が、宥めるやうに正田悟郎の顔を覗き込んだ時、正田悟郎は羞恥の色でその顔を眞赦にしてゐた。

そして、だが、思ひ切つたやうにその眞赦な顔を振り上げた時、正田悟郎は次のやうに言つた。

「ありがと。僕は、僕が君の言ふ通りの變質者だといふことを明かに認める。隠してゐたんだ。氣まりが悪いので、誰にもそれを言はなかつた。が、君、君はその小説の筋を次のやうに變へる積りはないか？」

「え？ どんな風に？」

「どんな風にといつて、さうだね——」正田悟郎はそこで室の一隅に置いてあつた、古びた眼覺

し時計をチラリと見た。「五分、五分待つてゐて呉れ給へ。そしたらその小説の結末をつけるよ。」

成毛貞介は一寸何のことだか分らなかつた。迂濶と言へば迂濶でもあるが、ものゝ二三秒ぢつと正田悟郎の顔を眺めて、そのうちにハツとしたやうに對手の腕を押へつけた。

「君、馬鹿なことをするんじゃないぞ。な、なにも僕は、そんな積りで來たんぢやない。自首だ。自首をさせやうといふだけなんだ。君を殺させる位なら、僕は、僕は——」

「違ふ。違ふよ！ 自殺なんかしやアしない。」

「え？ ぢア——」

「だからさ、小説の結末をつけるのさ。」

悪く落着いてゐるだけに、貞介はふと氣味が悪くなつた。思はずサツと飛びしつた時である。この一室の外に蹺音がして、すると扉がギーツと鳴つた。

「只今」と言つて、「あら、お客様だつたの？」

開いた口が塞がらぬ程にも驚いたことには、そこへ現れたのが、花のやうに明るい立花玲子の笑顔であつた。

「ハハ、ハハ、ハ、、、」

と疋田悟郎が、始めて腹の底から笑ひ上げた。そして彼は、立花玲子の腕から、毛糸の玉にくるまつた、赤いく、眞赤な顔の赤ん坊を受け取つたのである。

「成毛、分つたかい。小説の結末を、こんなことに變へて貰へまいか。——ところで實は、その犯人と思つた男が、身は嚴格なるカトリック派の坊主なものにも關らず、女優立花玲子をして妊娠せしめた。人氣の劣へるのを恐れた女優と、和尚から破門されることを心配した破戒僧と、二人が相談して女優を失踪させた。そしてその失踪先が、M百貨店から程近い、或る病院の一室であつたのが、最近に於て、二人は遂に同棲することに覺悟を決めた、人氣と宗教と、二人がお互に捨てることに同意したんだ。但し女優が、當日その良人が甚だしく忌み嫌ふ緑色のオーバーを着て來たのは、殊更人眼に目立たせる爲、それを選んだことにしたらいゝだろ。」

棒立ちになつた成毛貞介は、そのうちにふと氣がついて、まじく女の見詰めたといふ。それは美しい頬の兩側に、間違ひもなく附いてゐた。M百貨店前、シエフアドが唾へて行つたのは、果してほんとうの耳であつたか否か？——兎に角成毛貞介は、探偵小説家ではあつても、實際の探偵ではなかつたのである。

山野先生の死

要太郎は、咽喉のところへ何かの固まりが込み上げて来るのを、堪らへ堪らへて、やつと同級生總代の弔辭を讀み終りました。

弔辭をお焼香臺の端つこに載せてから、くるりと向きを變へると、眞赤な袈裟の坊さん達の後ろに、づらりと並んだ村長さん、校長先生を始め他の先生方や役場の人達、そして校長先生よりも豪らさうな見知らぬ顔の紳士などが、一齊に自分を見守つて居るのでした。雨天體操場の中に一杯に並んだ數百人の生徒の間からは、鼻水を啜る音が聞こえ、それを耳にすると、要太郎の眼もたうと、ぼーつと霞んで了ひました。それでも見當を間違へずに、自分の席へ歸りました。が、そこで要太郎はこつそりと、湧いて来る涙を手の甲で拭き取らねばなりませんでした。

二段にも三段にも高く積み上げられた壇の方を見ると、コスモスの花束や金銀に光る造花の奥に、三つの靈柩が据ゑられて、其の白い輪廓が靜かな呼吸を續けて居る様にも見えませんでした。ゆら

ゆらと漂ひ昇る線香の煙のせいかわらぬとも思ひましたけれど、要太郎にはその柩が、眠つてる牛物としか考へられませんでした。今にもあの棺の蓋をグンと突き上げて、勇ちやんがワーツで大聲を立てながら、自分達の方へ飛び降りさうに思へたり、山野先生がひよつくりと顔を出して、あの懐しい笑みを浮べ、キラリと眼鏡を光らせさうな氣がしました。向つて右手の棺の上、ひよいつと黒い圓いものが……あつ！ 花枝さんだ！ と要太郎は危く聲を出すところでした。でも、お下げに結つた花枝さんの頭と見えたのは、チロ／＼と、風も無いのに揺れる蠟燭の灯影に、重なり合つた柵の葉が作る不規則な影で要太郎は幾度も眼を擦つては見直したのですが、矢張り二つの棺はじつとした儘でした。

勇ちやんとは、つい一昨日の朝、キヤツチボールをしたばかりだったし、山野先生とは、これも一昨日遊びに連れてつて貰ふ途中、手拭ひの先端で瘤つ玉を拵らへて打ちつこをしたばかりでした。——手拭の瘤つ玉がはずんで先生の顔へ當ると、眼鏡の硝子が何處かへ飛んぢやつて、先生が大變に困つた顔をなすつたつけ、いゝ先生だから叱られなかつたけれど、随分の近眼に違ひない——などと、要太郎にはまぎ／＼と新しい記憶が蘇つて来るのでした。そしてそれ等の思出を迎れば迎る程、山野先生や勇ちやん、それに花枝さん迄が三人も揃つて、急に物も言へない

死人になつて了ふなんて事は、まるで嘘としか思はれませんでした。

「皆さん——」といふ聲がして、要太郎はふと気が付きました。壇の隅つこに瀬田先生が立つて居るのでした。

「皆さん！ 皆さんに一番親切で優しくかつた山野先生、又皆さんと一番仲好しだつた勇吉君や花枝さんは、かうして佛様になられて了ひました。山野先生がどんなに良い先生であつたかは、皆さんがよく御承知でせう。私はこれから山野先生がどんなに立派な御最後を遂げられたか、詳しくお話する積りです。」

かう言つて瀬田先生は鳥渡話を切りました。山野先生と一番仲好しだつた瀬田先生も悲しいのでせう。黒光りのする髪の下に、深く落ち込んだ眼が、自分達の方へ向けられずに、じつと考へ込む様に脚下へ注がれて居ました。青い青い頬の肉がびくびくと動いて居ながら、中々次の話が始まりませんでした。要太郎は、山野先生がお亡くなりになつた日の事を、よつく覚えて居りましたが、瀬田先生のお話をも、一言も聞き漏らすまいと決心して、次のお言葉を待ちました。

コロン、とかすかな音を立て、瀬田先生は片脚だけ動かした後、やつと又口を開きました。

「一昨日、私と山野先生とは、校長先生のお許しを得て、五年生を連れ、長田川へ遊びに参りました。先日の洪水もすつかりと減いて了つて、川の水は青く澄んで居ました。そして私達二人は皆さんと少し離れた場所の草原に腰を下ろし、皆さんの元氣な水泳ぶりを眺めながら、種々と話し合つて居たのです。」

「その時でした。山野先生はガバと立ち上り、いきなり河原へ飛び出したのです。キラ／＼光る砂利の上を、見る見る山野先生の姿が小さくなつて、一散に向うへ駆けて行くのでした。そして山野先生が走り乍ら、順々に脱いで投げ散らす袴や帯や着物などか、河原の上へ飛び飛びに残されました。氣狂ひ——皆さん。私はその時山野先生が氣狂ひになつたのかと思つたのです——氣狂ひの様に行き先生の後姿を、私は暫くぼんやりと見送りました。が、やがて、何かしら悪い事が起つた様に思つた私は土手へ駆け上り、すつと向うを見渡しました。するとまあどうでせう。あの恐ろしい鏡が淵に二人の子供が溺れかゝつて居るではありませんか！

「私のはつとして土手の上に立ち竦んだ時、山野先生がパツと白く飛沫を上げて、水の中へ飛び込むのが見えました。ところが皆さん、どうしたのでせう、今迄で溺れかゝつて居た二人の子供は、流れを横切つてスツスと腕を水面に現して、美事な抜手を切り始めたのです。其の瞬間、私

は二人の子供が勇吉さんに花枝さんである事に氣付いて、ほつと胸を撫で下ろしました。あの遊
 き上手な二人ならば、山野先生が行く迄もない、大丈夫だ。二人は悪戯に、溺れる眞似をした
 けなのだ。とかう思つた私は、安心し切つて猶向うを見續けたのです。然し皆さん、私の安心は
 永く續きませんでした。ふと眼を留めて見ると今度は山野先生が溺れかゝつて居るではありません
 んか。そして山野先生だけが一つ處に止まつて、一旦向ふ岸に上つた二人の子供が上手へ走り、
 そこからぐんぐんと山野先生の所へ遊び始めたのです。其の時まで、山野先生がまるつきり遊び
 の出来ない人だつた事に氣が付かなかつた私は、何といふ愚者だつたでせう？
 「皆さん、私が氣付いた時にはもう遅かつたのです。私はすぐと山野先生の跡を追つて走りまし
 たけれども、もう間に合ひませんでした。一生懸命で其の方へ駆けて居る最中に、私は三人の悲
 しい最期を見て了ひました。

「二人の子供が山野先生へ大分近寄つたなと思つた時でした、何の加減か二人は先生を中心にし
 てぐるぐると廻り始めたのです。すぐと先生へ手が届きさうで中々届きませんでした。底力のあ
 る凄いの響に混つて「助けて——」とか「近寄るなつ！ 危い！ 向うへ行けつ！」といふ聲
 が切れぐに聞えて來ました。そして私か、水際までもう五六間といふ所まで駆け付けた時、遂

に二人の子供は、やつと山野先生の肩へ捉まる事が出來た様子でした。ほんの僅かの間、三人が
 そこで腕を絡み合ひました。さうして皆さん。さうしてそれ切りだつたのです。私が水に躍り込
 んだ時には、あその深い碧い水が、其の名の様にびたりと鏡の様に静まつたまゝ、然も強い力
 で流れて居ました。そして三人の姿が呑まれたと思ふ邊りには、恐ろしい渦巻きが、一分間に何
 十石といふ水をでも、地の底へ呑むかの様に、凄い口を開いて居つたのです。

「勇吉君と花枝さんとは最初その渦巻から離れた處で遊びで居たのでせう。そして皆さんのよく
 遣る様に、溺れる時のアップアップの眞似をしたゞけなのです。山野先生はそれと氣付かず助
 ける積りでした。けれども先生は洪水の爲に出來た渦巻きの事を知りませんでした。そして勇吉
 君と花枝さんは、渦巻きにかゝつた先生を助ける積りで、その方へ遊びで行つたのです。助ける
 者同志で溺れて了つたのです。

「あの渦巻きは、たつた二日前に出來たばかりのものださうですが、私もその事を少しも存じま
 せんでした。でこれは仕方がないとしても、山野先生と一緒に私が駆け出したら、こんな事には
 ならなかつたでせう。私は残念で堪まりません。然し皆さん、三人共に揃つて立派な心懸けを持
 ち、御手本になる最期をお遂げになつたのです。どうか皆さんはこのお話をよく覚えて歸り、こ

の儘、ちつとも間違はずにお父様やお母様に聞かせて上げて下さい……」
 から話し終つた瀬田先生は、眩暈がするののか、よろ／＼と壇を降りました。そして山野先生に心から懐いて居た要太郎達は、又新しく鼻水を啜り上げるのでした。

二

山野先生の校葬が済んでから三日経つと、暑中休暇でした。一週間前の出来事は忘れられたかの様に、もうそこは要太郎達の仲間の、奔放な生き生きした天地でした。流石に遊びに行く者は少なかつたけれど、田圃の間の小川へ替へ干しに行つたり、鎮守の森へ蟲取りに出かけたり、隊を組んでは茸狩りに、露深い松林へ分け入る日が續きました。

だが、要太郎だけは、何故か皆と一緒に遊ぶ氣になれませんでした。何をしても面白くありませんでした。勇ちゃんの居なくなつたのも淋しいし、大好きな山野先生のお話も聞けなくなつた事も、確につまんなかつたのです。けれ共今になると、不思議に頭の中にこびりついて、要太郎を淋しがらせたのは、花枝さんが生きて居ない事でした。

花枝さんとは、ずつと前に随分仲が好かつたのです。要太郎の一家が東京からこの田舎へ移つ

て来たのは三年程前の事で、それから間もなく要太郎は、綺麗な東京言葉を使ふ花枝さんを見出し、それから可成り永い間仲好しでした。けれ共、五年になると組が別々になつたし、變な事からふとした隔てが出来て了つて、近頃は餘り一緒に遊びませんでした。それは四年になつた時の事です、山野先生が生徒の机を定めて呉れました。先生はその時、花枝さんと要太郎とを一つ机に並べたのです。二人が並ぶと、何故か他の生徒がパチ／＼と手を叩いて囃し立てました。すると要太郎は、花枝さんなんかと並ぶのは厭だと駄々を捏ね出して、花枝さんのつまらなさうな顔を氣にした癖に、たうとう別の人と並べて貰つたのです。でも要太郎は花枝さんが嫌ひではありませんでした。そして今になると、一層花枝さんの事が思ひ出されます。

何故だらう？ とそんな事は考へても見ませんでした。然し要太郎は時々獨りきりで土蔵の二階へ上り、小さい窓から眞赫な夕日や神秘的な夕焼雲を眺める様になりました。何事を考へるともなく、たゞぼんやりとしてゐるのですが、ふツと氣が付いて見れば、いつの間にか花枝さんの事を思ひ出して居るのでした。そこいらを歩いて居ると、——要ちゃん、——と言つて、花枝さんがふいに言葉を掛けて呉れさうに思つたり、花枝さんの家の前を通る時は、その中に花枝さんがお母さんの手傳ひをして居る様な氣がして、そつと奥の方を覗いてすら見たのでした。駄々など

言はずに、花枝さんと一つ机に並べばよかつたと、古い事を後悔する事もありました。そして今年としの五月ごごに始めて出した、同級會雜誌どうきぎわいさつしの中に、「お庭の櫻」といふ題の、花枝さんが作った作文を見出した時には、十ぺんも二十ぺんも繰り返してそれを讀んだものです。

花枝さんが明音寺の墓地へ葬られてから十日ばかりを経た或る夜、花枝さんのお父さんが要太郎の家へ来ました。要太郎はお父さんの腰の根に喰付いて少年世界を讀んで居ましたが、お客さんの顔を見ると、ピヨコンと一つお辭儀をして、大急ぎでお勝手の方へ立つて行かうとしました。

「あ、要ちゃんだつたね、まあいゝからそこに居て下さい。」とお客さんが申しました。

「いや、要太郎は彼方に行つとれ、大人の話おとなのわたりを、子供が聞くものぢやない。」とお父さん。

「いや、さう言はれずに、同級だつたといふ事も何かの縁でせうから。」

「さうですね。」とお父さんは要太郎に笑ひながら申しました「ぢやあ、お前もサイダーの御相伴になるか。」

お母さんはひどく長つたらしい、めそくした挨拶をした後、要太郎に向つてはニコくし乍

ら一人前の大コップへサイダーを注いで呉れました、「いくつか？」だの「早生れだね？」だの、大人が必らずする質問に答へ終ると、要太郎はガブツと一口サイダーを飲んであたふたと座敷を飛び出しました。花枝さんのお父さんには、とてもきまりが悪くつてじつとして居られなかつたのです。

さうして置きながら要太郎には、お父さんとお客さんとの話が聞き度くて堪りませんでした。果物を運ぶのにも、殊更お母さんの代りに自分が行つたのですが、もう花枝さんのお父さんも、要太郎を引き留めては呉れませんでした。

「つままないや。」と要太郎は呟きながら、茶の間で先刻讀みかけの、荒木又右衛門の話を読み始めましたが、今度は更に興味がありません。蠅叩きで、そこに居たたまの頭を軽く叩くと、ニヤンと甘える様に鳴いてたまは勝手へ行きました。鳥渡思案した後、戸棚からフィルムを取り出して一々電燈に透しては、チャップリンはチャップリン、松ちやんは松ちやん、ロイドはロイド、と區別けを始めましたが、どうも奥の話が氣になつて仕方がありません。

たうと、要太郎は思ひ切つて庭へ降りました。植込みの間を抜けて行くと、やつと花枝さんのお父さんが見えました。蚊がぶん／＼と脚の方へ集まるのを追ひ拂ひながら、要太郎は縁側の

傍の南天の下へ潜り込んだのです。

「……といふ譯ですから、その子供の言ふのは確かです。瀬田といふ教師が花枝に、鏡ヶ淵で遊げるかだの、双手を水の外へ出して立ち遊びが出来ると聞いたさうで、それをその子が傍で聞いたのです。」

と話は果して花枝さんに關係した事でした。

「で、花枝さんが鏡ヶ淵で溺れる眞似をしたといふのですな。それでは瀬田さんが溺れる眞似をさせた事になりますね。」とお父さんが團扇をバタ／＼動かしながら言ひました。

「さうです、それだけでもあの教師が大きな過失をして居ると言へるではありませんか。それに當日山野さんが眼鏡を壊した爲に、水泳の場所ではそれを外して居られたとの事です。山野さんは可成ひどい近眼でしたから、眼鏡が無ければ到底土手から鏡ヶ淵までをはつきり見透せない筈です。で、私は瀬田さんが最初に二人の子供を發見して何か叫び、その次に山野さんが走り出したといふ噂が、本當ではないかと思ふのです。」

眼鏡を壊した覺えのある要太郎は息もつかずに、頸を縮めて居ましたが、いゝ按配に話は眼鏡から外れました。

「とすると、校葬の際の目撃談とは大分違ひますね。」

「さうです。ですから私も怪しいと思ひますので。」

「なる程、貴方の聞き込まれた噂が事實とすると、これは大問題ですねえ。然しどうも噂ばかりでは……」

「いえ、噂も事に依りけりです。殊に山野さんの生前から瀬田さんと山野さんの奥さんとの間は妙な評判もあり、又裏面では、二人が主席訓導を争つて居たのは事實ですから……」

「えゝ、其の事は私も耳にして居ます。然しかう云ふ事は餘程慎重に調べませんと、所謂疑心暗鬼から飛んでもない事件を捏造する様な事にもなりますから……」

「と、言はれると、私が花枝を失つた悲痛の餘り、下らん事を考へ過ぎるとでも被仰るのですか？」とお客さんの語氣が少し荒くなり、ギシンアンキつて何の事だらう？ と考へて居た要太郎はドキンとしたものです。

「いや決して。」とお父さんは少し狼狽した風でした。「決してさう云ふ意味ではありません。只充分慎重に、と申上げるので。」

「左様、それは御言葉通りです。で、實はお宅の坊ちゃんにも、その當時の状態を貴方から訊ね

て見て戴き度いと存じて参つたのです。」
 「承知しました、要太郎にそれとなく聞いて見ませう。あれは少し神経質な子で、改まつて聞くとはつきり返事が出来ない性質ですが、うまく訊ねて見ませう。」
 お父さん嘘言つてらい、僕なんか何でも正直に言つちまふんだから、と要太郎は少し不平でした。

「さう願へれば結構です。何分迂濶な事は言ひ出せませんし、かうして御助力をお願ひする次第です。では……」

と言つて、お客さんはもう立ち上る氣配、要太郎にはこの會話の大部分が判らない事だらけでしたが、大急ぎで南天の蔭を抜け出しました。

そしてその夜、要太郎は、お父さんが今にも自分を呼ぶか、呼ばれたら、うんとはつきり返事をしてお父さんを吃驚させて上げなければならぬなどと、心待ちにして居ましたが、お父さんはお部屋で、いつまでも考へ事をなすつた儘でした。

おしまひに、要太郎は眠たくなりました。裏へ出て螢を四匹捕へて来て、蚊帳の中へ放し、自分は大の字なりに寝て、ピカリピカリと明滅する螢を眺めて居ました。いつか蚊帳の隅から

無數の美しい球が、銀河の様に流れ出して、それが運動會の五色の旗に變りました。ひらく／＼ひらく／＼、風に靡く小旗の數々、赤、青、黄、紫、……そして凡てが混り合つた形だけの旗、ひらく／＼。

要太郎は眠つて了つたのです。

三

翌日、要太郎は「山野先生」といふ作文を書き上げました。山野先生が亡くなられると、今迄女の組の受持ちだつた瀬田先生が、要太郎の組まで受持つ事になり、先生は早速この作文を休暇中の宿題に出したのでした。

出来て了ふと、いつもの様に、要太郎はお父さんに其の作文を見せました。

「ほう、中々上手に出来ました。だが山野先生の亡くなられた時の事が一つも書いてない。」

「だつてえお父さん。瀬田先生が校葬の時に、皆んな話して了はれたんですもの。」

「それでも書けばいゝぢやないか。自分の見た儘をね。」

「うゝん、先生はね、校葬の時のお話をそのまま書いてもいゝつておつしやつたけれど、そいぢ

やあつまんないんですもの。」

「それで書かないと云ふのだね。では瀬田先生のお話には一つも、……いや先生のお話の通りだつたのだね。」

「さあ……」と要太郎はお父さんの眞似をして仔細らしく小首を傾げました。昨夜のお客さんの話は、眼鏡の事以外、要太郎にも初耳でしたが、それとは別に、たつた一つ、要太郎にも俯に落ちない所、それを言つたものかどうかを、思ひ迷つたのです。

「どうしたのだ、正直に言つてごらん。」とお父さんは幾分改まつた顔で聞きました。「瀬田先生のお話通りだつたらう？」

「うゝん、違ひます！」要太郎はこゝでお父さんを吃驚させなくてはならないと、決心しました。「お父さん、違ひます！」

「違ふか？ 何處が違ふのだ？」と果してお父さんは急に熱心になつたらしく、顔を突き出して來ました。

「ちつとばかり判んないところがありますけれど、ねえお父さん、長田川では、大きな鯉は鏡が淵だけにしか居ないつて、お父さんおつしやつたですええ。」

「な、なんだつて？」とお父さんが今度こそ本當に眼を圓くして吃驚した様子に、要太郎は大得意でした。そして「うん。」とお父さんが合點くを見てから言ひました。

「ぢやあ、巻つ込んぼしのお話だけ、瀬田先生は嘘吐いたんだ。」

「巻つ込んぼしつて？……あゝ、鏡が淵の渦巻き的事だね。」

「ねえ、お父さん、あの巻つ込んぼしは、文ちゃんか、鏡が淵の主がこの間の洪水に懲りて、底へ水抜きトンネルを拵らへたんだつて言つたんですけれど、嘘ですええ。僕は、あの巻つ込んぼしが出來たのは、前からあつた小さいのが集まつたのだつて言つたけれども……」

「おい／＼、要太郎、瀬田先生のお話だよ。」とお父さんが、可成奇妙な恰好に笑ひを噛み殺して申しました。

「さう／＼お父さん。さうだつたんですええ。でね、僕がね、瀬田先生に會つた時、先生が大きな鯉を釣つたからつて見せて呉れたのですよ。こんなに大きな鯉でした。」と要太郎は両手の指を使つて魚の形を作つて見せました。

「山野先生の亡くなられた前の前の日ですよ。瀬田先生は鏡が淵で鯉を釣つたのですええ。」
「フム。」とお父さんは、穴の明く程要太郎の顔を見詰めて「ほんとか、それは？」

「だからさあ、お父さん。瀬田先生は校葬の時に、あの渦巻きの事を知らなかつたつて、おつしやつたけれど、嘔吐いたんですねえ。」

「よしつ！」とお父さんが、どしんと机を叩いて申しました。「要太郎、この事を誰にも言はずに、巻つ込んぼしの事に就いて、作文を書いてごらん。瀬田先生が鯉を釣つた話も書くのだ。御褒美は……活動寫眞。」

要太郎はすつかり圖に乗りました。自分の返事がこんなにまでお父さんの氣に入つたらしい事は今迄に見た事ありません。嬉しくつて堪りませんでした。そして、こんな事を聞いて了ひました。

「お父さん、ヂシンアンキつて何の事さあ、教へてよう……」

× ×

それから四五日の間、要太郎の家へは種んなお客さんが訪ねて来ては、お父さんも一緒に何かひそくと相談し合ふ様子でした。花枝さんのお父さん、勇ちゃんのお母さん、村長さん、校長さん、そして校葬の時に見た事のある立派な紳士などが、こつそり集まつて来るのでした。要太郎には、もうお話を立ち聴く事は出来ませんでした。自分のお父さんが急に村中一番豪い人

になつた様な氣がして、愉快でした。それに花枝さんのお父さんは、花枝さんの持つて居た雑誌やお伽話の本を澤山持つて来て呉れたので、それ等を片端しから讀むのも、大それた楽しみでありました。

そして、スイツチヨや蟋蟀が鳴き出す頃、暑中休暇が終り、要太郎は元氣よく學校へ行ききました。然し瀬田先生は見えませんでした。宿題は別の先生が受け取つて呉れましたが、幾日経つても瀬田先生は學校へ来ませんでした。ついにある日「瀬田先生は警察へ連れて行かれたのだ。」との噂を聞いた要太郎は、家へ歸ると、早速お父さんに聞きました。算術の答へと違つて、はつきりした判断が出来なかつたのです。

「お父さん、瀬田先生はどうして警察へなんか連れて行かれたのでせう。巻つ込んぼしの嘔吐いたのが悪かつたのですか？」

お父さんは、いつもよりずつと、優しい眼付きで要太郎を眺め、片手で頭を撫でて呉れながら、かう申しました。

「そうだよ要太郎。巻つ込んぼしの嘘が悪かつたのだ。」

そしてそれ切り、何事も説明しては呉れませんでした。

星史郎懺悔錄

今、窓の外には二人の患者が歩いてゐる。

一人は東第二病棟に向つて歩きつゝ、嚴かなる態度で天の一方を睨んでゐる。彼は早發性痴呆症患者で、その頭の中には常に、神が天の一角にあるといふ幻覺を抱き、これを撃退しようと試みてゐるのだ。他の一人は酒精慢性中毒から來た膽妄症とのことであるが、これは頭に妙な恰好の金網を冠り、際限もなく庭の中をぐる／＼と廻つてゐる。宇宙に充滿する悪性電子といふものがあり、それが彼の腦髓を刺戟すると考へてゐるのだ。

私は今、星瘋癲病院の一室にゐるのである。

私の姓が星であるので、諸君は私を瘋癲病院の院長だなどゝ、或はその様に誤解するかも知れない。が、私は院長ではない。院長たる兄星正郎のために、精神病患者としてこの一室に閉ぢ籠められたのだ。鐵格子嚴重な、總革張りの病室である。脱出は勿論、自殺することも出來な

い。私は全く狂人として待遇されてゐるのだ。

何故こんなことになつたのか、それは詳しい説明が必要である。が、出来るだけ簡単に言つて置く。私は、私が妻の星せい子を殺害したと告白したのだ。すると世間からも兄からも狂人と思はれ、そして兄の病院へ押し籠められたのだ。

兄正郎は屢私に向つて次の如く言ふ。

「お前は氣狂だ。だからお前は、自分の氣狂なのを自覺しない。」

諸君は、兄のこの言葉のうちに、大いなる不合理を發見するに違ひない。この言葉の裏にある意味を、私は決して見逃し得ないのだ。氣狂にはなるほど、自分の氣狂なのが分らぬであらう。然し、自分の氣狂を自覺しないからと言つて、それが直ちに氣狂の證據にはならぬのだ。それが成立つとすれば、人間は全部狂人だといふことになる。私は、私が常人であるといふことを言ひ張れば言ひ張る程、私を益々氣狂にしてしまふところの、兄正郎の心理をこそ、今や怪しまねばならぬ。兄こそ狂人ではあるまいか。或は又、私が告白せる罪を兄が骨肉の情を以て庇ふ爲に、殊更私を狂人たらしめたとすれば、それは全く有難迷惑のことである。

兄の説によれば、私は抑鬱性妄想狂と發越性妄想狂との兩面を兼ね備へた患者であり、その主

として抱くところの妄想は、罪業妄想とのことであるが、私は徒にさうした妄想を抱くものでない。犯さざる罪に怯ゆる如き、それほど虚弱なる精神を有つものでない。私はこの懺悔録によつて、院長の診断を全く覆し得るものと信ずる。諸君は私が狂人であるか否か、従つて又私の告白が真であるか否か、必ずそれを看破して呉れるであらう。

この懺悔録の發表を私に誓つて呉れたのは私の或る友人である。その友人の好意を無にせざるべく、私は院長、看護手等の眼を盗みつゝ、この懺悔録を書く。如何なる方法によつて發表されるか、それは一切私の關せざる所だ。

二

私がせい子を殺害した動機は、簡単に言へば至極簡単だ。私はせい子が大嫌ひだつた。その他には格別の理由がない。私は極端なるエゴイストだつたのだが、せい子程呪ふべき存在もなかつた。少くとも當時はさう思つた。

嫌ふものと言へば、それは人によつて皆異なる。生物に就いて言へば、或る人は毛虫を甚だしく嫌ふ。或る人は蛇を、或る人は蚯蚓を、それぞれ他の人の想像も及ばぬ程に嫌ふものなのだ。私

は幼少から蛞蝓が大の嫌ひであつた。

蛞蝓といふ虫の氣味悪さを、恐らく私程によく知つてゐるものは又とあるまい。あの生物の習性を研究し、さうした氣味悪さに何んの理由もないことを知つても、その感じは全く獨自のものである。かうしたことは、その感じを持たぬ人には、いかに説明しても分らぬものだが、あの生物の有つ、不思議な妖氣と光澤とは、常に私をぞつとさせる。そしてその感じを、私はせい子から絶えず感じさせられた。結婚前の見合ひに於て、私はせい子を一眼見た瞬間、ぞく／＼と身を顫はした。家運挽回の爲めに、どうしても承諾せねばならなかつた結婚とは言へ、私は最初からそれを誤つたのだ。然も理由のない嫌忌と恐怖とであるだけに、私は見合ひの席で感じたその恐怖を、まさかせい子から感受したとは、殆んど知らなかつたのだ。

かくして結婚した私は、この謂れない恐怖以外に、これこそ諸君にも相當理解されさうな、彼女を忌み嫌ふべき他の原因をも發見した。せい子が、近代稀ない貞女型の女であつたといふことがそれである。無論、私はそれを皮肉な言ひ方にしたのだが、彼女は餘りにまめ／＼し過ぎた。そのまめ／＼しさが、比ひなきまめ／＼しさが、私をして彼女を厭はしめたのだ。私に言はせれば、彼女は牛蝨のやうにしつ／＼こかつた。

已むを得ざる場合を除いて、せい子は瞬間たりとも私の傍を離れなかつた。いかなる場所へでも、或はそれが講演會であらうが宴會であらうが、彼女は必ず私をその席まで送り届けた。會が終つて外へ出れば、私は必ず、私を迎へに來てゐる彼女の姿を發見した。

蛞蝓の如くに嫌つてゐた彼女のさうした貞節振りが、どんなに私を惱ましたか、恐らく諸君は了解して呉れるだらう。が、それは決してそればかりではなかつたのだ。家庭にあつても、彼女は極端にまめ／＼しかつた。彼女は私の身支度を、始めから終りまでそれを彼女の手一つで行はなければ承知しなかつた。許さなければ、私の讀書や思索を全然妨げるまでに狂亂した。結婚以來、私は私の身體を自分で洗つたことがない。彼女は私の身體のあらゆる部分を知り盡してゐた。

彼女を避ける爲に、私は屢々一人きりの旅行を樂しまうとしたが、それにも私は失敗した。彼女も持つて來た莫大な富と、彼女の里の勢力とを利用して——その富が、私をして自由に種々の物好きな計畫を樹てさせ、又兄正郎にはこの瘋癲病院を興へたのだが——私のために數名の尾行者を用意して置いた。いかなる邊鄙な田舎へ行つても、どんなに奥まつた宿の一室に隠れても、

多くて二時間程の後には、私は彼女の姿を見出さねばならなかつた。諸君にはそれが信じられぬかも知れぬ。が、それは少しも誇張した事實ではない。私には到底堪へられることではなかつた。結婚して翌日より私は彼女を嫌ひ始め、一ヶ月にして離婚を思ひ立つた。が、勿論彼女は承知しなかつた。貞節であるといふ世間の評判も、意地悪く彼女に味方した。この病院新築中であつた兄は、離婚を思ひ止まる様に懇願した。言ふのを忘れたが、彼女によつてあらゆる窮地から脱した父も、そのことを斥け私に又哀願した。一年間、私はあらゆる努力で離婚を主張したが、遂にそれは諦めるより仕方がなかつた。揚句の果に、私は、せい子を入知れず殺害しようと、堅く堅く決心したのである。

かうした殺害の動機を、諸君は恐らく非難するであらう。私も又非難の價値があると思ふ。が非難されても私は構はないのだ。懺悔録と題した以上、私は決して、自分をよりよく見せようとは思はない。甘んじて非難され、そして刑罰を受けようと思ふのだ。

で、大正 ×年十二月十日のこと、私はある會合よりの歸途、せい子に向つて言つたのである。「伯母さんの見舞ひにM市へ行かう。お前も行くだらうね。」

そしてその夜の十一時、私達はI驛からM市行列車に乗り込むことゝなつたのだ。

三

斷つて置かねばならないが、私はせい子を殺すに就いて、可成の苦心をしたものである。毒殺、絞殺、若しくは過失死に見せかける殺人法、その他種々の方法を、私は綿密に比較し検討した。手に入れ得る限りの犯罪記録と、檢察簿めいた隨筆とを讀んだ。そしてその結果、犯跡の最も完全なる隠蔽は、犯罪が何處にも起らなかつた如く見せかけることであり、殺人罪に於ては、屍體の完全なる隠匿がそれと略同等の効果を有つ。」といふ、既知自明の定理を發見したのである。屍體の隠匿が完全である限り、犯罪は容易には發覺することがない。せい子がその姿を地球上に滅しても、それは單なる行方不明と思はれるだらう。妻の行方不明に對して、その夫が罪を負ふ謂れがない。現場不在證明を作爲したり、或はその他の方法によつて、私が犯人でないことを見せかけるよりも、屍體の隠蔽が最も効果的であることを私ははつきりと知り得たのだ。で、然し、屍體の隠匿は決して生易しいことではなかつた。殺人行爲及び屍體隠匿前後の處置も、可成困難なことではあるが、屍體隠匿を自身、實行上では仲々容易なことではない。屍體

を切斷して撒き散らす方法は、餘りにそれが残忍であるばかりでなく、これまで幾度となく行はれて失敗してゐるのだ。河や海に投入すれば、いつどこへ漂着するかを恐れねばならぬ。床下に埋めて掘り出された例も數多くある。屍體を焼き捨てること、或は藥品で處理すること、それ等は反つて發見され易いと同時に、日本の家屋では容易に行へない。要するに、各種の方法を調べれば、或る特定な事情に對して、必ずず何かの故障があつた。近代探偵術の進歩と、殊に日本の行き届ける警察組織とは、かうした計畫を極端に困難ならしめてゐる。そして犯罪者は、どんなによく計畫した積りでも、必ずず何かの犯跡を残すといふ。私は約三ヶ月餘りを、その思案に過して了つた。

そして、遂に私を救つて呉れたのは、M市に住んでゐる従弟住谷健作から來た一通の書面であつた。健作の母で私の伯母に當る老婆は、前から腎臓を病んでゐたのだが、その頃俄に重態となり、その年のうちにも危いといふ文面であつたのだ。その手紙を讀むと同時に、私の頭の中は、電光の様に閃いた素晴らしい計畫が浮んだのだつた。

「さうだ、これこそ萬全の方法だ！」

私はさう思つたのである。

十一日、M市に着いた私達夫妻は、住谷家を訪れる前に、當分滞在の豫定で、適當な宿を求めることにした。M市にはその北西に城山といふ丘があつて、そこからはM市全體が俯瞰出来るのだつたが、私はぐんぐんとその丘へ登つて行つた。城山の中腹にある、對山館といふ旅館を、私は前から頭の中に選定して置いたのだ。M市の街外れから半里弱、泊り客の少い、他の人家とは全く孤立した旅館であつた。建物は古び歪んでゐた。

陰氣で不便な旅館、然もその離れの様になつた一室に身を落着けた時、何も知らぬ彼女は、流石に氣味悪さうな顔であつた。障子の棧に指をつけて、眞黒に喰付いた塵を私に見せながら、汚いから宿を換へようと言ひ出した。

私は殊更に優しく、次の様に言つたのである。

「こゝは私にとつて思出の深いところなのだ。窓へ来てごらん。ほら、あの谷の中央に黒ずんだ森が見えるだらう。あれは玄妙寺といふお寺なのだ。左手にあるならかな丘から、玄妙寺を越してこの城山まで、私は中學時代にさんく歩き廻つたものなのだ。知つてゐる通り、私はこの市の中學校を出たのだからね。」

實際、私のかう言つたのは殆んど全部ほんとうである。今では餘計にさうであるが、北から南

へ、その邊りをゆるく起伏してゐる丘や谷や、城山の麓から玄妙寺の前を通つてM市へ出る曲り迂つた小徑など、凡て私には思出深い土地だつた。十二月といふ、その地方ではもう大變に寒い季節で、雑木林はさむざむとそよぎ、見る限り荒涼たる景色であつたけれど、私は暫くの間、何事をも忘れてその凄じい風物に眺め入つた。

二日の間に三度程伯母を見舞つたが、十三日の正午、伯母が危篤に陥つた旨の知らせを受け、私達は流石に大急ぎで住谷家へ駆け付けた。が、行つて見ると伯母は既に意識不明瞭である。瘦せさらばへた身體には、既に一脈の生氣もなかつた。

「史郎さんが来て下すつた。」

従弟の健作がかう言つて伯母の名を呼んだが、伯母は返事もしなかつた。看護婦の手にはカンフルの注射筒が冷たく光り、慌しい空氣が、かさ／＼と部屋部屋を駆け廻つてゐた、そして午後一時、伯母は遂に瞑目して了つたのだ。

伯母が息を引き取ると然し私は、その夜のお通夜に出ることが出来なかつた。頭痛が激しいと言つて、對山館へ引き取らねばならなかつた。葬式がすぐその翌日行はれることになつたので、私は急に忙しくなつたのである。かねての計畫は伯母の葬式の前夜に行はねばならない。その